

## 第Ⅲ章 美乃利遺跡の調査成果

### 第1節 既往の調査

美乃利遺跡は加古川下流域左岸に形成された自然堤防上に立地し、溝之口遺跡の北東に位置する。

一級河川加古川水系別府川中小河川改良事業の計画に伴い、昭和63（1988）年度に工事対象地区のなかで加古川町美乃利から同大野までの約2.2kmについて兵庫県教育委員会が分布調査を実施した。調査の結果、工事対象範囲のほぼ全域で遺物の散布が認められたため、この範囲の確認調査を実施することになった。

昭和63（1988）年度と平成元（1989）年度の2回にわたって県教委が確認調査を実施した。調査の結果、遺構・遺物が確認されたため、この範囲の全面調査が行われることになった。

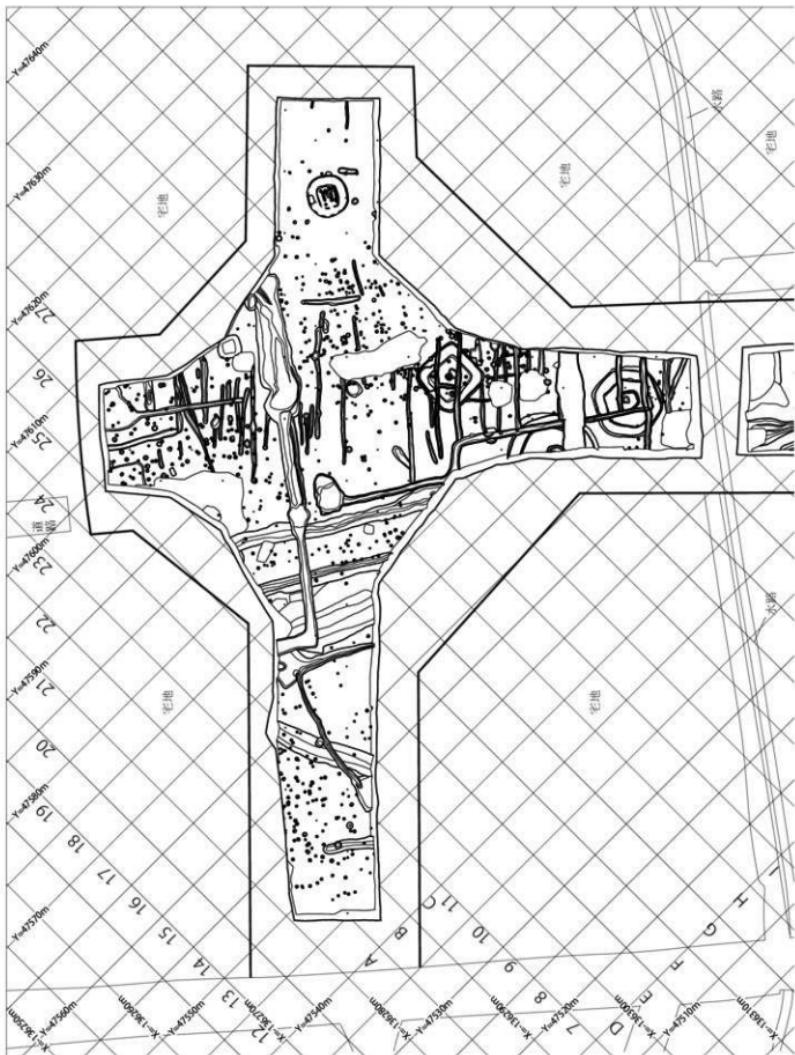
全面調査対象範囲が約6,500m<sup>2</sup>と広範囲であったため、平成2（1990）年度と平成3（1991）年度の2箇年にわたって、調査区を5地区にわけて、県教委が発掘調査を実施した（第36図A地点、以下地点名は第36図に対応）。調査の結果、弥生時代から鎌倉時代の遺構・遺物が検出され、これらの時代の複合遺跡であることが明らかになった。各時代の特徴として、弥生時代は、掘立柱建物跡、竪穴建物跡、木棺墓、溝、土坑、水田跡を検出し、土器、石器、管玉、ガラス玉などが出土した。出土した土器の傾向としては、中期以前には他地域から搬入された土器が認められず、後期以降に丹波地方など北からの影響をうけた土器が認められるという特徴がある。古墳時代は遺構・遺物とも少なく特徴的な傾向は認められず、奈良時代は、遺構の大多数は溝であるが、掘立柱建物跡、木棺墓、土坑なども検出された。平安時代から鎌倉時代初頭の遺構は、掘立柱建物跡、墓、井戸、溝、土坑、島が検出され、墓、井戸、島は建物に伴うものと考えられている。遺物は、土師器、須恵器、瓦、鉄製品が出土しており、須恵器については加古川市志方町を中心に行開する志方窯跡群で生産されたものとそれ以外のものがあることがわかっている。中世以降は、小規模の建物跡、溝、水田跡が検出されており、調査区域は中世以降、水田域であったと考えられている。

平成9（1997）年11月26日～平成10（1998）年3月13日にA地点の西側隣接地を引き続き県教委が調査した（B地点）。調査の結果、弥生時代前期から鎌倉時代の各時代の遺構面において溝が検出された。遺物も弥生時代から鎌倉時代にかけての土器や石器が多数出土しており、なかでも「郡」と墨書きされた奈良時代の須恵器杯は注目される。なお、調査地は現在登録されている埋蔵文化財包蔵地範囲では「大野遺跡」に含まれるが、調査者は遺跡の内容から美乃利遺跡に含まれるものと考えられている。

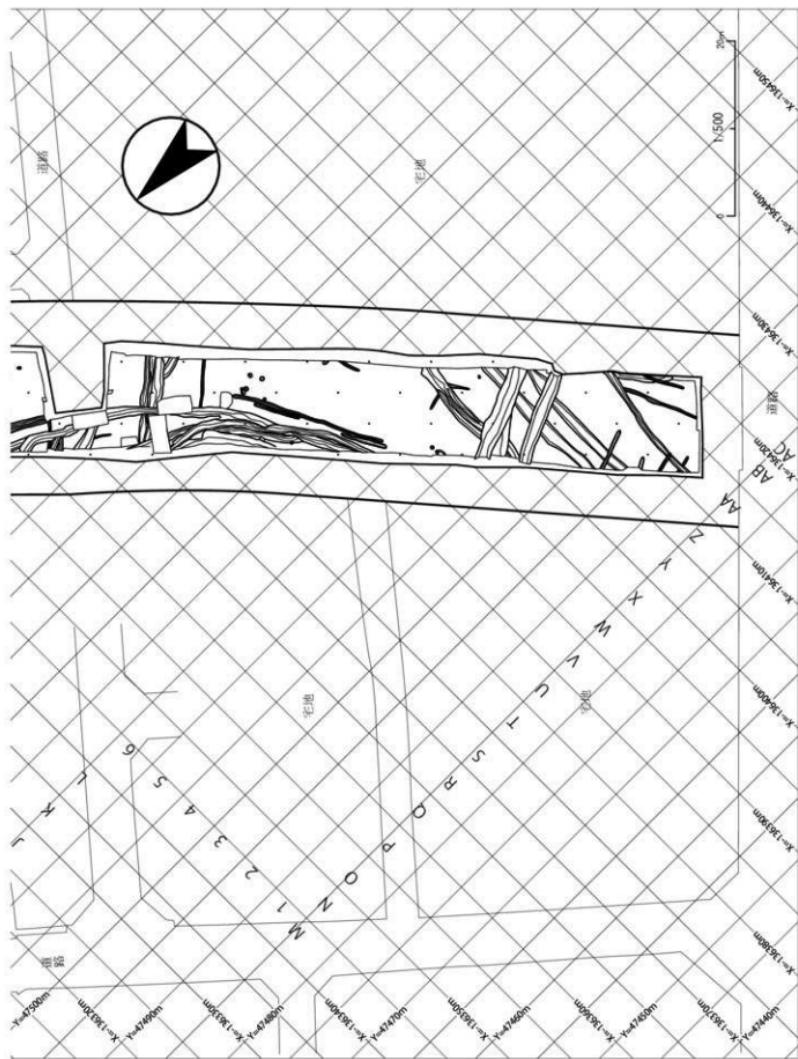
県教委により調査が実施され、内容が明らかとなる調査地点は2箇所であるが、加古川市教育委員会が確認調査を数回おこなっている。調査の結果、弥生時代の水田跡と考えられる畦が検出されており、A地点で検出された水田跡との関連が考えられる。



第36図 既往の調査地点



第37図 遺構配置図(全体)



美乃利遺跡は溝之口遺跡に比べ、大規模な調査例が少なく、未だ未解明な範囲が広いといえよう。

## 第2節 基本層序

今回調査地点は、前章で報告した溝之口遺跡と同様に表土層、遺物包含層、自然堆積層（地山）の大きく3段階（第Ⅰ～Ⅲ層）の基本堆積により成り立っている（第38図）。

第Ⅰ層は、調査前まで宅地や田地として利用されていた表層部分や擾乱層及びその直下に堆積する旧耕作土や床土層である。現地表面は場所によって高低差があるものの、全体としては周辺道路面と同等の標高7m前後となっている。ただし、グリッド25ラインより東側の範囲（第37図）は、今回調査の直前まで田地として活用されていた土地であるため、標高6.35mと低くなっている。市街地化する前の当該地における地表面は、後者のレベルに近いものであったと考えられる。

第Ⅱ層は、弥生時代から中世にかけての土器等を含む遺物包含層である。調査区内のほぼ全域で確認されたが、調査範囲が広いため場所によって土色や層厚に違いが見られる。今回調査では5層（Ⅱ-1層～5層）に細分したが、それぞれの場所で安定して堆積しているのは細分した5層中、1・2層程度である。包含層から出土する遺物は様々な時期のものが混在しており、時期差等は検討できなかつた。本層上面の標高も場所によって差異が認められるが、全体としては、南西端（AA1グリッド付近）の標高6.1mから北東端（E23グリッド付近）の標高6.4mへと徐々に高くなる傾向が見られる。ただし、第Ⅰ層と同様にグリッド25ラインより東側は低くなっている。第Ⅱ層の上面標高は5.9～6mである。層厚は、グリッド11ラインより西側では0.5～0.7mとやや厚く、それ以外の範囲では0.2m前後である。

第Ⅲ層は、自然堆積層（いわゆる「地山」）である。3層（Ⅲ-1層～3層）に細分され、調査区内のほぼ全域で第Ⅱ層の直下からⅢ-2層が確認された。ただし、調査区西北部では地形の落ち込みがあり、Ⅲ-2層の上に別の堆積（Ⅲ-1層）が確認された。Ⅲ-3層は、砂礫層である。

今回調査における遺構は、平安時代以降の遺物を包含する一部の遺構のみ第Ⅱ層中から検出されたものの、それ以外の大部分は第Ⅲ層上面で検出された。

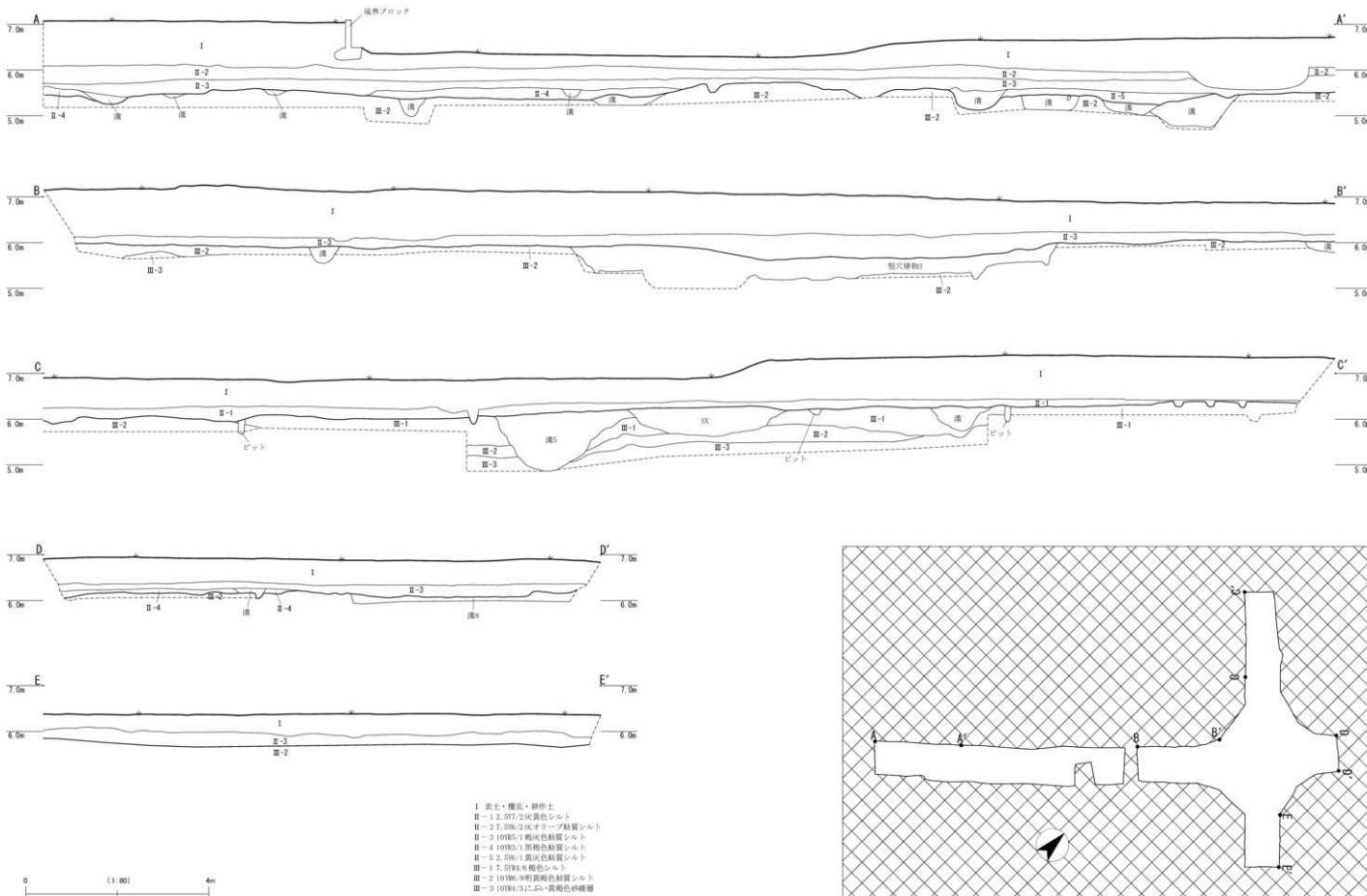
## 第3節 検出遺構

### 1. 概要

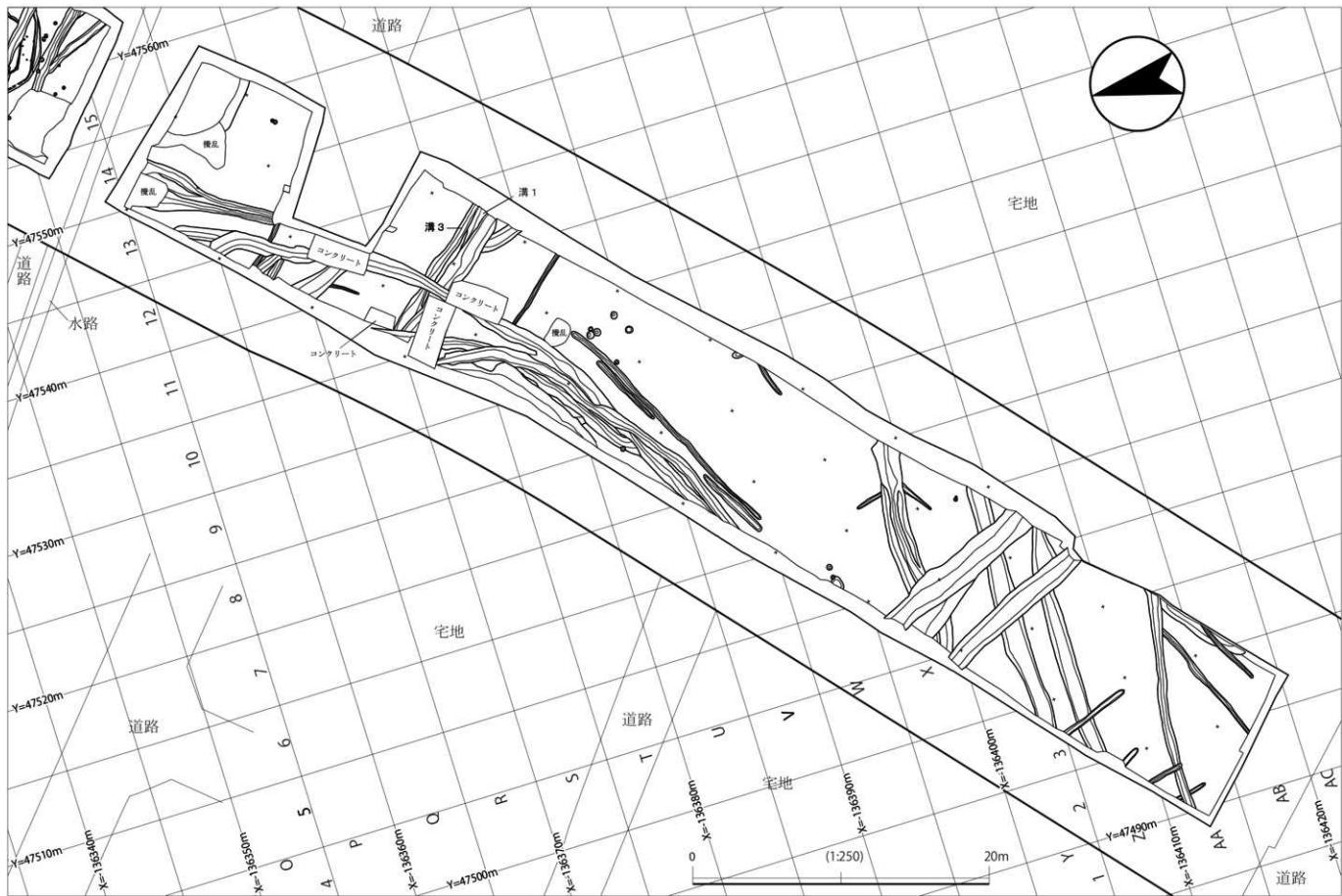
今回の調査は、加古川市の道路改良工事に伴う事前調査として実施し、美乃利遺跡の範囲については2,820m<sup>2</sup>を発掘調査した。

調査の結果、弥生時代から中世までの遺構を合計780基検出した（第37・39・40図）。内訳は、堅穴建物跡4棟、井戸1基、土坑45基、溝状遺構115条、ピット615基である。

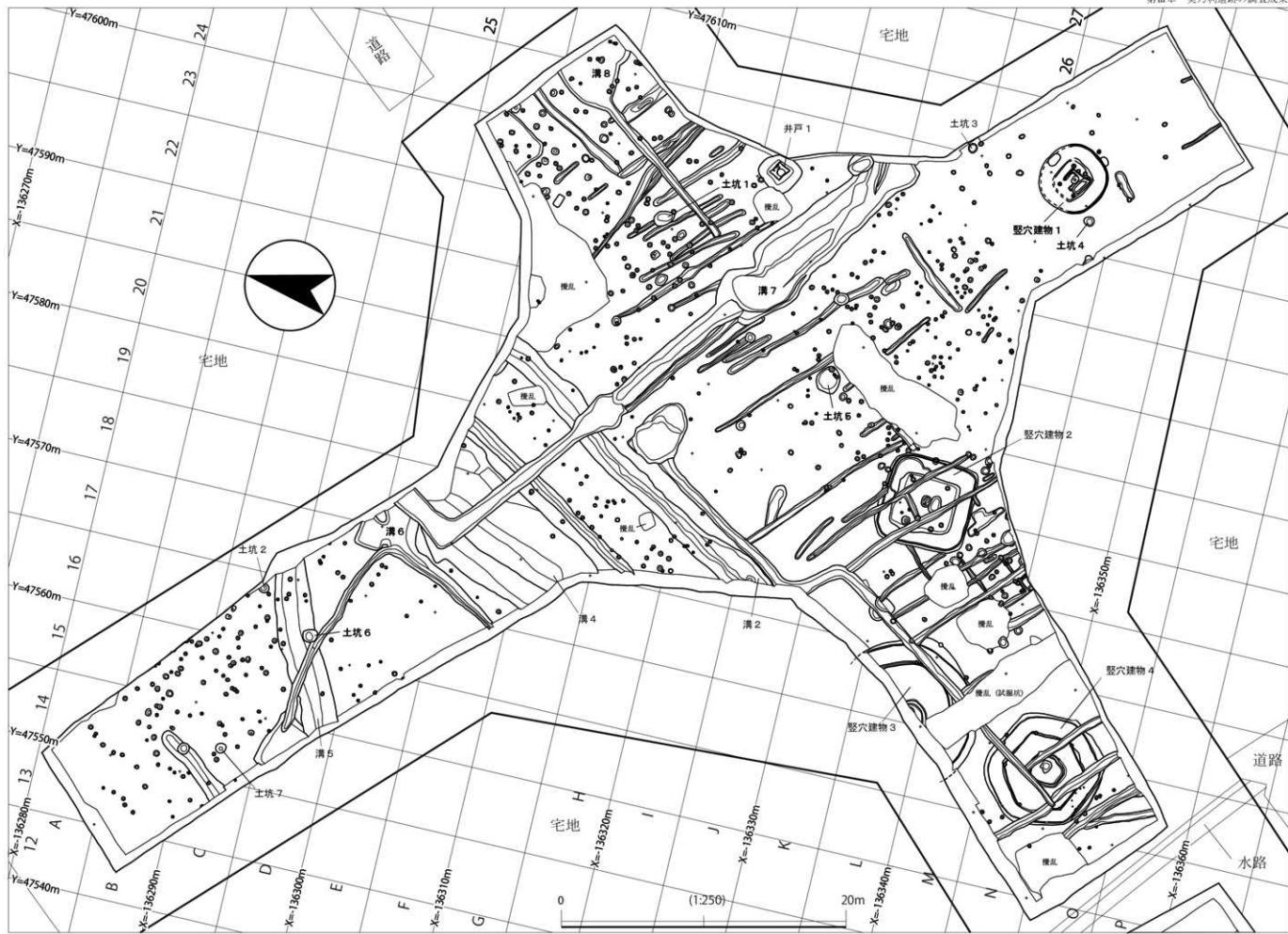
本報告書では、上記の遺構のうち、比較的の遺存状態が良好で遺物が一定量出土している遺構を選定し、堅穴建物跡4棟、井戸1基、土坑7基、溝状遺構8条について、以下にその詳細を述べる。



第38図 基本層序



第39図 遺構配置図(1区)



第40図 遺構配置図(2・3区)

## 2. 弥生時代

## ■竪穴建物 1 (第41図、写真96~100)

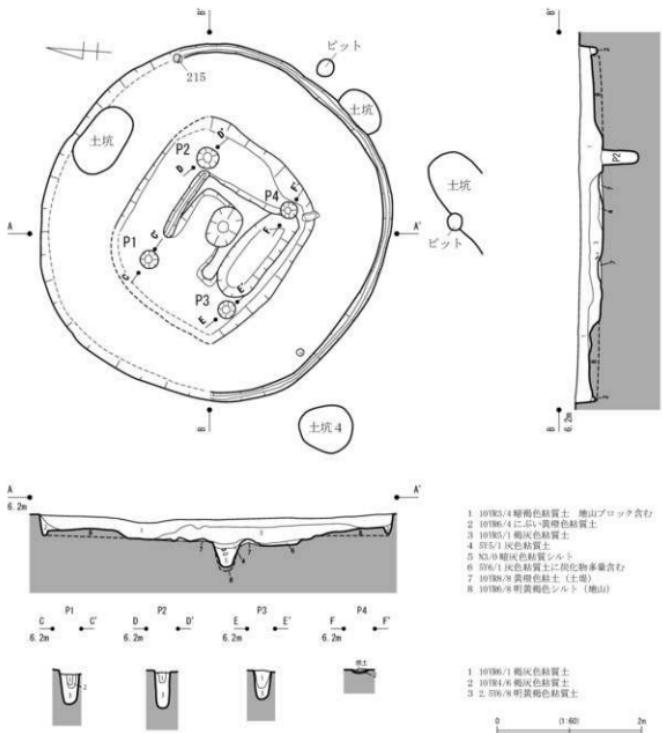
**位置**: 調査区西側のL 24・25、M 24・25グリッドに位置する。遺構確認面の高さは標高5.98mで、現地表面から約0.4m下に位置している。並列する2つの中央土坑を中心軸とした場合、軸方向はN-36°Eを示す。

**形態**: 平面形は円形で、断面形は凹字状をしている。

**規模**: 全体規模は直径4.8m前後で、床面までの深さは0.32mを測る。建物の面積は18m<sup>2</sup>前後となる。

**付帯施設**: 周壁溝、屋内高床部が伴い、中央の床面四隅からは主柱穴を、炉の施設としては中央部に2つの中央土坑を検出した。

周壁溝は、南半部において明瞭に観察でき、幅0.15m、床面からの深さ0.10mを測る。北半部へ向けて延長する傾向は認められるが、不明瞭であり全周しているかは不明である。



第41図 竪穴建物 1

屋内高床部は、建物内の壁際を全周しており、中央の床面側は方形になるように整形されている。幅は1m前後で、中央部の床面から0.10mほど高くなっている。

主柱穴は、建物中央の床面四隅から検出された。それぞれ直径0.25m前後で、深さは0.40m前後である。ただし、柱穴4は埋土に焼土が薄く堆積しているのみで、柱穴として十分な掘り込みを確認することはできなかった。中央土坑に堆積していた炭層と重複していたため、本来の柱穴を見落とした可能性がある。

中央土坑は、播磨地域において特徴的に検出される「1〇型中央土坑」と呼ばれるもので、建物中央部に深い円形の土坑が配置され、その南側に浅い楕円形の土坑が伴う。本遺構では、中央部の深い土坑も楕円形に近い形状で、黄橙色の粘土を盛り上げたコ字状の土堤に囲われていた。土堤は東側に開口している。規模は、中央の土坑が長軸0.58m、短軸0.41m、床面からの深さ0.38mを測り、南側の土坑が長軸1.42m、短軸0.55m、床面からの深さ0.08mである。南側の土坑は、内部に炭が多量に堆積していた。

**土 層**：床面上までの埋土は3層に区分される。中央部床面周辺に褐色灰色やにぶい黄橙色のシルト層が堆積し、その上に暗褐色粘質シルトが遺構全体を覆っている。

各付帯施設を見ると、周壁溝には第1層とよく似た暗褐色シルトが堆積し、東側の埋土中から完形の弥生土器小型鉢（第61図215）が出土した。屋内高床部は、建物構築時に地山を掘り残して造り出されており、貼床等は確認されていない。主柱穴は、第3層と同質の褐色シルトを主体とし、下層は明黄褐色の粘質土であった。中央土坑は、深い円形（今回はやや楕円形）土坑の内部に暗褐色粘質シルトが堆積し、遺物が若干出土した。南側の楕円形土坑は、灰色粘質土層中に多量の炭が混入していた。

**出土遺物**：周壁溝から出土した完形の小型鉢以外に、中央土坑の内部や第1層中から弥生土器の甕、高杯などの破片が出土した。

今回の報告では、出土遺物のうち弥生土器7点を抽出し、次節において詳述する。

**遺構時期**：出土した遺物から、本遺構の帰属時期は弥生時代終末期頃と考えられる。

#### ■竪穴建物2（第42図、写真18・19・101～108）

**位 置**：調査区中央西寄りのK 19・20、L 19・20 グリッドに位置する。遺構確認面の高さは標高6.00mで、現地表面から0.85m下に位置している。並列する2つの中央土坑を中心軸とした場合、軸方向はN-Z'-Eとなりほぼ南北軸に沿う。

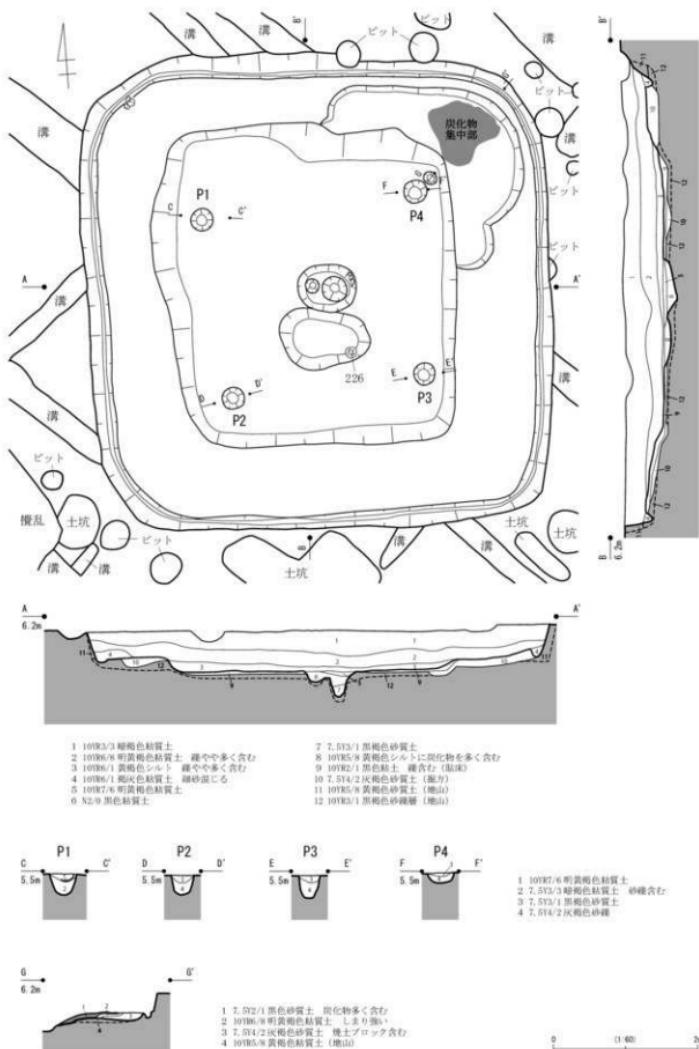
**形 態**：平面形は隅丸方形で、断面形は凹字状をしている。

**規 模**：南北辺が6.5m前後、東西辺が6.3m前後を測る。床面までの深さは0.58mを測る。建物の面積は41m<sup>2</sup>前後となる。

**付帯施設**：周壁溝、屋内高床部が伴い、中央の床面四隅からは主柱穴を、炉の施設として1〇型中央土坑を検出した。また、北東隅付近でも炉跡の可能性がある炭化物集中部を認めた。

周壁溝は、部分的に不明瞭な場所があるものの全周しており、幅0.17m、床面からの深さ0.10mを測る。南西隅付近では周壁溝の埋土内に炭化物が筋状に堆積している部分があり、建物の壁材が焼けた痕跡とも考えられる（写真107）。

屋内高床部は、建物内の壁際を全周しており、中央の床面側は方形になるように整形されている。幅は、南側と東側は1m前後で、北側と西側は0.7m前後である。中央部の床面から0.2mほど高くなっている。



第42図 積穴建物 2

主柱穴は、建物中央の床面四隅から検出された。それぞれ直径 0.3 m 前後で、深さも同じく 0.3 m 前後である。ただし、柱穴 4 のみ 0.13 m と浅い。

中央土坑は、堅穴建物 1 と同様に 1〇型中央土坑と考えられ、建物中央部に深い円形の土坑が配置され、その南側に浅い楕円形の土坑が伴う。本遺構では、中央部の深い土坑も楕円形に近い形状で、長軸 0.80 m、短軸 0.64 m を測る。また、深さ 0.1 m 付近で東西二つの掘り込みに分かれ、西側は床面からの深さ 0.14 m と浅く、東側は 0.34 m とやや深い。南側に接する楕円形土坑は、長軸 1.26 m、短軸 0.82 m、床面からの深さ 0.06 m である。南側の土坑は、堅穴建物 1 と同様内部に炭が多量に堆積していた。

北東隅付近で確認された炭化物集中部は、周辺の高床部一帯に炭化物や焼土ブロックが散乱していた範囲の中央付近で確認され、この部分のみ高床部が 0.10 m ほど隆んでいた。中央土坑との関係は不明だが、この場所に地床炉が存在した可能性がある。

**土 層：**床面上までの埋土は 3 層に区分される。中央部の床面直上に黄褐色シルト層が堆積し、その上に明黄褐色・暗褐色の粘質シルトが遺構全体を覆っている。おおむね水平堆積である。第 3 層の直下には黒色粘質土の貼床が施されている。

各付帯施設を見ると、周壁溝には褐色シルトが堆積し、北西部の埋土中から完形の弥生土器小型甕（第 61 図 229）が出土した。屋内高床部は、建物構築時に地山を一度掘りこんだ後灰褐色砂質土を盛土していた。本遺構は、基本層序第Ⅲ層の砂礫層を掘り込んでおり、床面上の貼床も含め、砂礫層による凹凸を取り除く必要があったものと考えられる。主柱穴は 2 层に分かれ、上層は黒褐色砂質土、下層は灰褐色砂礫層を主体とするが、柱穴 1 のみ上層に明黄褐色シルト、下層に暗褐色シルトが堆積していた。中央土坑は、深い円形土坑の内部に黒色粘質シルトが堆積し、下層は砂質土であった。南に接する楕円形土坑は、黒色粘質土層中に多量の炭が混入しており、その上面から壺の口縁部（第 61 図 226）が出土した。北東隅で確認された炉跡の堆積は、表面に焼土や炭化物を多く含んだ砂質土が堆積し、下部は明黄褐色粘質シルトであった。

**出土遺物：**周壁溝から完形の小型甕、中央土坑の上面から壺口縁が出土したほか、各埋土中から弥生土器の甕、壺などの破片が出土し、鉄鏃の可能性がある棒状鉄片なども含まれていた。床面上からは、碧玉製管玉 1 点が出土した。

今回の報告では、出土遺物のうち弥生土器 14 点、石器 2 点、棒状鉄片 1 点、管玉 1 点を抽出し、次節において詳述する。

**遺構時期：**出土した遺物から、本遺構の帰属時期は弥生時代終末期頃と考えられる。

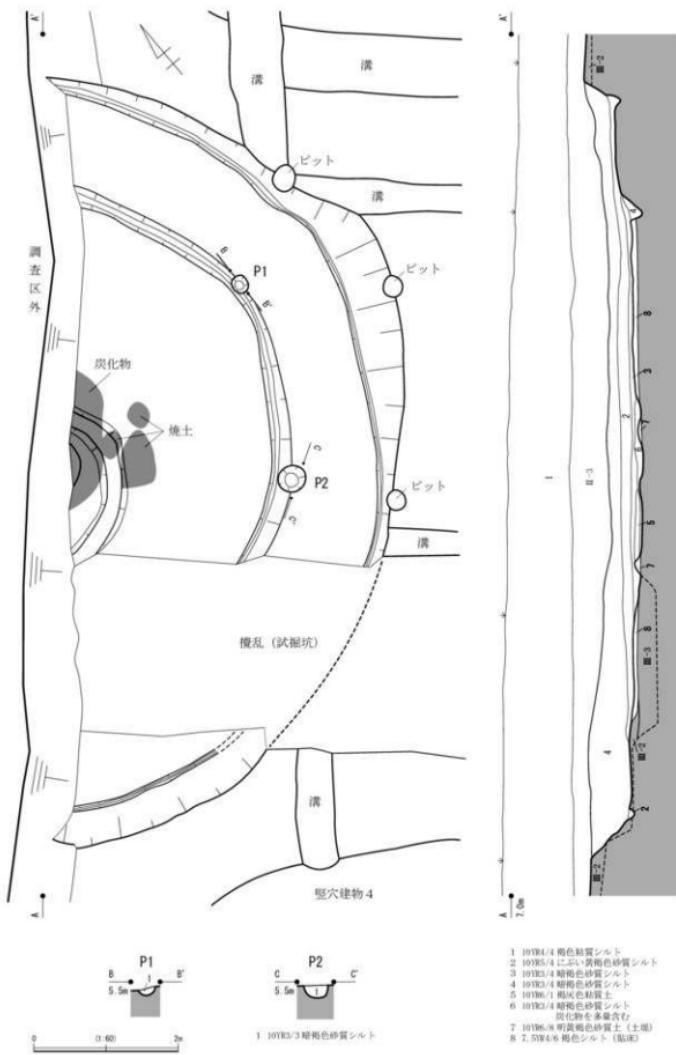
### ■堅穴建物 3（第 43 図、写真 109～113）

**位 置：**調査区中央付近の L 17・18、M 16～18 グリッドに位置する。遺構の西半部は調査区外へ及んでおり、南側の一部は事前の確認調査の際に断割り調査を実施したため攪乱となっている。遺構確認面の高さは標高 5.98 m で、現地表面から約 1 m 下に位置している。

**形 態：**平面形は円形と推測され、断面形は四字状をしている。

**規 模：**検出された範囲から想定される平面規模は直径 10.6 m 前後と考えられ、床面までの深さは 0.45 m を測る。建物の面積は 88 m<sup>2</sup> 前後と考えられる。

**付帯施設：**周壁溝、屋内高床部が伴い、床面と高床部との境にも溝が巡り、その溝内から主柱穴と考えられるピットを検出した。炉の施設としては、中央部に土堤に囲まれた皿状の浅い窪みを確認したが、大部分は調査区外へ及んでおり全体形は不明である。



第43図 積穴建物 3

周壁溝は、検出された範囲では全周しており、幅 0.15 ~ 0.20 m、床面からの深さ 0.08 m を測る。屋内高床部は、同じく検出された範囲では建物内の壁際を全周しており、中央の床面側は多角形状になるように整形されている。幅は 1.2 m 前後で、中央部の床面から 0.13 m ほど高くなっている。

中央の床面と高床部の境を巡る溝は、幅 0.25 m、床面からの深さ 0.14 m を測るが、擾乱をはさんだ南側では不明瞭となり、断面観察においても認識することができなかった。主柱穴は、この溝内から 2 基検出され、直径 0.25 ~ 0.40 m で、深さは 0.10 ~ 0.17 m である。両者の間隔は約 3 m であり、同様の間隔で建物内を巡るとすれば南側の擾乱内と北側の調査区境付近に各 1 基ずつ並ぶものと考えられる。

炉跡は、遺構の中央において幅 0.35 m、高さ 0.07 m の土堤に囲まれており、検出範囲から規模を想定すると、直径 2 m 前後の円形になるものと推測される。後述する堅穴建物 4 において類似する炉跡が検出されている。

**土 層**：床面上までの埋土は 3 層に区分される。中央部の床面直上に暗褐色砂質シルト層が堆積し、その上にぶい黄褐色や褐色の粘質シルトが遺構全体を覆っている。おおむね水平堆積である。第 3 層の直下には褐色シルトの貼床が施されている。

各付帯施設の土層みると、周壁溝は第 2 層と同様の土で埋没している。屋内高床部は、建物構築時に地山を掘り残して造り出されており、貼床等は確認されていない。逆に中央の床面は、基本層序第 III 層の砂疊層を掘り込んでいるため、その凹凸を取り除く必要から貼床されたものと考えられる。中央部の床面と高床部の境を巡る溝は、暗褐色砂質シルトを主体とし、その溝内から検出された主柱穴もほぼ同質の土層であった。中央の炉跡は、明黄褐色砂質土を盛り上げた土堤に囲まれており、内部には暗褐色砂質シルト中に多量の炭が混入された土が堆積していた。炉の底面に敷き詰めたような状況から、鍛冶炉等で防湿のために施されるカーボン・ベッドに類似している。

**出土遺物**：他の堅穴建物に比べ出土量は少ないものの、埋土中から弥生土器の甕、壺、高坪、手堀り形土器などが出土した。また、炉内の炭層を中心に土壤の水洗選別を行ったところ、鍛造剣片に類似する微細な鉄片を複数採取した。

今回の報告では、出土遺物のうち弥生土器 5 点を抽出し、次節において詳述する。

**遺構時期**：出土した遺物から、本遺構の帰属時期は弥生時代終末期頃と考えられる。

#### ■堅穴建物 4（第 44 図、写真 10 ~ 17・114 ~ 126）

**位 置**：B 区南端の N 16・17、O 16・17 グリッドに位置する。遺構確認面の高さは標高 5.9 m 前後で、現地表面から約 1.2 m 下に位置している。

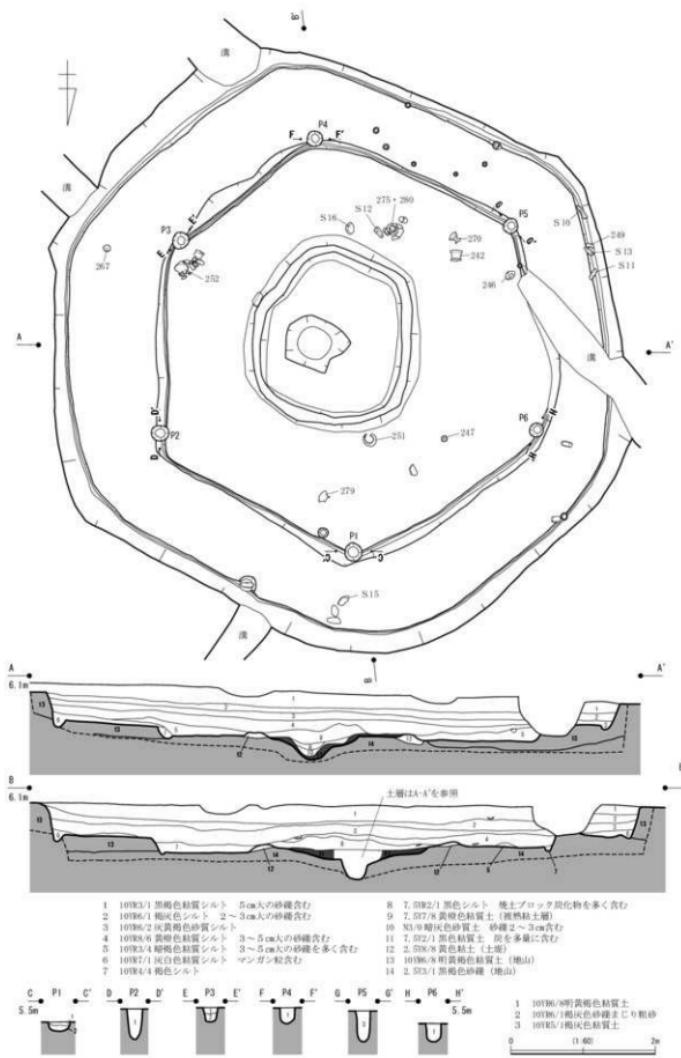
**形 態**：平面形は隅丸の六角形、断面形はおおむね凹字状である。

**規 模**：平面規模は、最大 8.01 m、最小 7.55 m を測り、一辺の長さは 3.6 ~ 4.7 m と場所によって差異がある。床面までの深さは最大で 0.67 m、最小で 0.52 m を測る。建物の面積は 48 m<sup>2</sup> 前後となる。

**付帯施設**：周壁溝、屋内高床部が併い、床面と高床部との境には溝が巡り、その溝内から主柱穴と考えられるピットを検出した。炉の施設としては、中央部に土堤に囲まれた皿状の浅い窪みを確認した。

周壁溝は全周しており、幅 0.16 m、深さ 0.10 m を測る。

屋内高床部は、幅 1 m 前後、中央部の床面からの高さ 0.17 m を測り、中央の床面側も同じく六角形になるように整形されている。



第44図 竪穴建物 4

中央の床面と高床部の境を巡る溝は、周壁溝と同じく全周しているものと考えられるが、西側の一边のみ不明瞭であった。幅は 0.09 m、深さ 0.06 m を測る。主柱穴はこの溝内から検出され、六角形の各頂点附近から検出された。それぞれ直径 0.2 m 前後で、高床部からの深さは 0.40 m 前後のものと 0.20 m 前後のものがある。なお、P 1 と P 6 については、高床部ではなく、床面上からの計測である。各柱穴の間隔は約 3 m を測る。

炉跡は、遺構の中央において幅 0.35 m、高さ 0.06 m の円形に巡る土堤に囲まれており、長軸 2.7 m、短軸 2.4 m を測る。土堤内の炉跡底面は竪穴建物 3 と同様に炭が全面に敷設されており、その中央東寄りから被熱した黄色粘土に塞がれた掘り込みが確認された。この掘り込みは平面不整円形で、長軸 0.88 m、短軸 0.68 m、深さ 0.23 m を測る。

**土 層：**床面上までの埋土は 7 層に区分される。黒褐色や黄褐色の砂質シルトを主体とし、おおむね水平堆積である。

各付帯施設については、周壁溝は灰黄褐色砂質シルトを主体とし、中央部の床面と高床部の境を巡る溝は、褐色シルトを主体としている。その溝内から検出された主柱穴は、1 层から 2 層に区分され、明黄褐色の粘土質土を主体としている。中央の炉跡は、粘土を盛り上げた土堤に囲まれており、内部には黒色粘土質土中に多量の炭を混入させた土が底面に敷かれていた（写真 14・122）。その上部には、炭化物に混じり焼土や被熱した粘土塊などが集中的に堆積していた（写真 13・121）。炉内の底面には中央東寄りに掘り込みが認められ、断面観察から 3 层の堆積が認められた。上面は被熱した黄橙色粘土質土で燃焼部と考えられ、中層に暗灰色砂質土が堆積し、最下層は周辺の炉内底面に敷かれていたものと同質の炭層であった。鍛冶炉等で防湿のために施されるカーボン・ベッドを伴う炉跡と考えられ、類似点の多い竪穴建物 3 とともに工房跡として利用されていた可能性が高い。本遺構については、その機能について第Ⅳ章で若干の考察を試みている。

**出土遺物：**床面上から多数の遺物が出土した。中央の炉跡周辺では弥生土器の壺や高杯、壁際では砥石や敲石が複数個体出土した。また、炉内の堆積土を水洗選別したところ、鍛造剝片に類似する微細な鉄片を複数採取した（写真 26）。

今回の報告では、上記の出土遺物を中心に弥生土器 40 点、石器 7 点を抽出し、次節において詳述する。

**遺構時期：**出土した遺物から、本遺構の帰属時期は弥生時代終末期頃と考えられる。

#### ■土坑 1（第 45 図、写真 20～22・127・128）

**位 置：**調査区北側の G 23 グリッドに位置する。遺構確認面の高さは標高 6.17 m で、現地表面から約 0.7 m 下に位置する。主軸方向は N-29°-W を示す。

**形 態：**平面形は卵形で、断面形は外側に開く U 字状をしている。底面は緩やかに湾曲し、壁面は北側では緩やかに、南側では急斜に立ち上がる。

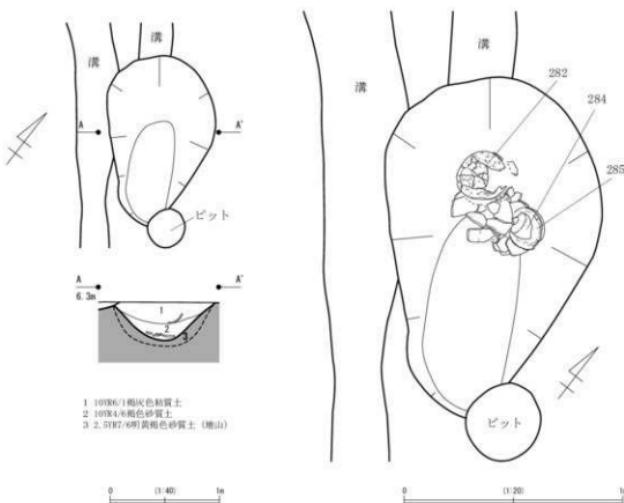
**規 模：**長軸 1.56 m、短軸 0.98 m、深さ 0.35 m を測る。

**土 層：**2 層に区分される。褐灰色シルトを主体とし、遺構内北側の上層を中心に弥生土器の甕や器台、小型鉢などが密集した状態で出土した。

**出土遺物：**北側で集中的に出土した遺物のうち、甕と小型鉢はほぼ完形に復元できた。甕は伏せた状態で出土した。また、管見の限りでは他に類例のない装飾器台（第 64 図 285）が出土しており注目される。

今回の報告では、遺物集中部から出土した弥生土器 5 点を抽出し、次節において詳述する。

**遺構時期：**出土した遺物から、遺構の埋没時期は弥生時代終末期頃と考えられる。



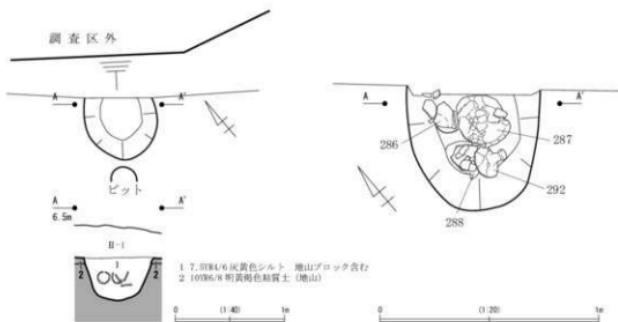
第45図 土坑 1

**■土坑 2 (第46図、写真 129 ~ 131)**

**位 置:** 調査区北西側のC 16 グリッドに位置する。遺構の北側は調査区外へ及んでいる。遺構面の高さは標高 6.04 mで、現地表面から約 0.9 m下に位置する。長軸方向は N-34° E を示す。

**形 態:** 遺構の北側が調査区外へ及んでいるため、平面形は不明である。断面形はU字型をしている。底面は緩やかに湾曲し、壁面はやや急斜に立ち上がる。

**規 模:** 検出した範囲での規模は、長軸 0.61 m、短軸 0.53 mを測る。深さは 0.40 mである。



第46図 土坑 2

**土 層：**灰黄色シルトを主体とする單一層である。遺構内からは弥生土器が複数個体出土した。

**出土遺物：**遺構内に複数個体の甕や高杯が埋納されていた。土圧によって割れているものの、当初は完形の状態で埋められたものと考えられる。

今回の報告では、完形に復元できたものを中心に弥生土器7点を抽出し、次節において詳述する。

**遺構時期：**出土した遺物から、遺構の埋没時期は弥生時代終末期頃と考えられる。

### ■土坑3（第47図、写真132）

**位 置：**調査区西側のK 25 グリッドに位置する。遺構確認面の高さは標高 5.98 m で、現地表面から約 0.4 m 下に位置する。

**形 態：**平面形は円形で、断面形は箱形をしている。底面は平坦で、壁面は垂直に近く立ち上がる。

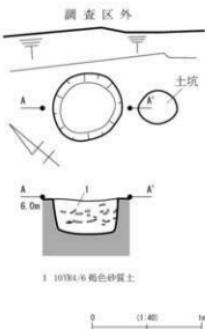
**規 模：**直径約 0.6 m、深さ 0.30 m を測る。

**土 層：**褐色砂質シルトを主体とする單一層である。遺構内からは弥生土器の破片が多数出土した。

**出土遺物：**弥生土器の甕・壺などの破片が多数出土した。単一の土で一度に埋設していることと併せて考えると、廃棄土坑として使われた可能性がある。

今回の報告では、出土遺物のうち弥生土器5点を抽出し、次節において詳述する。

**遺構時期：**出土した遺物から、遺構の埋没時期は弥生時代終末期頃と考えられる。

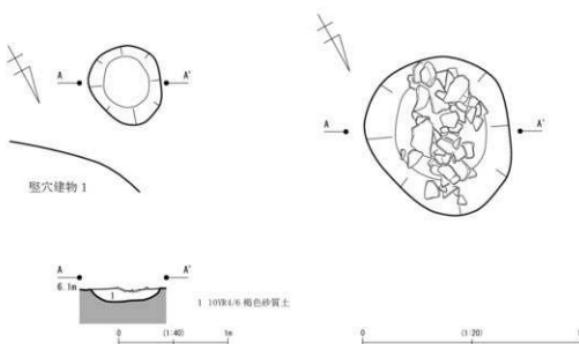


第47図 土坑3

### ■土坑4（第48図、写真133）

**位 置：**調査区西側のM 24 グリッドに位置する。遺構確認面の高さは標高 5.99 m で、現地表面から約 0.4 m 下に位置する。長軸での方位は N-13°-E を示す。

**形 態：**平面形は楕円形で、断面形は皿状をしている。底面は平坦で、壁面は緩やかに立ち上がる。



第48図 土坑4

**規 模：**長軸 0.76 m、短軸 0.65 m、深さ 0.12 m を測る。

**土 層：**褐色砂質シルトを主体とする単一層である。遺構上面からは弥生土器壺の破片が集中して出土した。

**出土遺物：**弥生土器の壺下半部が潰れた状態で出土した。この壺 1 点について、次節において詳述する。

**遺構時期：**出土した遺物から、遺構の埋没時期は弥生時代中期以降と考えられるが、出土遺物が少量のため詳細は不明である。

**■溝 1 (第 49・50 図、写真 23・24・134～137)**

**位 置：**調査区中央南寄りの T 12 グリッドに位置する溝状遺構である。北側を溝 3 に、南側を別の溝に切られ、南東側は調査区外へ及んでいるため、検出されたのは一部のみである。遺構確認面の高さは標高 5.55 m で、現地表面から約 1.5 m 下に位置する。主軸方向は N-48°-W を示す。

**形 態：**平面形は溝状で、断面形は他の遺構に上端の大部分を切られているため不明である。底面はほぼ平坦で、壁面はやや急斜に立ち上がる。

**規 模：**検出された範囲での最大長は 3.72 m、最大幅は 0.59 m を測る。深さは 0.40 m である。

**土 層：**2 層に区分される。褐色粘質シルトを主体とし、上層を中心には弥生土器の破片が密集して出土した。

**出土遺物：**上層から出土した遺物は遺構内を埋め尽くすほど多量に出土しており、一定期間継続的に廃棄行為が行われた結果と考えられる。

今回の報告では、これらの遺物のうち弥生土器 31 点を抽出し、次節において詳述する。

**遺構時期：**出土した遺物から、遺構の埋没時期は弥生時代終末期頃と考えられる。

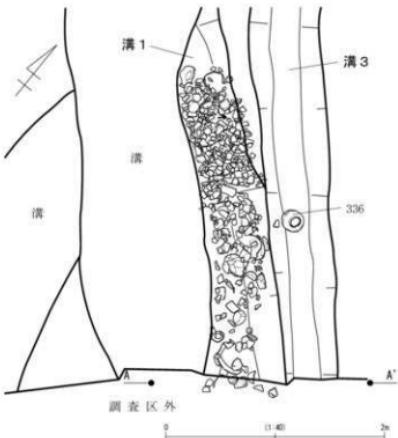
### 3. 古墳時代

**■溝 3 (第 49・50 図、写真 23・134～137)**

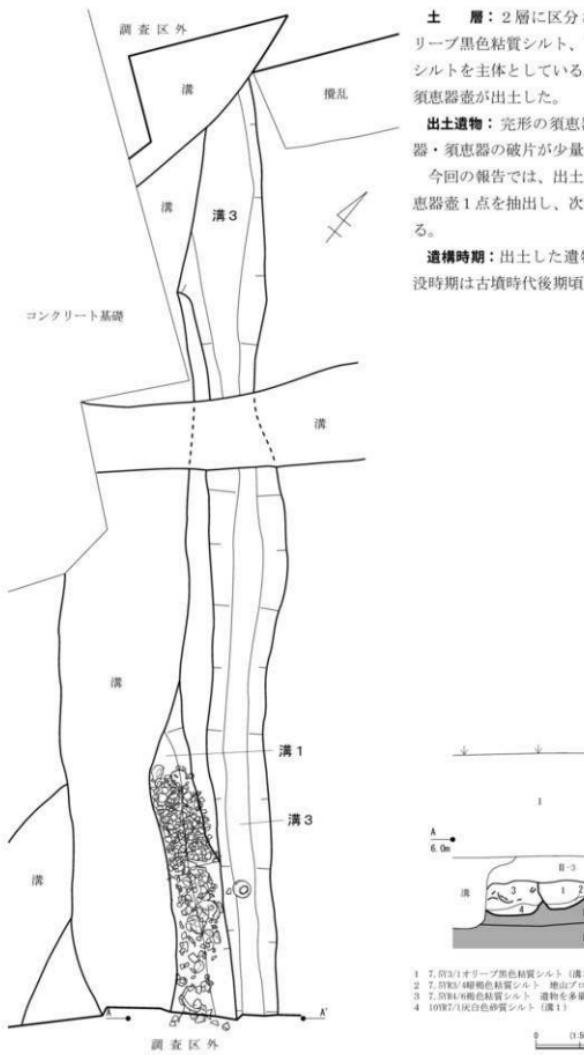
**位 置：**調査区中央南寄りの R 11、S 11・12、T 12 グリッドに位置する溝状遺構である。溝 1 を切り、溝の両端は調査区外へ及んでいる。遺構確認面の高さは標高 5.55 m で、現地表面から約 1.5 m 下に位置する。主軸方向は N-41°-E を示す。

**形 態：**平面形は溝状で、断面形はやや不整形な U 字状をしている。底面は緩やかに湾曲し、外側へ向けて立ち上がる。

**規 模：**検出された範囲での規模は、長さ 10.06 m、幅 0.83 m を測る。深さは 0.32 m を測る。



第49図 溝 1・3 遺物出土状況



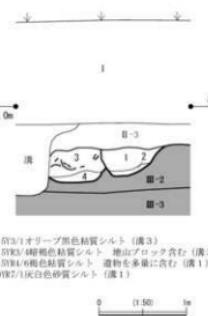
第50図 溝1・3

**土 層：**2層に区分される。上層はオリーブ黒色粘質シルト、下層は暗褐色粘質シルトを主体としている。上層から完形の須恵器壺が出土した。

**出土遺物：**完形の須恵器壺のほか、土師器・須恵器の破片が少量出土した。

今回の報告では、出土した遺物のうち須恵器壺1点を抽出し、次節において詳述する。

**遺構時期：**出土した遺物から、遺構の埋没時期は古墳時代後期頃と考えられる。



1. T. 5YRS/1オリーブ黒色粘質シルト (溝3)
2. T. 5YRS/4暗褐色粘質シルト - 地山ブロック含む (溝3)
3. T. 5YRS/6褐色粘質シルト - 遺物を多量に含む (溝1)
4. T. 10YRS/1灰白色砂質シルト (溝1)

**■土坑5（第51図、写真146・147）**

**位置**: 調査区北側のJ 21 グリッドに位置する。遺構確認面の高さは標高6.22 mで、現地表面から約0.63 m下に位置する。

**形態**: 平面形は不整円形で、断面形は浅い皿状をしている。底面は平坦で、緩やかに立ち上がる。

**規模**: 長軸1.85 m、短軸1.62 mを測る。深さは0.09 mを測る。

**土層**: 3層に区分される。第1層は褐色の砂質シルトで、第2・3層は黒色や明黄褐色の粘質シルトを主体としている。第2・3層から平瓦が出土した。

**出土遺物**: 平瓦が横倒しの状態で出土し、1点は完形に近い状態であった。

今回の報告では、出土した瓦2点について、次節において詳述する。

**遺構時期**: 出土した遺物から、遺構の埋没時期は古墳時代終末期（飛鳥時代）頃と考えられる。

**4. 古代****■溝2（第52図、写真138～140）**

**位置**: 調査区北側のF 20、G 19・20、H 18・19、I 18・19、J 18 グリッドに位置する溝状遺構である。溝7に切られ、溝の両端は調査区外へ及んでいる。遺構確認面の高さは標高5.80 mで、現地表面から約1.2 m下に位置する。主軸方向はN=33°±Eを示す。

**形態**: 平面形は溝状で、断面形はやや外側に開くV字状をしている。底面は緩やかに湾曲し、外側へ向けて立ち上がる。

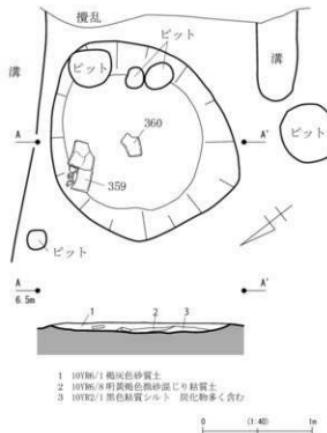
**規模**: 検出された範囲での規模は、長さ22.52 m、幅2.23 mを測る。深さは0.47 mを測る。

**土層**: 2層に区分される。上層は褐色砂質シルト、下層は灰白色粘質シルトを主体としている。

**出土遺物**: 土師器・須恵器及び埋没時の混入品と考えられる弥生土器が出土した。出土状況に大きな特徴は見られない。

今回の報告では、出土した遺物のうち弥生土器1点、土師器・須恵器5点を抽出し、次節において詳述する。

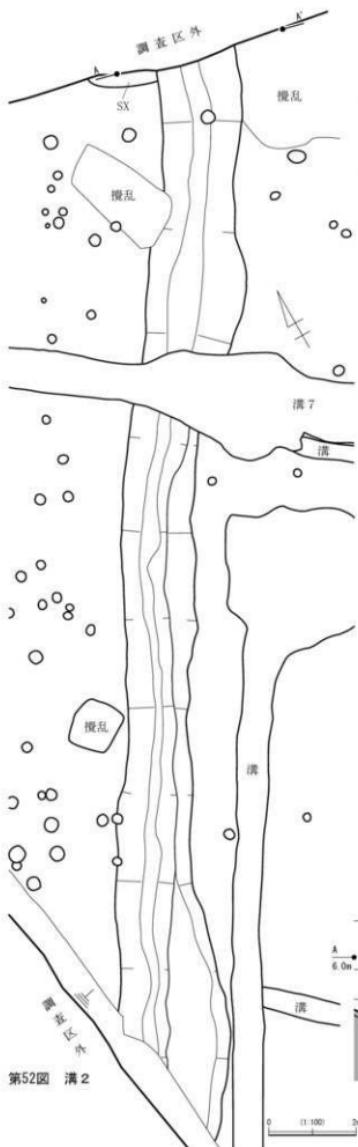
**遺構時期**: 出土した遺物から、遺構の埋没時期は奈良時代頃と考えられる。



第51図 土坑5

- 1 10FB6/1 暗紅色砂質土
- 2 10FB6/2 明黄色粘質シルト
- 3 10FB2/1 黒色粘質シルト 塩化物多く含む

0 (1.40) 1m



## ■溝4（第53図、写真141～145）

**位 置：**調査区北西側のE 17～19、F 17～19、G 17・18 グリッドに位置する大型の溝状造構である。溝7に切られ、溝の両端は調査区外へ及んでいる。造構確認面の高さは標高 6.12 mで、現地表面から約 0.6 m 下に位置する。主軸方向は N-24°-E を示す。

**形 態：**平面形は溝状で、断面形は外側に開くV字状をしている。底面は細く平坦で、外側へ大きく開きながら立ち上がる。西側の壁面下方にはテラス状の平坦面を有する。

**規 模：**検出された範囲での規模は、長さ 13.39 m、幅 6.94 m を測る。深さは 1.64 m を測る。

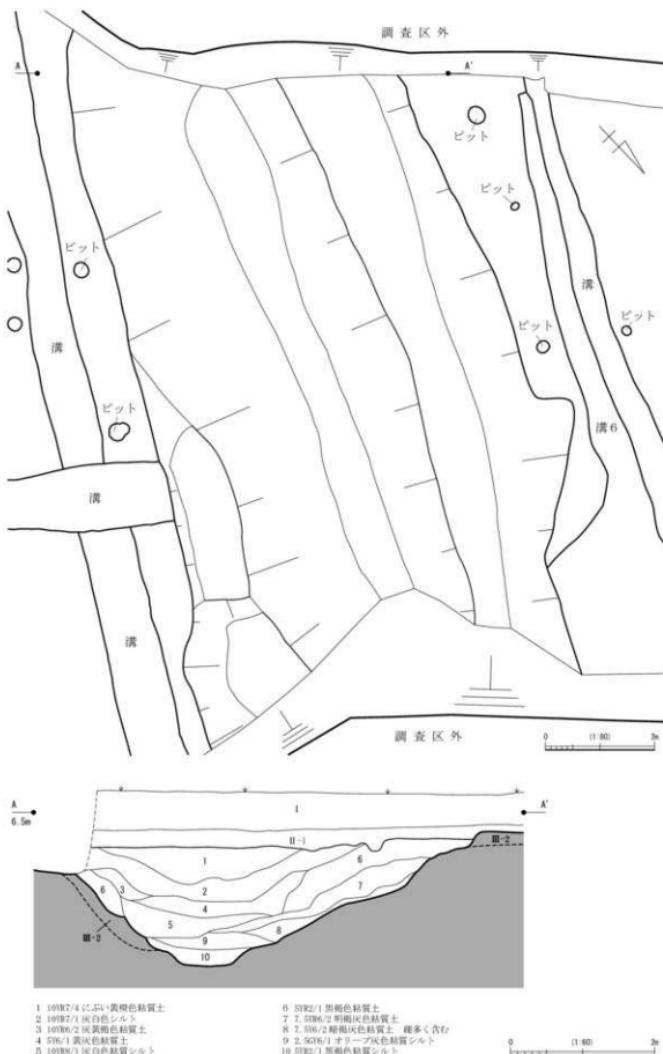
**土 層：**10層に区分される。上層は黄色系の粘質シルトを主体とし、中・下層は灰色や暗色系の粘質シルトを主体としている。遺物は各層から弥生土器や土師器・須恵器が混在して出土した。

**出土遺物：**弥生土器・土師器・須恵器、瓦などが出土した。出土状況に大きな特徴は見られない。

今回の報告では、出土した遺物のうち弥生土器 6点、土師器・須恵器 12点、土製品 3点、瓦 1点を抽出し、次節において詳述する。

**造構時期：**出土した遺物から、造構の埋没時期は平安時代後期頃と考えられる。

1	10105/1 楊灰色砂質土
2	10107/1 灰白色砂質土



第53図 溝4

**■溝5（第54図、写真148・149）**

**位置：**調査区北西側のC 16・17、D 14～17、E 15 グリッドに位置する溝状遺構である。土坑6に切られ、溝の両端は調査区外へ及んでいる。遺構確認面の高さは標高6.01mで、現地表面から約0.9 m下に位置する。主軸方向はN-66°-Eを示す。

**形態：**平面形は溝状で、断面形はやや外側に開くU字状をしている。底面は緩やかに湾曲し、外側へ向けて立ち上がる。

**規模：**検出された範囲での規模は、長さ11.70 m、幅2.67 mを測る。深さは1.02mを測る。

**土層：**4層に区分される。第1層の灰黄色粘質シルトが厚く堆積しており、短期間に同質の土で埋められたものと考えられる。

**出土遺物：**土師器・須恵器、瓦が出土した。出土状況に大きな特徴は見られない。

今回の報告では、出土した遺物のうち土師器・須恵器4点、瓦1点を抽出し、次節において詳述する。

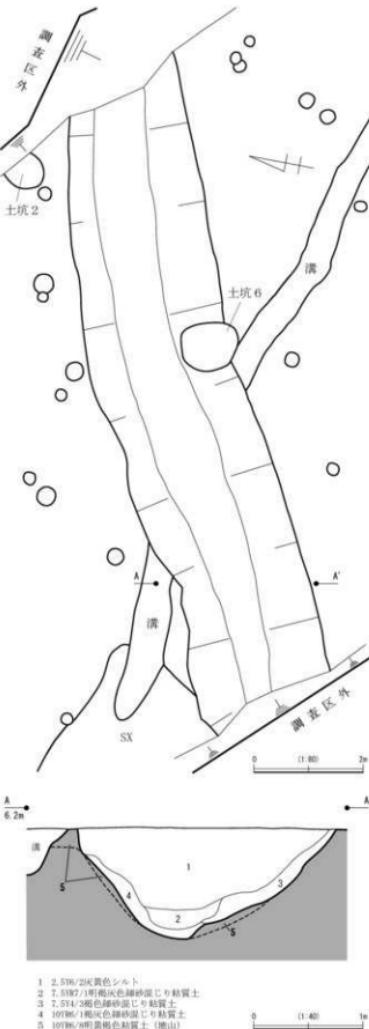
**遺構時期：**出土した遺物から、遺構の埋没時期は平安時代前期頃と考えられる。

**■溝6（第55図）**

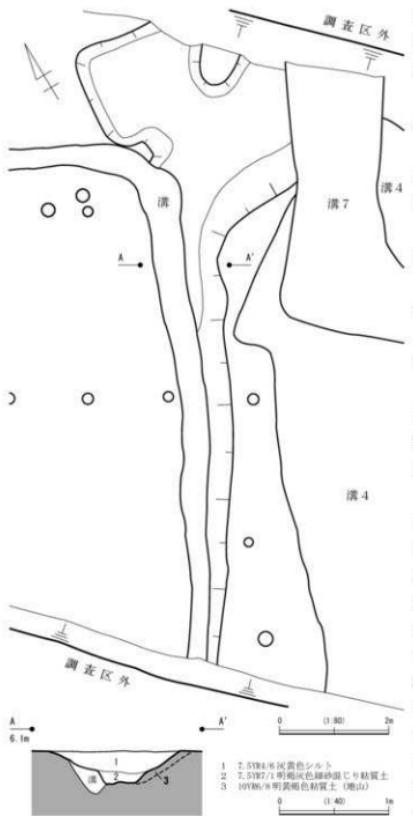
**位置：**調査区北西側のD 17・18、E 17・18、F 16・17 グリッドに位置する溝状遺構である。溝7に切られ、溝の両端は調査区外へ及んでいる。遺構確認面の高さは標高5.98 mで、現地表面から約0.74 m下に位置する。軸方向はN-30°-Eを示すが、北側の調査区境付近で不整形となり軸方向も変化しているものと考えられる。

**形態：**平面形は溝状で、北側の調査区境付近では不整形となる。断面形も場所により異なるが、おおむねU字状をしている。底面は緩やかに湾曲し、外側へ向けて立ち上がる。

**規模：**検出された範囲での規模は、長さ11.24 mを測り、幅は南端で1.16 mであつ



第54図 溝5



第55図 溝6

されず、築造に際しては上部を土坑状に大きく掘り込んだ後、その底面にこれらの構造物とほぼ同じ大きさの穴を掘削して造られたようである。

**規模：**検出面での平面規模は、一辺2.5mほどの方形で、井戸側の大きさは、一辺1mほどである。曲物は直径約0.5mを測る。検出面から上部の掘り込み部分までの深さは1.17mで、井戸側底面までは1.61m、曲物底部までは1.87mを測る。

**土層：**6層に区分される。第1層から第3層までが井戸の埋没時に堆積した土層で、第4層から第6層までは井戸構築時の掘方と考えられる。堆積の状況から、上部の土坑状掘り込み部分にも井戸側が存在したものと考えられる。

たものが、北側では2m以上となり、調査区境付近では不整形となる。深さは0.30mを測る。

**土層：**2層に区分される。灰黄色シルトを主体としている。

**出土遺物：**土師器・須恵器・黒色土器が出土した。出土状況に大きな特徴は見られない。

今回の報告では、上記の出土遺物のうち8点を抽出し、次節において詳述する。

**遺構時期：**出土した遺物から、遺構の埋没時期は平安時代前期頃と考えられる。

#### ■井戸1（第56図、写真150～153）

**位置：**調査区北東側のI 23・24リッドに位置する木組井戸である。遺構確認面の高さは標高6.21mで、現地表面から約0.7m下に位置する。

**形態：**平面形は不整方形で、断面形は回字状をしている。方形の土坑を掘削したのち、その底面を掘り込んで木組みによる井戸側を設置し、井戸側内底面の砂礫層をさらに掘り込んで曲物を設置することで水溜をしている。木組みは二重構造となつており、外側は細い板材を一辺につき10枚ほど立て並べ横桟で連結している。内側は、厚手の板材を横にして方形に組み上げている。また、検出時には、内側の井戸側は土圧によって井戸内へ折れ曲がっていた。曲物は、井戸側内のやや南寄りに設置されていた。

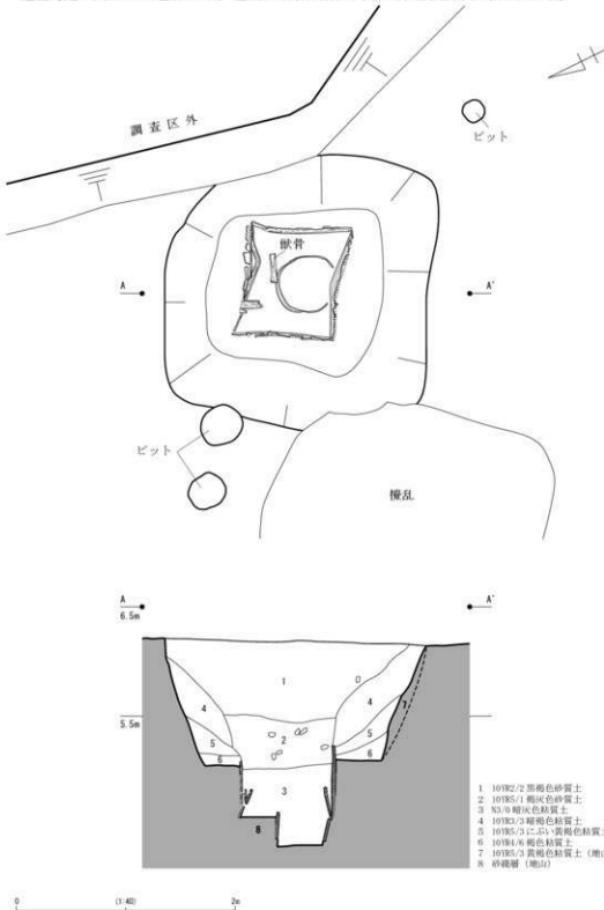
井戸側と曲物設置部分には掘方等は確認

土質は、掘方部分は褐色系の粘質土で、埋没部分は上部が砂質土、下部が粘土質であった。埋没土層中から少量の遺物が出土した。

**出土遺物**：埋没時の土層から土師器・須恵器が少量と獸骨が1点出土した。祭祀等に關わるような特徴的な出土状況は見られない。

今回の報告では、上記の出土遺物のうち5点を抽出し、次節において詳述する。

**遺構時期**：出土した遺物から、遺構の埋没時期は平安時代後期頃と考えられる。



第56図 井戸1

**■土坑6（第57図、写真154～157）**

**位置：**調査区北西側のD 16 グリッドに位置する。溝5を切る。遺構確認面の高さは標高 6.03 mで、現地表面から約 0.9 m 下に位置する。長軸方向は N-40°-W を示す。

**形態：**平面形は楕円形で、断面形は皿状をしている。底面は緩やかに湾曲し、外側へ立ち上がる。

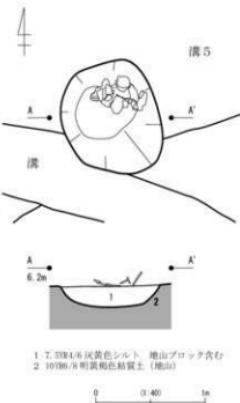
**規模：**長軸 1.09 m、短軸 0.90 m を測る。深さは 0.18 m を測る。

**土層：**灰黄色シルトを主体とする單一層である。本層上面の検出面において土師器・須恵器の破片が集中して出土した。

**出土遺物：**検出面上から土師器・須恵器が集中して出土した。

今回の報告では、上記の出土遺物のうち 4 点を抽出し、次節において詳述する。

**遺構時期：**出土した遺物から、遺構の埋没時期は平安時代後期頃と考えられる。



1 T. 50B4/6(灰黄色シルト、地山ブロック含む)  
2 101BB/8(明黄褐色粘質土、地山)

第57図 土坑6

**5. 中世****■溝7（第58図、写真158～162）**

**位置：**調査区北側のE 18 グリッド付近から南東のJ 24 グリッドにかけて位置する溝状遺構である。溝2・4・6を切り、溝の両端は調査区外へ及んでいる。遺構確認面の高さは標高 6.02 mで、現地表面から約 0.7 m 下に位置する。軸方向は N-53°-W を示すが、北西側では N-32°-E へと大きく方向を変える。

**形態：**平面形は不均等な溝状で、場所によって深さや底面形状が異なる。特に東側の底面は複雑な起伏を持ち、テラス状の平坦面が棚状に複数認められた。断面形も場所により異なるが、おおむね皿状で、底面は緩やかに湾曲し、外側へ向けて立ち上がる。

**規模：**検出された範囲での規模は、長さ 41.3 m を測り、幅は最大で 4.5 m、最小で 0.9 m と場所によって大きく異なる。深さは西側から東側へ向けて段階的に深くなっている。西側で 0.07 m、中央で 0.24 m、東側で 0.37 m を測る。

**土層：**3 層に区分される。粘質や砂質のシルトを主体としている。

**出土遺物：**土師器・須恵器、青磁や台石などが出土した。出土状況に大きな特徴は見られない。

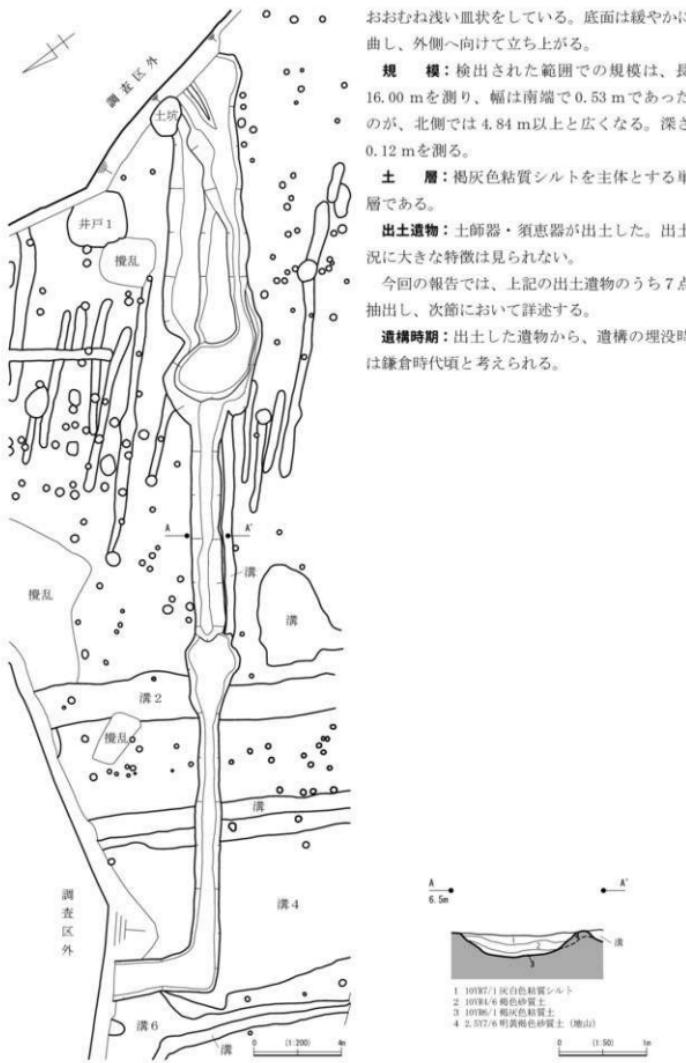
今回の報告では、出土した遺物のうち土師器・須恵器 20 点、青磁 1 点、陶器 1 点、瓦質土器 4 点、台石 1 点を抽出し、次節において詳述する。

**遺構時期：**出土した遺物から、遺構の埋没時期は鎌倉時代頃と考えられる。

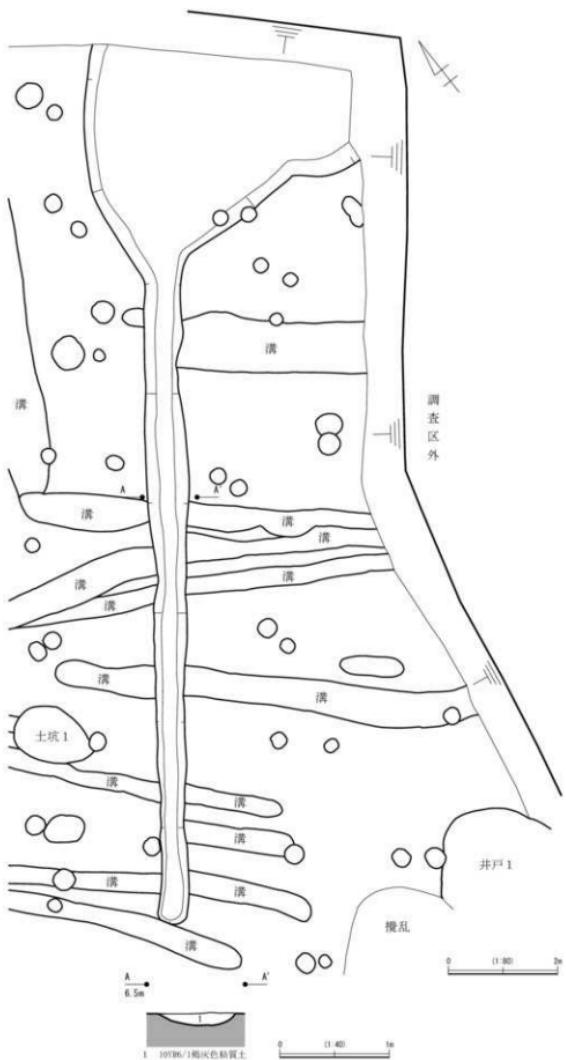
**■溝8（第59図、写真163）**

**位置：**調査区北東端のE 24、F 24・25、G 23・24、H 23 グリッドに位置する溝状遺構である。溝の北東側は調査区外へ及んでいる。遺構確認面の高さは標高 6.24 m で、現地表面から約 0.6 m 下に位置する。軸方向は N-37°-E を示すが、北側の調査区境付近で不整形となり軸方向も変化しているものと考えられる。

**形態：**平面形は溝状で、北側の調査区境付近では不整形となる。断面形も場所により異なるが、



第58図 溝7



第59図 溝8

## 6. 時期不詳

## ■土坑7（第60図、写真164・165）

**位 置：**調査区西端のC 14 グリッドに位置する。遺構確認面の高さは標高 6.12 m で、現地表面から約 1.1 m 下に位置する。長軸方向は N-33°-W を示す。

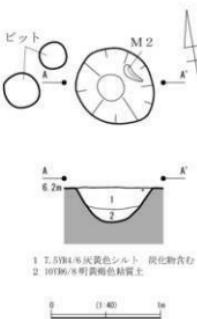
**形 態：**平面形は橢円形で、断面形はU字状をしている。底面は緩やかに湾曲し、外側へ立ち上がる。

**規 模：**長軸 0.77 m、短軸 0.67 m を測る。深さは 0.32 m を測る。

**土 層：**2層に区分される。灰黄色シルトを主体とし、上層から鉄製の鋤歎先が出土した。

**出土遺物：**遺構内北東の壁面沿いから鉄製の鋤歎先が出土した（写真 165）。

**遺構時期：**出土遺物が鋤歎先のみのため、遺構の帰属時期は不明である。



第60図 土坑7

## 第4節 出土遺物

## 1. 概要

美乃利遺跡の調査では、遺物収納コンテナ 70 箱分の遺物が出土した。弥生土器や土師器・須恵器が多いが、石器類や鉄製品、瓦なども若干出土した。

本報告書では、出土遺物のうち比較的の遺存状態が良好で実測・記録可能な遺物 227 点を抽出し、以下にその詳細を述べる。

## 2. 美乃利遺跡の出土遺物

## ■竪穴建物1出土遺物（第61図：215～221）

弥生時代終末期（庄内期）の鉢・甕・高杯が出土している。

215 は外反口縁を持つ小型の鉢である。底面に木葉痕が残る。

216～220 の外面にはタタキが残り、甕または鉢の底部と思われる。216・217 の底面には木葉痕、219 には圧痕が顕著に残る。217 と 220 の底部内面には放射状に工具圧痕が残り、鉢の可能性がある。

221 は中実の高杯脚柱部で内面に絞り目が残る。

## ■竪穴建物2出土遺物（第61図：222～235、S 8・9、J 1、M 1）

弥生時代後期末～終末期（庄内期）の壺・甕、サヌカイト剥片、碧玉製管玉、棒状鉄片が出土している。

222～226 は壺で、222 の広口壺はわずかに拡張した口縁端部に擬凹線を施す。223・224 は口縁が屈曲して立ち上がる二重口縁壺である。225 は頸部に貼付けた突帯を刻み、内面を磨く大型品で二重口縁に続くと思われる。226 は二重口縁を持つが屈曲が緩く頸部が長い。

227～231 は甕である。227 と 228 の口縁端部はわずかに上方に引き上げられているようである。

229は小型であるが器壁は厚く調整は粗雑である。230・231は甕底部で底面にタタキ目・木葉痕が残る。いずれも内面に炭化物の付着がある。

233・234は上げ底気味の底部で壺又は鉢のものと思われる。

232・235はニビオサエによる小さな脚部で製塙土器と思われる。

S 8・9は二次加工のある剥片である。ともに上半が欠損している。S 8は下端部に連続性のある剥離調整がみられ、刃部を形成していたことがわかる。S 9は不連続な調整剥離が散見できるが、それ以外の多くは階段状剥離を含むネガティブな剥離痕である。石材は、肉眼観察の所見からいずれもサヌカイト（金山産）と推測される。

J 1は暗緑灰色の碧玉製管玉である。両面穿孔で造られ、両端の孔の径はそれぞれ2.5mm、3.5mmを測る。孔内面には工具の穿孔痕が残る。直径が6.5mmと太形で、端面に研磨が施され若干丸みを帯びている。

M 1は長さ2.9cmの棒状鉄片である。断面は隅丸長方形で、幅0.75cm、厚さ0.25cmである。柳葉式鉄鎌の可能性もある。

#### ■竪穴建物3出土遺物（第61図：236～240）

弥生時代終末期（庄内期）の壺・甕・高坏・手培りが出土している。

236は口縁が単純に聞く広口壺で肩が大きく張るものである。

237はく字口縁甕で、体部下半に粗いミガキによる凹凸が顕著で、被熱による赤変・口縁部へのスス状炭化物の付着が顕著である。

238は内面に放射状工具痕が残り、鉢の底部と思われる。

239は椀状坏部の高坏である。脚柱部は中実で内面に工具痕が残り、円形透しが3方に穿たれる。

240は手培りである。鉢部口縁はく字状を呈し、上端部に山形で狭面の覆部を接合する。覆部の頂部は三角形状に尖る。体部は半球状で不安定な丸底である。内外面に薄くスス様の炭化物が付着する。

#### ■竪穴建物4出土遺物（第62～64図：241～280、S 10～16）

弥生時代終末期（庄内期）の壺・甕・鉢・高坏・器台・蔽石・砥石・台石が出土している。

241～247は壺である。241は広口壺口縁部で大きく聞く端部を上方に引き上げる。242は広口長頸壺で筒状の頸部から口縁部が屈曲して大きく聞く。吉野川下流域（阿波）に類例を見る。243～245は二重口縁壺で、244の口縁立ち上がり部外面には柳描き波状文がめぐる。246は扁球状の細頸壺体部で精良な胎土で丁寧に磨かれる。脚台が付く東中部瀬戸内系のものであろうか。247は外反口縁を持つ小型品で体部は外側に張り、底部は尖り不安定である。器壁は厚く調整は粗雑である。内面に白色の付着物が認められる。

248～266は連続らせんタタキによる甕である。248・251～258は口縁端部が引き上げられ、253・256～258の端面には擬回線が施され、近畿北部系統かと思われる。259は直線的にすぼまる体部から鋭角に屈曲してほぼ水平に広がる口縁の端部を引き上げたもので、胎土は茶褐色で角閃石が顕著に見られ、中部瀬戸内系（下川津B類）の搬入品と思われる。261～266はタタキ甕の底部である。

267～269の底部は壺又は鉢のものと思われる。

270～274は高坏である。270は外反口縁を持ち、端部は上方に引き上げられる。全体に厚手で重く、ミガキによって丁寧に仕上げられる。径6mmの小さめの円孔を鋭利な工具により5方に穿つ。271は高坏の坏部であるが、屈曲して立ち上がる外反口縁部分が剥離している。薄手でより丁寧に仕上げら

れた精製品である。272・273は中空の絞った脚柱部で底に粘土が充填される。273の円孔は3方向に穿たれる。274は小型品であるが大きく開く脚部で、円孔は2個残存（推定4方）する。

275は鉢で、平底で体部が直線的に開く。278はやや上げ底の底部である。

276・277は上げ底の小さな脚台を持ち、何れも被熱しており、瀬戸内系の製塙器かと思われる。

279は複合2段構成の装飾器台である。身部の引き上げられた口縁には2条の擬回線がめぐる。立ち上がり部の透かしは砲弾形で4方に穿たれ、切り口の鋭さから鋭利な工具（金属器等）を使用したものと思われる。器受部の口径は身部に比べて小さい。いずれの口縁端部も上方に引き上げられるが下方への扯張は見られない。全体的に丁寧なミガキが施されている。近畿北部系の西谷式に類例を見る。

280はやや薄手ではあるが、イイダコ壺かと思われる。

石器は合計17点出土した。内訳は敲石が10点、砥石が1点、台石が2点、台石兼砥石が1点、用途不明が3点である。本報告ではそのうち7点を図化した。

S 10はシルト岩（泥岩）製の砥石である。欠損部が少なく完形に近い。断面は正方形に近く直角柱状であるため定形砥石といえる。5面の砥ぎ面をもち、細かな擦痕が無数に確認できる。その影響か5面中4面は緩やかに凹面を形成する。目視による砥石目の観察から肌理の細かい仕上砥であると考えられる。

S 11～14は、敲石である。すべて花崗岩製である。S 11・12は楕円柱状で、下端部にむけて細く窄まっていく。下端部には敲打痕がみられる。S 13は下端部にむけて幅の広がる楕円柱状で、上・下端部に敲打痕が確認できる。また被熱によって右側面が変色する。S 14は楕円柱状で、他の敲石に比べて小型である。上部は欠損する。下端部と左側面に敲打痕が顕著に確認できる。

S 15は、花崗岩製の台石である。表裏面ともに平坦である。裏面には被熱による変色がみられる。

S 16は凝灰岩製の台石兼砥石である。表面と右側面のみ遺存しており、残りは欠損する。表面中央付近には敲打痕が顕著に残る。表面左上には2条の溝状痕が確認できる。幅が0.8～1.5mmで、横断面形がV字形を呈しており、溝内には並行する擦痕がみられる。このことから、何らかの刃先の接触による痕跡であると考えられる。またその周辺には水滴上の付着物が複数認められ、被熱による変色も若干確認できる。右側面にも被熱による変色がみられる。

#### ■土坑1出土遺物（第64図：281～285）

弥生時代終末期（庄内期）の甕・鉢・器台が出土している。

281～283は甕である。282は分割成形の痕跡も認められ、口縁端部はわずかに上方に引上げられる。

284は小型の鉢である。口縁内面はヨコハケで丁寧に調整され底面には木葉痕が残る。

285は器台である。複合口縁を持つ装飾器台で、体部には5方向に3段の円形透かしを互い違いに穿ち、それらをつなぐ直線で分割し、6～9本単位のヘラ描き沈線を埋める（展開図参照）。弧帶文に由来する交差文を意識したものかと思われる。受け部には体部最上段の5つの円孔を起点に6～9本単位のヘラ描き沈線を弧状に、口縁立ち上がり部の空白部分を埋めるように互い違いの位置に配される（俯瞰図参照）。

#### ■土坑2出土遺物（第65図：286～292）

弥生時代終末期（庄内期）の甕・鉢・高坏が出土している。

286～290はく字口縁甕で、いずれにも縛部の引き上げは見られない。スヌの付着が見られる。

291は薄手であるが、底部にユビオサエ、内面に丁寧なハケ調整があり、ほぼ口縁に及ぶ直口の鉢と思われる。わずかにドーナツ状の上げ底である。

292は中実の高杯脚部である。円孔は3方に穿たれ、丁寧に磨かれる。

#### ■土坑3出土遺物（第65図：293～297）

弥生時代終末期（庄内期）の壺・甕が出土している。

293～295は壺である。293と294は実測図径にずれがあるが同一個体の可能性が高い。広口壺で拡張した口縁端面に2条の擬凹線を施し、肩部2箇所に焼成後穿孔を穿つ。底面には木葉痕が残る。295は短頸壺で口縁端部に全周しない刻み目を施す。口縁内外面は細かいヘラミガキで仕上げられる。

296・297は甕である。296の口縁端部はわずかに引き上げられる。

#### ■土坑4出土遺物（第65図：298）

弥生時代中期の壺底部が出土している。

298は多くの破片の集積で、安定した大きな平底である。胎土には径2mm前後の小礫が多く含まれており、おそらく中期の大型壺と思われるが、上半の破片は検出できず、全容は想定しがたい。

#### ■溝1出土遺物（第66・67図：299～329）

弥生時代終末期（庄内期）の壺・甕・高杯・鉢が出土している。

299～307は壺である。299・300は筒状に立ち上がる頸部から大きく開く口縁の端面を引き上げ気味に形成し、丁寧にミガキで仕上げられた広口壺である。301・303～307は西播磨でいわれる広口太頭壺にあたり、球状の体部から外反してひらく短い口縁で、口縁端部に面は持たないが、引き上げられるものもある（305・307）。307は甕ともとれる形態であるが、肩部外面にはタタキの凹凸が見られないことから壺に分類した。306は小型品で底部を欠くが、丸底に近いものであろう。302は被熱による赤変・スス付着が見られるが、この種の壺の体部にあたると思われ上げ底である。

308～315・326～329は甕である。いずれもタタキ甕で体部の張りは大きい。被熱による赤変・スス付着が見られ、308・327では内面に炭化物の付着も見られる。313・315・329はドーナツ状上げ底で木葉痕が残り、314の小型品底面にはタタキ目が残る。312の体部中位には焼成後穿孔が1個みられる。

316～319は高杯である。316～318は有稜高杯の杯部で318では口縁部外面に4条の擬凹線がめぐる。319は脚柱部で中央のヘソ状充填部が剥落している。根部に円形透かしが1個残存する。

320～325は鉢である。320～322は外反口縁鉢で、320・322の底部はドーナツ状上げ底である。322の口縁端部には擬凹線がめぐり、ヘラミガキで丁寧に仕上げられる。323は小型の直口鉢でこれもドーナツ状上げ底である。324は台付鉢の脚台、325は底部中央に焼成前穿孔される有孔鉢である。

#### ■溝2出土遺物（第67図：330～335）

弥生時代終末期（庄内期）の甕、奈良時代の土師器の甕と皿A、須恵器の杯B蓋・杯A・壺胴底部が出土している。

330は弥生時代終末期（庄内期）の外反口縁の大型タタキ甕である。

331・335は土師器である。331は長胴体部に如意状に短く外上方に立ち上がる口縁部をつくる甕である。335は口縁部を2段にヨコナデして端部は上につまみ上げて三角形状につくる皿である。

332～334は須恵器である。332は杯B蓋である。口縁端部を屈曲させ、天井部から口縁部全体にまるく仕上げる。333は杯Aである。外上方に直線的に口縁体部を立ち上げる。334は肩の張る扁平な体部にやや踏ん張る低い高台をつくる壺の体底部である。

#### ■溝3出土遺物（第67図：336）

溝の上層から須恵器壺1点が出土している。

336は肩の張る扁平な体部に短く内湾して立ち上がる口縁部をつくる短頸壺である。焼成時に用いた湿台の痕跡がみられる。

#### ■溝4出土遺物（第68・69図：337～358）

弥生時代の甕・高坏、平安時代の須恵器杯・蓋・碗・壺・鉢、土師器杯・皿・甕と甕片等の土製品、瓦が出土している。

337～341は弥生土器である。337・338は甕である。337はく字口縁の端部を上方に引き上げ、端面に凹線をめぐらせる中期の甕である。胎土に金雲母を含む。338はく字口縁の弥生時代終末期（庄内期）に属する大型甕である。342は小型の甕である。

339・340の底部はいずれも弥生時代終末期（庄内期）の壺のものかと思われる。

341はゆるく屈曲して立ち上がる口縁を水平に肥厚し内外面を細かいヘラミガキで丁寧に仕上げた中期の鉢である。

343～348・354・355は須恵器である。

343は杯Bで、やや内湾気味に立ち上がる口縁体部と底部の境に外に踏ん張る貼付け高台をつける。344・345・348は杯Aである。344は外上方に直線的にひらく口縁体部に、ヘラ切りによって窪む底部をつくる。345は平底で底部内面に「×」のヘラ書きがみられる。体部に火捺がみられる。348は内湾して立ち上がる口縁体部をもつ。347は、板状高台に内湾して立ち上がる口縁体部をつくる椀底部片である。346は杯B蓋である。口縁端部を屈曲させ、天井部から口縁部全体をまるく仕上げる。内面に「×」のヘラ書きがみられる。つまみは付けていない。

354は広口壺の体底部と考えられる。外に踏ん張る貼り付け高台に、肩を稜線として張る胴体部をもつ壺である。

355の鉢は体部下半で内湾しながら外上方に立ち上がり、口縁端は上下に拡張して玉縁状につくる。土師器には杯349・350と皿351、甕口縁部352がある。

349は椀A IIで、口縁端を強くナデて内面に凹線を巡らせる。底部はやや窪む。350は杯Aである。外上方に直線的に口縁体部を立ち上げる。351は皿Aである。平底から外上方に直線的に口縁体部を立ち上げる。352は、上方向に「く」字に立ち上がる甕口縁部で、口縁端は水平に折り返して肥厚させる。

353は管状土錐で一部を欠いている。

356・357は甕片で、356は焚き口の左側天井部分で比較的幅広の底をはりつける。357は焚口の右側下部で比較的幅広の底をはりつける。

358は平瓦である。凸面は縱方向の斜格子叩き、凹面は布目压痕と糸切痕跡を残す。

#### ■土坑5出土遺物（第69図：359・360）

平瓦2点が土坑底に平置きされた状態で出土している。

359・360ともに凸面は縦方向の綱目叩きのあと横方向のケズリをしてナデ調整している。凹面は布目圧痕と糸切痕跡を残す。端部はヘラケズリを行う。

#### ■溝5出土遺物（第70図：361～365）

須恵器蓋・土師器椀・甕・瓦が出土している。

須恵器蓋361・362は、いずれも杯BⅢの蓋である。361は宝珠つまみ片で全体を回転ナデで仕上げる。362は丸みのある天井部から口縁端部を下方に短く突出させる。

土師器363は椀Cである。体部は内湾し、底部はわずかにくぼむ。364は「く」の字に屈曲する甕の口縁部で、端部は斜め上方につまみ上げて面をつくる。

瓦365は、凸面が綱目叩き、凹面は布目圧痕の平瓦である。

#### ■溝6出土遺物（第70図：366～373）

須恵器椀・壺・黒色土器・土師器鍋・鉢・皿が出土している。

367～370は須恵器である。

367～369は椀の底部片である。367・368はやや外に踏ん張る高い高台を付ける。368は回転糸切後に高台を貼付け、高台端部1ヶ所に刻み目がある。369は板状高台から内湾して立ち上がる椀底部である。回転糸切で切り離す。370は、平底の底部をもつ壺の破片である。

黒色土器366は、やや外に踏ん張る高台をもつ椀底部片である。底部内面にミガキをもつ黒色土器B種である。

371～373は土師器である。

371は真上に伸びる口縁部の直下に鍔を持つ鍋の口縁部である。372は、体部は外上方に直線的にひらく鉢の口縁部で、口縁部は外へ水平に屈曲させる。口縁端部はやや上方につまんで拡張する。373は平底の底部から直線的に外上方に立ち上がる皿である。

#### ■井戸1出土遺物（第70図：374～378）

須恵器杯蓋・椀・鉢・土師器皿が出土している。

374～377は須恵器である。

374は杯B蓋で、丸い天井部のほぼ直角に短く屈曲する口縁部をつくる。375は内湾して立ち上がる体部に、少し外に開く口縁部をつくる。全体に回転ナデで仕上げ、薄つくりである。376は板状高台に外上方に開く体部をつくる椀である。377は口縁部周縁をナデて、口縁端部を外に引き出し、面をつくる鉢の口縁部である。

378は土師器で、外上方にひきあげて口縁部をつくる。底部の引き離しは回転糸切の皿である。色調は赤色をしていて、焼きは堅致であり、煙管窯による須恵器生産のなかで製作された土師器とみられる。

#### ■土坑6出土遺物（第71図：379～382）

須恵器碗・甕・土師器羽釜が出土している。

須恵器甕379・381はいずれも丸い体部をもつ広口の甕で、379は頸部を大きく外反し口縁端部を直上につまみあげる小型甕である。381は丸い胴体部から大きくアールを描いて外上方に開く口縁部をつくる。口縁端部は上方にわずかにつまみあげる。須恵器碗380は外上方に直線的に開く椀の口縁

体部である。口縁端部は丸くおさめる。

土師器羽釜 382 は、口縁部は内傾し端部は水平に面をつくる。口縁部直下に水平に鈞がつき、鈞の直下で体部が大きく膨らむ球体となる。

#### ■溝7出土遺物（第71・72図：383～408、S 17）

須恵器杯蓋・杯・椀・皿・鉢、土師器羽釜・椀・皿、青磁椀、陶器甕、台石が出土している。

383～392は須恵器である。

383は杯B蓋の天井部片である。扁平な中窪みの宝珠つまみを付ける。384は杯Bの底部片である。底体部境のやや内側に高台を貼り付ける。385・386・388・389は板状高台に内湾気味に口縁部を立ち上げる椀である。385は内湾して立ち上がる椀口縁部片。386は板状高台のやや内側から内湾気味に体部を立ち上げ、口縁部は外に水平に丸くおさめる。板状高台端部は欠いている。388は板状高台のやや内側から外反する体部にやや内湾する口縁部をつくる。口縁と体部境に沈線をめぐらせる。口縁端を欠く。389は低い板状高台に丸く内湾する体部をつくる椀片で、切り離しは回転糸切で行う。387は板状高台の外上方に短く口縁部をつくる小皿である。口縁部は上方につまみ上げる。底部の切り離しは回転糸切を行う。390～392は、いずれも捏鉢である。390は外上方に開く体底部片である。391はやや内湾気味に立ち上がる体部に玉縁状に端部を下方に拡張する口縁部をつくる。392は板状高台に内湾して立ち上がる体部をつくる。

393は青磁椀の口縁部で、口縁端部直下を強くナデてやや外反させる。体部外面に付着物が観察できる。

土師器の羽釜には、やや直線的に内傾する口縁部をつくる394・402・406と、丸く口縁部をつくる398・399・401があり、いずれも内傾する口縁端面をつくる。407・408は土師器脚付羽釜の支脚上部である。

瓦質土器の羽釜には400・403～405があり、405には3本の支脚を鈞直下に付け、口縁端は水平につくる。

土師器椀395は板状高台に内湾する丸い口縁部をつくる。

土師器皿396は粘土板を斜め上方に折り曲げて成形する。

陶器甕397は直立する口頭部をつくり、口縁端は外下方に折り曲げて端部を丸くつくる。備前甕とみられる。

S 17は花崗岩製の台石である。上面の一部以外は欠損している。全体的に被熱しており、欠損部の割れ面を含めて黒く変色していることから、欠損した後に二次的に熱を受けたものと考えられる。

#### ■溝8出土遺物（第72図：409～415）

須恵器椀・鉢、土師器皿・甕・羽釜支脚がある。

409～411は須恵器である。409は鉢で、口縁部が「く」字状に屈曲する。口縁端部はやや外下方に突出し面をつくる。410は外上方に開く捏鉢の口縁部である。口縁端部を上下に拡張して玉縁につくる。411は板状高台から外上方に開く体部をつくる椀である。切り離しは回転糸切で切り離す。

412～415は土師器である。

412は体部はほとんど張らず、口縁部は逆L形に屈曲させ、端部はやや上方につまみあげる甕である。413は中央でやや窪む底部に肥厚しながら立ち上がる口縁部をつくる皿である。414は板状の粘土を斜め上方につまみあげて口縁部をつくる皿である。415は羽釜の脚部である。

### ■土坑7出土遺物（写真165）

M2は、銹化が著しく破片資料となっているため図示できていないが、鉄製のU字形鋤鋸先である。幅は18.7cm前後である。破片資料の断面観察によると、長方形の鉄板を長軸方向に折り曲げ、着柄部分のV字溝を作り出しているものとみられる。共伴遺物が出土していないため明確な時期を決定することは難しいが、古墳時代中期以降と考えておきたい。

### ■その他の出土遺物（第73・74図：416～427、S 18・19）

遺物包含層や今回ピックアップしていない遺構から出土した遺物のうち、特徴的なものを報告する。弥生土器の壺・甕、土師器皿、土鍤、石包丁やスクレイパーが出土している。

416～424は遺物包含層から出土した弥生土器である。

416はく字に屈曲する口縁端部を上方に引き上げる中期の甕である（337に類似）。肩部下方に櫛状工具による刺突をめぐらせる。

以下は弥生時代終末期（庄内期）に属する。

417～421は壺である。419は四国系広口長頸壺で口縁端部に擬回線がめぐる。体部下半に焼成後穿孔がみられる。417・420は二重口縁壺で、417では外反する口縁外面に鋸歯文状の線刻がある。

420の口縁はほぼ垂直に立ち上がり、ヘラ描き斜行文（12～13本単位）を角度を反転して交互に配し、その間の三角形部分に多数の小径の竹管文（双小円文）を2個1対として施す（4単位）。内面口縁受部に端部と同じ工具を半截した多数の双小半円文を押捺している。阿波系の影響を受けたものか。

421は広口太頸壺でやや扁平な体部である。外面のタタキは中位以外は未調整、被熱による赤変が顕著でススが付着しており、甕的な用途であったものかとも思われる。418はほぼ球形の体部から筒状の頸部が伸びるもので、広口壺か長頸壺であろうかと思われるが、調整は粗く外面にスス、内面に炭化物の付着が見られる。

422～424は甕である。いずれも口縁端部は上方へ引き上げられる。422は長胴気味である。いずれも被熱による赤変、ススの付着が見られ、422では内面に炭化物の付着も見られる。

425・426は土師器の皿である。板状の粘土を斜め上方につまみあげて口縁部をつくる。426は全体に薄く仕上げる。

427は棒状土鍤で、焼成前に穿孔している。片側の一部を欠く。

S 18は磨製石包丁である。右側三分の一が欠損している。刃部の湾曲が緩く直線刃に近いが、端部がやや尖ることから筋錐形と考えられる。全体的に擦痕がみられるものの、刃部に剥離痕が残り、刃が鈍いため未製品と考えられる。紐孔は回転穿孔2孔で、やや左側に偏っている。石材は砂岩製であり、肉眼観察の所見から明石川流域産のものと考えられる。

S 19は局部磨製を施した大型のスクレイパーである。背面中央付近に擦痕が明瞭に認められる。刃部は全体的に銳利であるが、一部使用による刃潰れがみられる。背面と腹面の両側に調整剥離が施されている。また両側面も欠損ではなく剥離面であるため、石核素材の石器である。石材は肉眼観察の所見から金山産のサヌカイトと推測される。

### 3. 小結

#### (1) 弥生時代の土器

美乃利遺跡出土の弥生土器は主に弥生時代終末期（庄内期）に属するもので、堅穴建物1～4、土坑1～3、溝1・2からまとめて出土している。

それらに先行する時期の特徴を持つ遺物として、弥生時代中期・後期末（V様式末）の土器も見受けられるが、少数である。

多くの土器は、庄内期の中でもその前半に該当し、外来系の要素を持つものも含まれる。

壺では広口壺の口縁端部を引き上げるものや、二重口縁壺を中心に、長頸壺・細頸壺などがある。

241・242は吉野川下流域に類例を見る阿波波系の長頸壺、246は精良な胎土で東中部瀬戸内系の細頸壺かと思われる。420は口縁を小径の竹管状の工具で加飾した近辺ではあまり見られないタイプの二重口縁壺である。

甕ではタキ甕が伝統的V様式を継続し、口縁端部を引き上げるものが目立つ。庄内式土器にみられる薄く削られた器壁に密度の高いタキが施されたものは、少量の小破片に確認できる程度である。引き上げた口縁の端面に擬回線をめぐらせた近畿北部系のものも見られる。259は茶褐色の胎土で中部瀬戸内（北東四国：下川津B類）の特徴的な形態を示す搬入品である。

高坏では碗形・外反口縁の両者があり、後の270は厚手で器台としての用途も考えられる淡路系、318は外面に擬回線をめぐる山陰系の要素を持つ。

鉢では外反口縁を持つ中型品と直口の小型品の両者がある。

器台では在地系のものが確認できない中で279の近畿北部系の西谷式の複合器台、285の加飾器台が目立つ。279は透孔が砲弾形であること、器受け部の径が小さいこと等、西谷式の器台と異なる要素も併せ持つ。285は二重口縁を持ち淡路系の器台との関連を考えるが、続く筒状の体部へ脚部に、円孔を起点に直線と多条の弧状文とを組み合わせたヘラ描きがあり、周辺地域でも類似品の確認はない。あるいは上下逆転する可能性も含めて、類例を求める<sup>(1)</sup>。いずれも胎土や焼成の状態から搬入品との限定はできず、在地での製作が否定できない。搬入土器と明確に確認できるものは少数で、この時期の搬入土器の拠点集中のあり方からすれば、むしろ希薄と言えるかもしれない。

（註1）北陸系器台（狼橋期）にも類似の器形のものがある。

#### (2) 古墳時代から古代・中世の土器

古墳時代の土器は溝3から、奈良時代の土器は溝2から、平安時代の土器は溝4～6、井戸1、土坑6から、平安時代から鎌倉時代の土器は溝7・8から出土している。

溝3出土の短頸壺336は、神野大林窯2号窯（加古川市神野町）に類似品がみられるが、底部を手持ち削りするなどや古い様相をもつていて、陶邑TK43号窯（大阪府堺市）と同時期にあたる6世紀後半を前後する時期に、溝3は掘削され、廃絶したとみられる。

溝2出土土器は、土師器335・須恵器333が平城京左京八条三坊六坪（奈良県奈良市）SE200出土品に類似することから、8世紀後半頃に溝2が掘削され、廃絶したと考えられる。

溝4出土土器は、須恵器343～345・348、土師器349～351が平安京右京三条三坊五町（京都府京都市）SD19出土品に類似し、須恵器壺底部354が志方窯跡群中谷1号窯（加古川市志方町）に類似品をみる。したがって、9世紀前半を中心とする時期に掘削され、土師器352、須恵器壺347、捏鉢355にいたる12世紀まで溝4は使用されたと考えられる。溝5は、溝4同様に9世紀前半までに掘削されたと考えられる。

溝6については、ヘラ切りによる切り離し後、高い貼り付け高台を付ける須恵器壺367、回転糸切による切り離し後、高い貼り付け高台を付ける須恵器壺368が併存し、黒色土器壺366もみられるこ

とから志方窯跡群中谷 2 号窯から 3 号窯の時期、すなわち 9 世紀中葉以降の時期の遺構とみられる。

井戸 1 からは、神出窯跡群鶴谷 2 号窯（兵庫県神戸市）の品と考えられる捏鉢 377 が出土するが、12 世紀以降の煙管窓を用いた土師器皿 378 と楕 376 があり、鶴谷 2 号窯の操業期である 10 世紀後葉から 11 世紀前後に井戸は掘られ、12 世紀まで使用されたとみられる。土坑 6 は、甕 379・381 が島谷 1 号窯（兵庫県神戸市）の製品に類似し、12 世紀以降に形成された土坑とみられる。

溝 7 は、須恵器楕 386・388・389 から島谷 1 号窯の操業期 12 世紀を中心とした時期に掘削され、土師質や瓦質の羽釜・捏鉢が示す 13 世紀まで使用され埋没したとみられる。溝 8 は、鶴谷 2 号窯製とみられる須恵器鉢 409 から 13 世紀に下るとみられる玉縁口縁の捏鉢を含み、鶴谷 2 号窯の操業期 10 世紀後葉から鎌倉時代まで溝が利用されていたとみられる。

以上、遺構ごとに出土土器から時期の比定を試みたが、おおむね、奈良時代、平安時代前期、平安時代後期～鎌倉時代の 3 時期に美乃利遺跡において遺構が集中し、須恵器についてみれば、奈良時代と平安時代前期までは志方窯跡群の製品が搬入され、平安時代中期以降神出窯跡群における製品の搬入が顕著となることが窺える。

### (3) 石器・玉類・鉄器

堅穴建物 2、堅穴建物 4、溝 7 や、今回その他の遺構として取り扱った溝やピットから石器が出土している。また、堅穴建物 2 からは玉類と鉄器、土坑 7 からは鉄器が各 1 点出土している。

今回図化したものは下表の 15 点である。

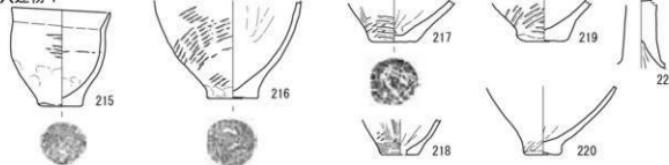
報告番号	出土遺構	種別	器種	法量				石材	備考
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
S 8	堅穴建物 2	石器	二次加工剝片	4.5	4.1	0.7	19.5	サヌカイト	
S 9	堅穴建物 2	石器	二次加工剝片	3.9	5.7	0.55	22.9	サヌカイト	
S 10	堅穴建物 4	石器	砾石	20.9	5.5	5.0	865	シルト岩(泥岩)	定形砾石
S 11	堅穴建物 4	石器	砾石	16.45	6.45	5.5	881.5	花崗岩	
S 12	堅穴建物 4	石器	砾石	16.15	6.45	5.8	776.5	花崗岩	
S 13	堅穴建物 4	石器	砾石	16.35	7.65	7.5	953	花崗岩	被熱痕あり
S 14	堅穴建物 4	石器	砾石	14.5	4.8	3.8	317.5	花崗岩	被熱痕あり
S 15	堅穴建物 4	石器	台石	19.3	10	6.3	1789	花崗岩	被熱痕あり
S 16	堅穴建物 4	石器	台石兼砾石	12.95	10.2	9.3	1488	凝灰岩	津状痕・被熱痕あり
S 17	溝 7	石器	台石	>13.3	19.6	>6.0	1648	花崗岩	被熱痕あり
S 18	その他(溝)	石器	磨製石臼丁	>9.55	5.3	1.05	60.9	砂岩	未製品
S 19	その他(ピット)	石器	スクレイバー	13.2	13.6	3.1	732	サヌカイト	局部磨製

報告番号	出土遺構	種別	器種	法量				石材	備考
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
J 1	堅穴建物 2	玉類	管玉	1.45	0.6	-	0.9	碧玉	最大孔径3.5mm

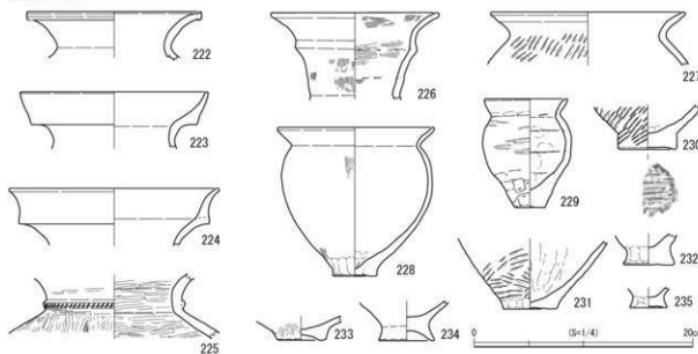
報告番号	出土遺構	種別	器種	法量				石材	備考
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
M 1	堅穴建物 2	鉄器	棒状鉄片	>2.9	>0.85	-	2.1	鉄鐵の可能性あり	
M 2	土坑 7	鉄器	鉗頭先	-	-	-	83.6	劣化著しく計測不可	

表 9 石器・玉類・鉄器観察表

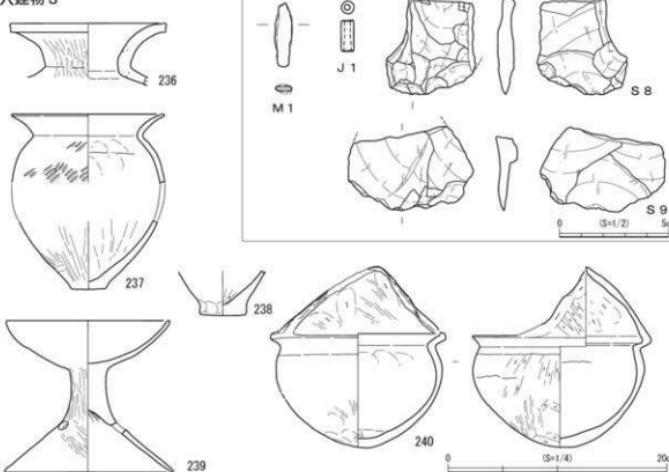
豊穴建物 1



豊穴建物 2

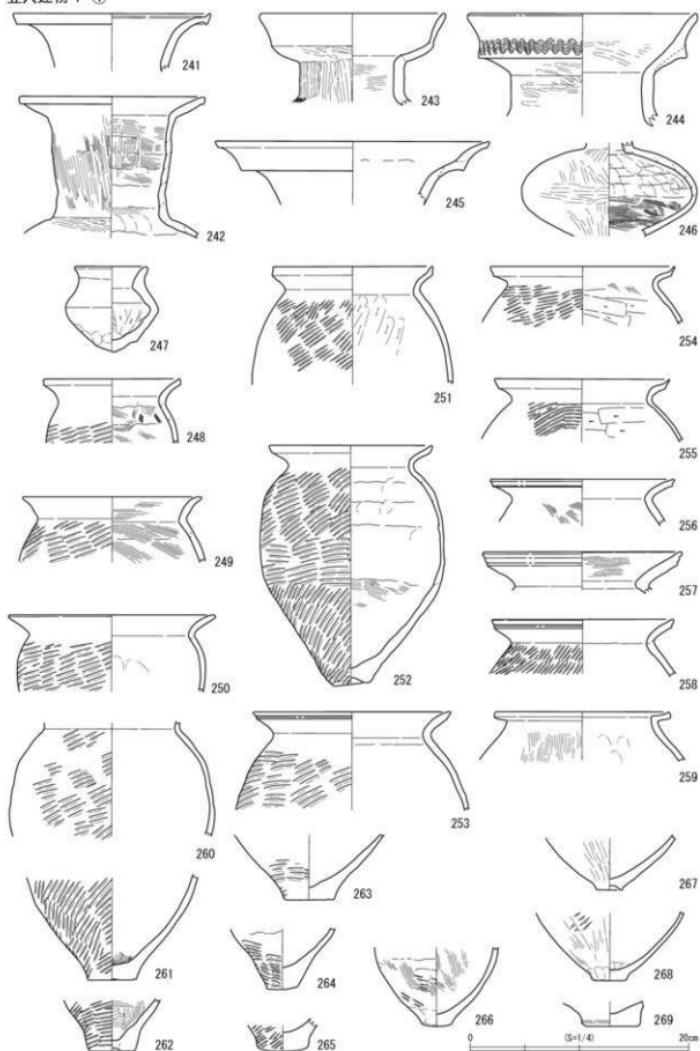


豊穴建物 3



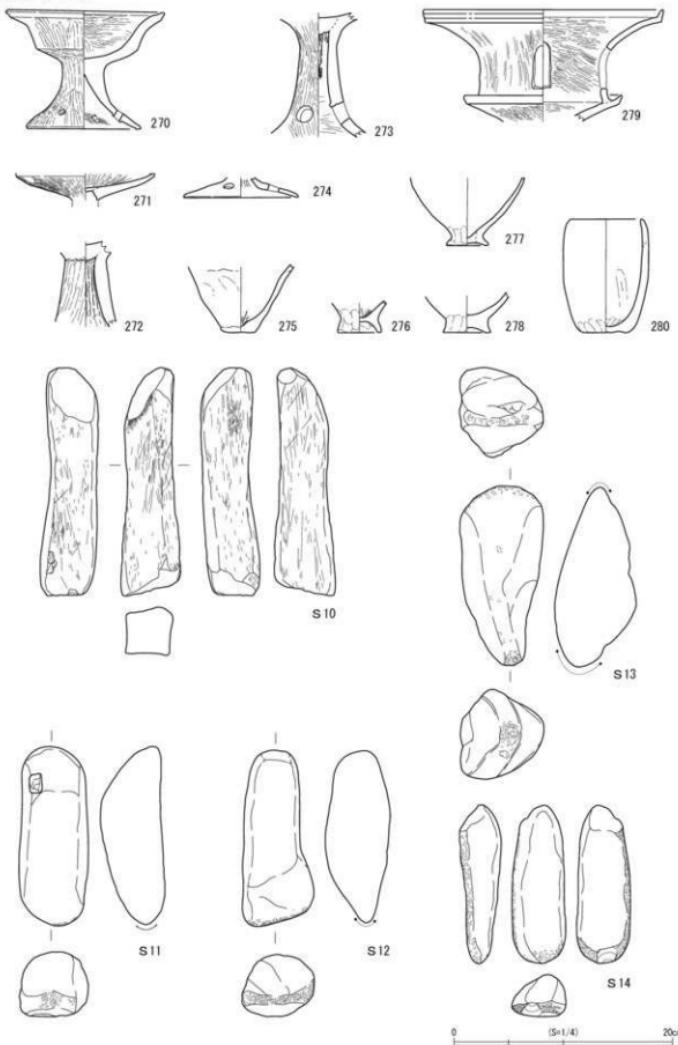
第61図 豊穴建物 1～3出土遺物

竪穴建物 4-①

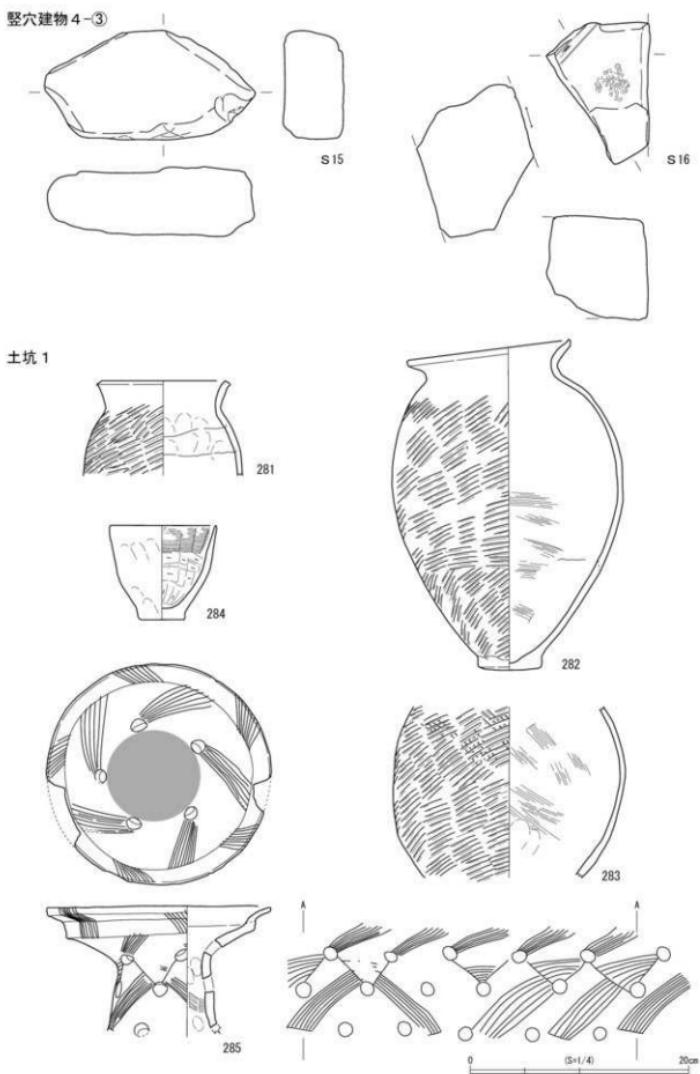


第62図 竪穴建物 4-①出土遺物

豊穴建物 4-②

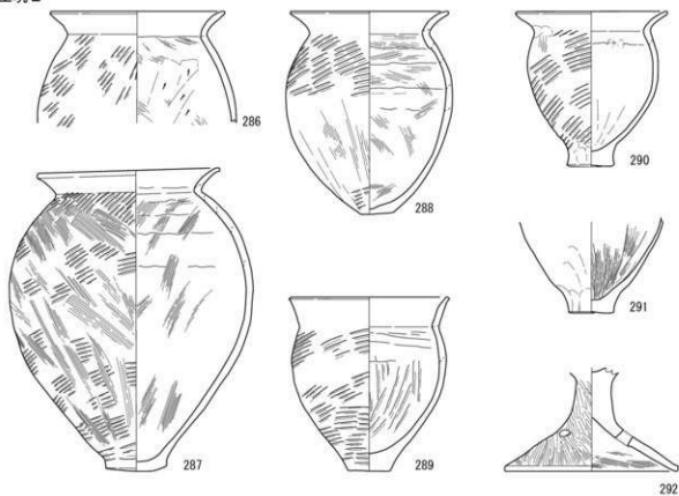


第63図 豊穴建物 4-②出土遺物

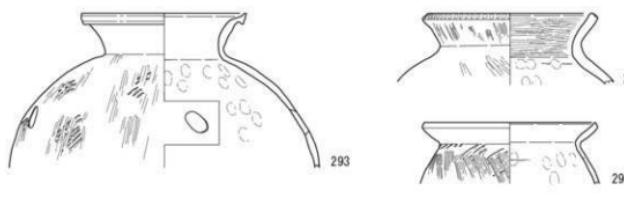


第64図 竪穴建物4-③・土坑1出土遺物

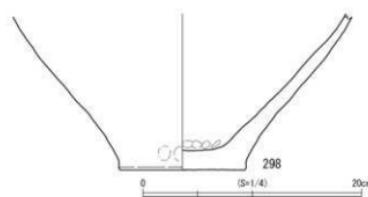
土坑 2



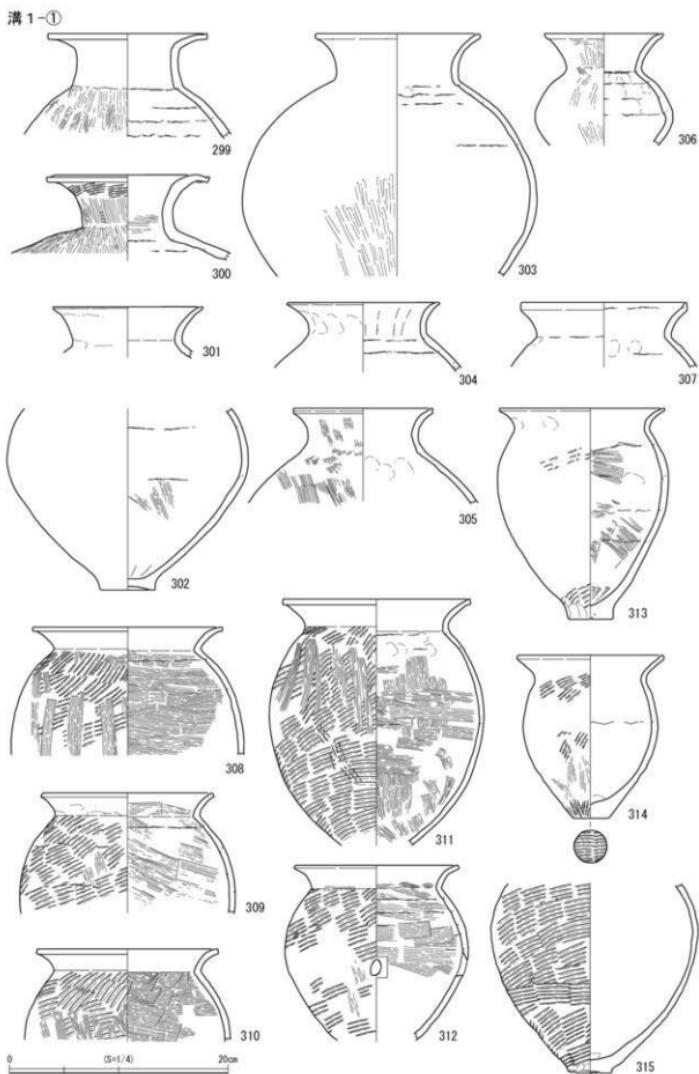
土坑 3



土坑 4

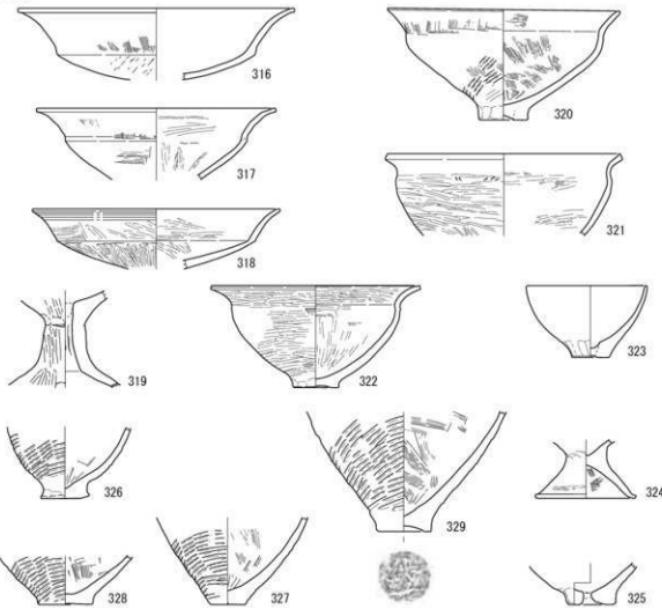


第65図 土坑 2・3・4 出土遺物



第66図 溝1-①出土遺物

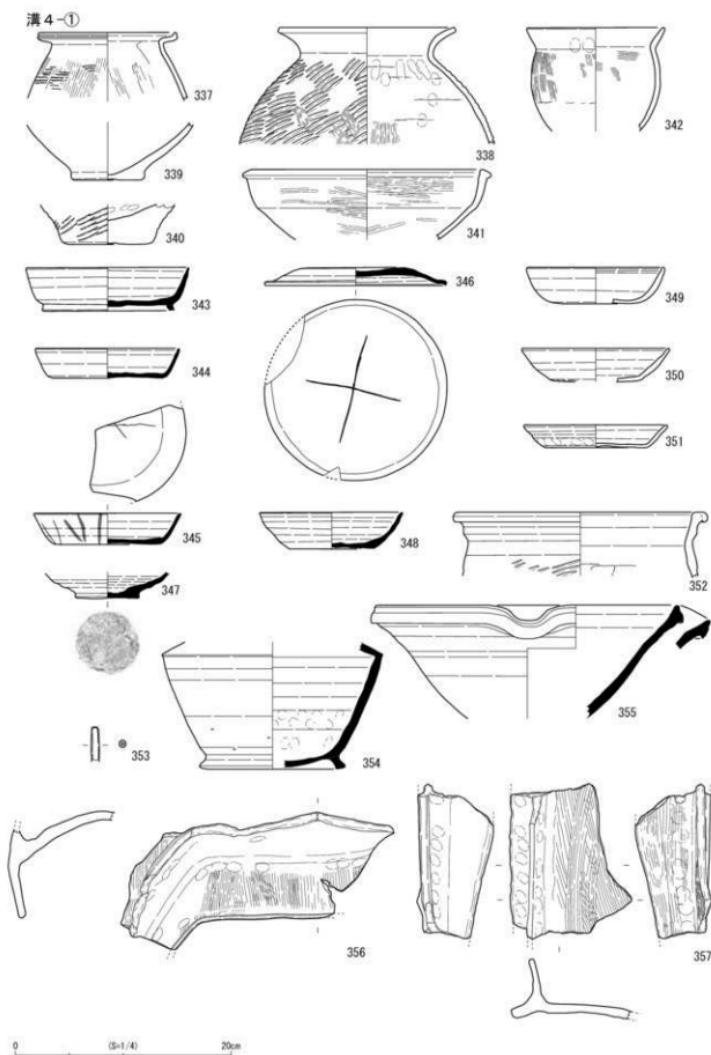
溝 1-②



溝 2

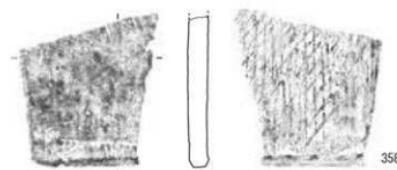


第67図 溝 1-②・2・3 出土遺物

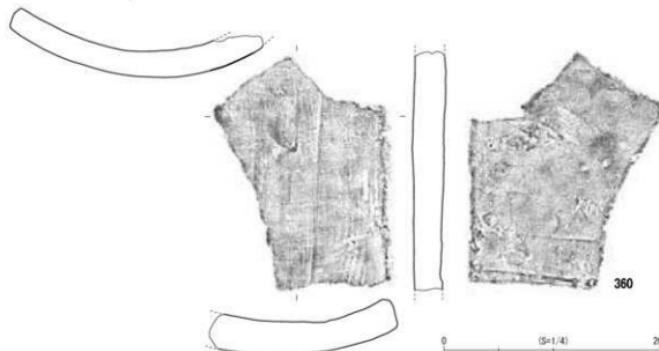
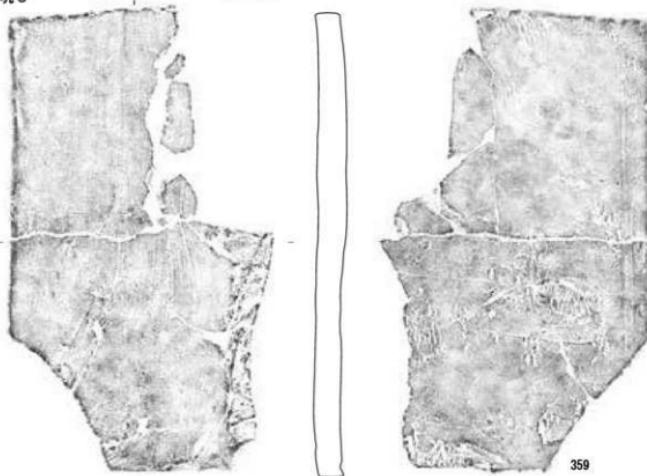


第68図 溝4-①出土遺物

溝4-②



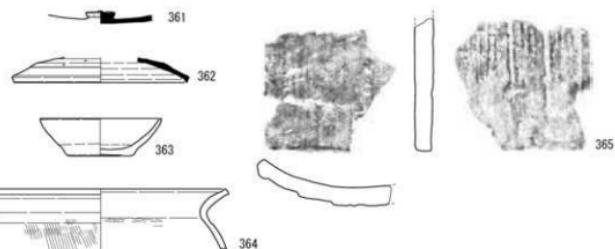
土坑5



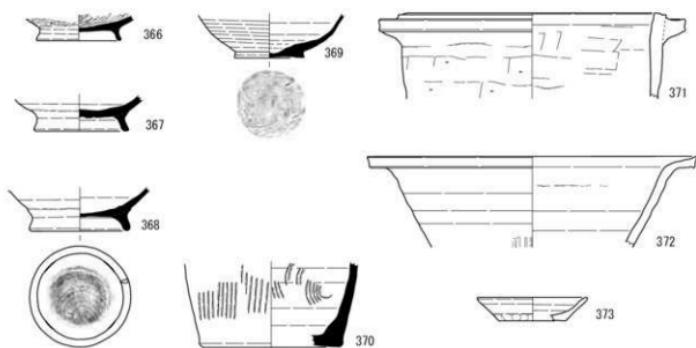
0 (5×1/4) 20cm

第69図 溝4-②・土坑5出土遺物

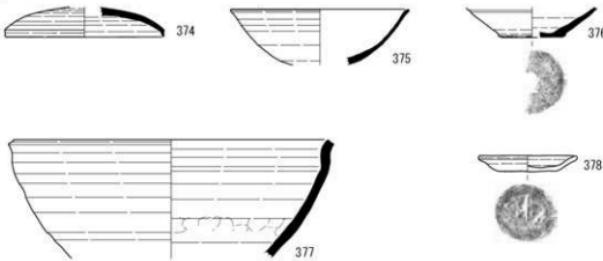
## 溝 5



## 溝 6



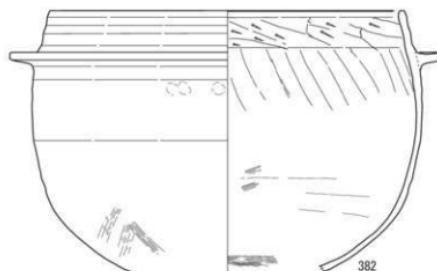
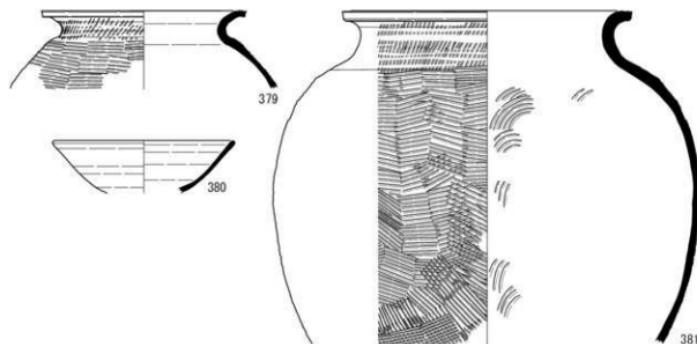
## 井戸 1



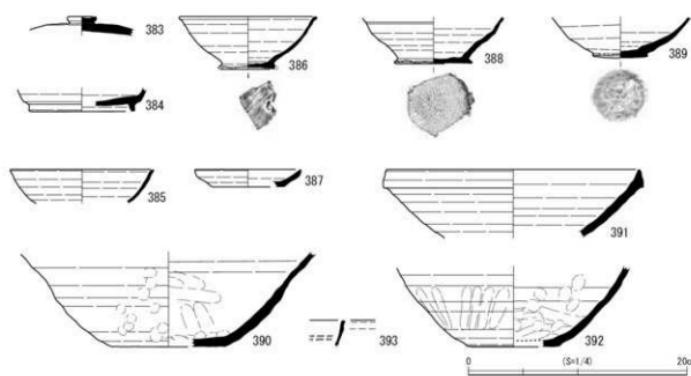
0 (S=1/4) 20cm

第70図 溝 5・6・井戸 1 出土遺物

土坑 6

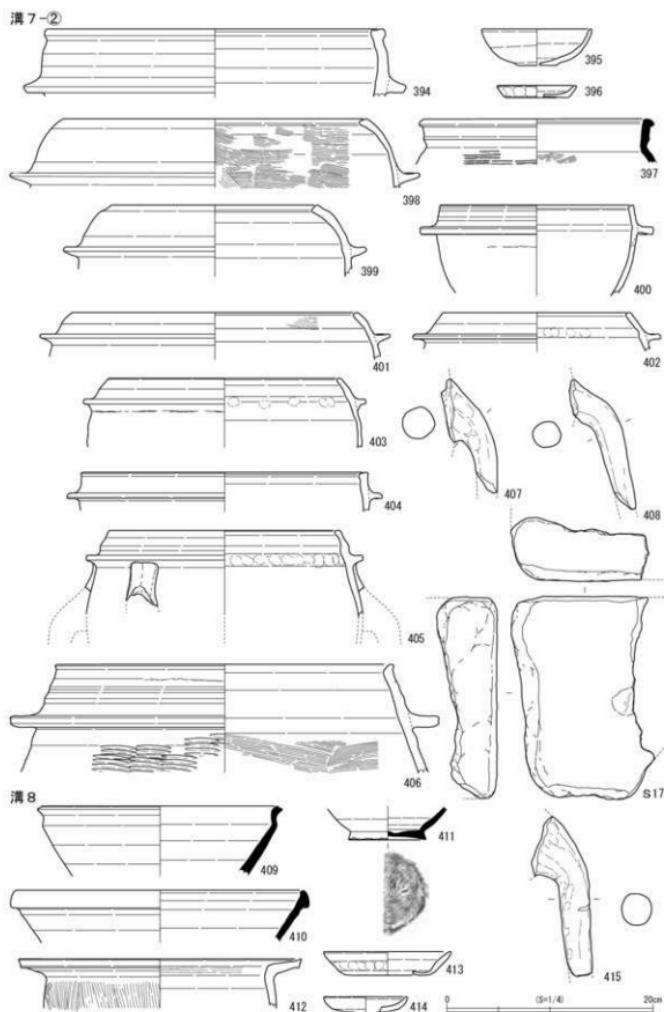


溝 7-①



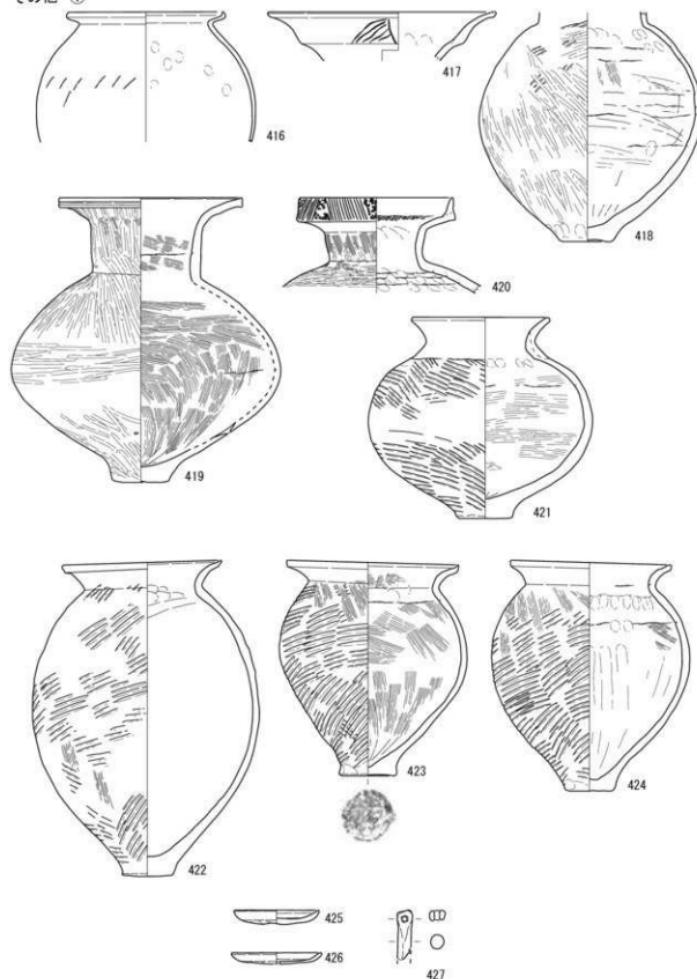
0 (S=1/4) 20cm

第71図 土坑 6・溝 7-①出土遺物



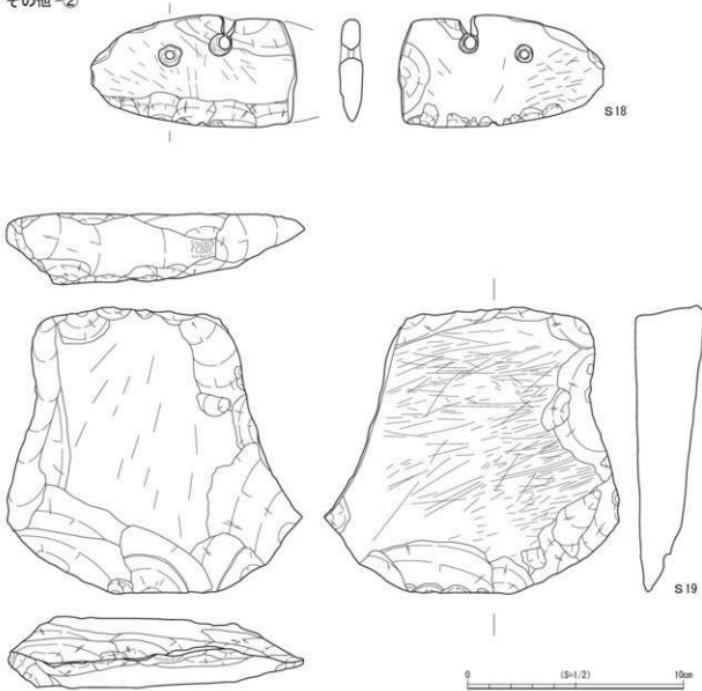
第72図 溝7-②・溝8出土遺物

その他-①



第73図 その他-①出土遺物

その他-②



第74図 その他-②出土遺物

## 第Ⅲ章 美乃利遺跡の調査成果

報告 番号	出土構造	種別	器種	法量(cm)				所見
				口径	器高	底径	腹径	
215	竪穴建物1	弥生土器	鉢	9.0	9.1	3.4		外面タタキ・コビオサエ 内面コビオサエナダ・輪縁み痕・底面タタキ後ナダ・木葉痕
216	竪穴建物1	弥生土器	甕底部		>9.0	4.4		外面タタキ・底部にコビオサエ・黒斑 内面コビオサエ・底面木葉痕
217	竪穴建物1	弥生土器	甕底部		>3.9	4.0		外縁コロナダ・黒メ・黒斑 内面コビオサエ・放射状にT型底・底面木葉痕
218	竪穴建物1	弥生土器	甕底部		>3.3	3.2		外面タタキ後ハケメ・内面ナダ・底部に工具痕
219	竪穴建物1	弥生土器	甕底部		>3.8	3.5		外縁タタキ・被覆に立毛作業・スズ付着・内面調整不明・底面汙染跡
220	竪穴建物1	弥生土器	甕底部		>6.3	3.0		外縁コロナダ・底部に工具痕・底面ハーフ状土台底 内面底部に工具痕・底面ハーフ状土台底
221	竪穴建物1	弥生土器	高杯		>6.3			外縁調整不平・内面ハロ目
222	竪穴建物2	弥生土器	広口壺	*15.8	>4.2			肥厚した外縁端面に条の製造歴文・外面部に摩滅・調整不明
223	竪穴建物2	弥生土器	中口壺	*17.0	>5.2			外面部に摩滅・調整不明
224	竪穴建物2	弥生土器	直口壺	*19.0	>5.3			外面部に摩滅・調整不明・黒斑
225	竪穴建物2	弥生土器	壺		>6.0			外縁ハクセイゼキ・頭部に削み立毛作業・内面ハロ目
226	竪穴建物2	弥生土器	直口壺	15.2	>8.0			口縁コロナダ・外面部ハクセイ・内面ハクメ・輪縁み痕
227	竪穴建物2	弥生土器	甕	*17.6	>4.9			口縁コロナダ・外縁タタキ・内面ナダ
228	竪穴建物2	弥生土器	甕	*14.2	13.7	3.8	13.7	口縁コロナダ・外縁ハクセイ・黒斑 内面底部にコビオサエ・工具痕・底面ハーフ状土台底
229	竪穴建物2	弥生土器	甕	7.5	10.0	2.6	7.6	口縁コロナダ・外縁ハクセイ・体部(ガタ)底部ケズリ・黒斑 内面コビオサエナダ・輪縁み痕
230	竪穴建物2	弥生土器	甕底部		>4.1	*5.0		外縁タタキ・黒斑 内面底部コビオサエ・炭化木村春・底面タタキ
231	竪穴建物2	弥生土器	甕底部		>6.2	4.8		外縁タタキ・底部にコビオサエ・黒斑 内面コビオサエ・炭化物薄く付着・底面ハーフ状土台底・木葉痕?
232	竪穴建物2	弥生土器	直口壺		>2.9	4.4		外面部にコビオサエ・内面ナダ
233	竪穴建物2	弥生土器	底部		>2.2	4.0		外縁ハクセイ・黒斑・内面調整不明
234	竪穴建物2	弥生土器	底部		>3.7	4.8		外面部に摩滅・調整不明・被熱に上る作業
235	竪穴建物2	弥生土器	直口壺		>1.9	3.4		外縁コビオサエ
236	竪穴建物3	弥生土器	広口壺	*14.2	>5.7			口縁コロナダ・外縁ハクセイゼキ・内面ナダ・肩部に輪縁み痕
237	竪穴建物3	弥生土器	甕	*14.0	>12.8	3.2		口縁コロナダ・外縁底部タタキ後ナダ・下半部ナダ・非表・スズ付着 内面コビオサエ・輪縁み痕・底面に立毛作業
238	竪穴建物3	弥生土器	底部		>4.1	4.1		外面部にコビオサエ・内面底部に放射状にハラ工具痕
239	竪穴建物3	弥生土器	高杯	14.8	13.9	*15.3		杯形の外縁端面にコニニアゲ底あり・黒斑・脚部外面にガタ・円滑透かし・脚部前面・中心部に工具痕
240	竪穴建物3	弥生土器	手括形		16.5		15.2	外面部にコビオサエナダ・体部ハクメ・下半部ガタ・底部ハクセイ・黒斑 内面底部ガタ・ハクセイ・体部ナダ・底部コビオサエナダ・輪縁み痕・スズの化物
241	竪穴建物4	弥生土器	広口壺	*18.0	>5.3			外面部に摩滅・調整不明・黒斑
242	竪穴建物4	弥生土器	直口壺	16.8	>12.9			山縫コロナダ・外縁底部ケズリ後ナダ・下部部コロナダ・肩部ハクセイ 内面底部ケズリ後ナダ・ハクセイ・輪縁み痕・底面コビオサエ・輪縁み痕
243	竪穴建物4	弥生土器	直口壺	*16.8	>8.3			口縁コロナダ・外縁ハクセイゼキ・黒斑・内面頭部ハク
244	竪穴建物4	弥生土器	直口壺	*20.7	>10.3			口縁コロナダ・輪縁み痕文・外面部受け部へ頭部ハクゼキ 内面底部セキキ
245	竪穴建物4	弥生土器	直口壺	*24.8	>5.8			口縁コロナダ・外縁頭部ナダ?・内面ナダ・輪縁み痕
246	竪穴建物4	弥生土器	細縁壺		>8.7		*16.0	外縁ガタ・スズ付着・黒斑 内面上半コビオサエナダ・輪縁み痕・下平ハケメ
247	竪穴建物4	弥生土器	小型壺	6.3	7.8		8.4	口縁コロナダ・外縁底部下半コニニアゲ底・スズ化物 内面コビオサエ(反時計回りに輪縁)・輪縁み痕・内面に付着物か?
248	竪穴建物4	弥生土器	甕	*12.4	>6.8		*12.0	口縁コロナダ・外縁底部タタキ・内面ハクメ・輪縁み痕
249	竪穴建物4	弥生土器	甕	*16.2	>6.0			口縁コロナダ・外縁タタキ・内面ハクメ・輪縁み痕
250	竪穴建物4	弥生土器	甕	*18.6	>7.1		*17.2	口縁コロナダ・外縁タタキ・内面不規則
251	竪穴建物4	弥生土器	甕	*14.7	>10.8		*18.3	口縁コロナダ・外縁タタキ・スズ・内面コビオサエ
252	竪穴建物4	弥生土器	甕	*14.8	16.2	3.4	*16.8	口縁コロナダ・外縁タタキ(3分割)・施墨に上る作業・スズまたは有機物付着 内面コビオサエナダ・ハクメ・輪縁み痕・底面に化物付着・底面ハーフ状土底
253	竪穴建物4	弥生土器	甕	*18.0	>9.0			口縁コロナダ・端部・輪縁み痕・外縁タタキ・内面摩滅・不規則・輪縁み痕
254	竪穴建物4	弥生土器	甕	*16.8	>5.3			口縁コロナダ・外縁タタキ・内面頭部ハクセイ・肩部ケズリ
255	竪穴建物4	弥生土器	甕	*16.0	>5.8			口縁コロナダ・外縁タタキ・内面ケズリ・口頭内面に黒斑
256	竪穴建物4	弥生土器	甕	*16.8	>4.3			口縁コロナダ・外縁ハクセイ・黒斑・内面ナダ・スズ付着
257	竪穴建物4	弥生土器	甕	*18.0	>3.8			口縁コロナダ・端部に2条の輪縁・内面ナダ

表10 遺物観察表(1)

報告番号	出土遺構	種別	器種	法量(cm)				所見	
				口径	器高	底径			
						腹径	底径		
258	堅穴建物4	弥生土器	甕	*16.4	>5.3			口縁コナデ、端面に擬凹溝、外面タキ、スズ付着 黒斑 内面磨滅不明	
259	堅穴建物4	弥生土器	甕	*15.8	>4.5			口縁コナデ、端部つまみあげ 体部ハケメ 内面コナオサツコメ 角間石を含む 中部瓶口内系(下円律拍版) 開入品か	
260	堅穴建物4	弥生土器	甕		>10.5		*15.7	外縁タキ、スズ付着 内面磨滅 不明	
261	堅穴建物4	弥生土器	便底部		>9.7	*4.4		外縁タキ、内面タキ、底部中央にくもらる要次ハケメ 底部ハナフタ式上底	
262	堅穴建物4	弥生土器	便底部		>8.8	*4.0		外縁タキ、内面ハケメ 底部ナメ 端面に黒斑	
263	堅穴建物4	弥生土器	便底部		>6.0	4.6		外縁タキ、内面ハケメ	
264	堅穴建物4	弥生土器	便底部		>5.6	2.8		外縁タキ、輪縁ハゲ 黒斑 内面ハケメ 底部放射状に工具圧痕	
265	堅穴建物4	弥生土器	便底部		>3.0	4.6		外縁タキ 内面ナメ・コビオサニ痕	
266	堅穴建物4	弥生土器	底部		>7.2	2.8		外縁タキ後ハケ付後ハケ 條縁み痕 底部コビオサエ 黑斑 内面ハケメナメ 仄跡付着	
267	堅穴建物4	弥生土器	底部		>5.05	2.4		外縁ハケメ つまみあげ 黒斑 内面磨滅不明 底部弧形でつまみ山上げ筋状	
268	堅穴建物4	弥生土器	底部		>6.4	*2.4		外縁タキ後ハケメ 底部コビオサエ 内面ナメ 变化物	
269	堅穴建物4	弥生土器	底部		>2.3	4.7		内面端元ハケメ 調整不明 底面に木葉痕	
270	堅穴建物4	弥生土器	高杯	*14.2	>10.6		*10.6	口縁コナデ、外縁タキ後ハケ 端面からS方向 内面杯部びき 爪部付け根ねじ目 端部ハケ後ナメ	
271	堅穴建物4	弥生土器	高杯		>2.5			内面端元ハケメ 機械加工にて等に見られる	
272	堅穴建物4	弥生土器	高杯		>7.8			外縁ハケメ 村内側に工具の当り跡 黒斑 内面底部ハゼまたはびき 爪部ハジロ凹目 端部ナメ	
273	堅穴建物4	弥生土器	高杯		>11.4			外縁ナメ 内面透かし3方向 内面ハジロ目 刨跡はハケ後ナメ	
274	堅穴建物4	弥生土器	高杯		>1.8	*10.4		口縁コナデ 外縁タキ後ハケ 端面からS方向 内面杯部びき 爪部付け根ねじ目 端部ハケ後ナメ	
275	堅穴建物4	弥生土器	鉢		>6.2	2.9		外縁ナメ 條縁み痕 内面ナメ 底部に放射状に工具圧痕	
276	堅穴建物4	弥生土器	鉢		>2.9	3.8		外縁底部ビカオサエ 内面底部もくの果伏ハケメ 機械ナメ	
277	堅穴建物4	弥生土器	鉢		>6.2	*3.8		外縁削減 調整不明 底部ベビサエ 黑斑 内面磨滅 底面ハナフタ上げ底	
278	堅穴建物4	弥生土器	鉢		>3.7	*4.2		外縁ナメ 底部コビオサエ 黑斑 内面ハケメ 上げ底	
279	堅穴建物4	弥生土器	器蓋	*21.6	>10.3			口縁コナデ、端面に擬凹溝、外面タキ、輪縁形透丸、受部端元コナデ、以下ヒダ 内面ヒダ、端面ヒダ	
280	堅穴建物4	弥生土器	イイゴコ	6.4	10.4	4.2	7.8	口縁コナデ、外縁底部ビカオサエ 黑斑 内面ナメ 條縁み痕 底部に放射状にコビオサエ痕	
281	土坑1	弥生土器	甕	*10.8	>8.3			口縁コナデ、端面に擬凹溝、外縁タキ 黑斑	
282	土坑1	弥生土器	甕	14.8	30.2	5.6	21.2	内面端元ハケメ 機械加工にてビカオサエ	
283	土坑1	弥生土器	甕		>16.1		26.1	外縁タキ後ハケ付着 内面ハジロ後ナメ、コビオサエ	
284	土坑1	弥生土器	鉢	9.8	8.6	4.0		外縁ナメ 底部コビオサエ 内面ヒダ・縁縁み縁 ハケメ	
285	土坑1	弥生土器	器蓋		>11.3	20.5		外縁ナメ ハジロハケメ 内面ヒダ・縁縁み縁	
286	土坑2	弥生土器	甕	*15.4	>9.8		*17.4	口縁コナデ、外縁タキ後ナメ 内面ケジ張ハケ	
287	土坑2	弥生土器	甕	16.6	27.7	5.6	22.1	外縁ナメ 底部コビオサエ 内面下から上ヒダタリハケメ	
288	土坑2	弥生土器	甕	*14.4	18.6	3.1	15.2	外縁ナメ 下ハジロハケメ 内面ヒダ・縁縁み縁	
289	土坑2	弥生土器	甕	*13.6	15.3	3.8	*14.4	口縁コナデ、外縁タキ後ナメ 内面ヒダ・縁縁み縁	
290	土坑2	弥生土器	甕	*13.8	14.2	3.6	11.9	口縁コナデ、外縁タキ後ナメ 内面ナメ 條縁み縁	
291	土坑2	弥生土器	底部		>8.4	*4.0		外縁ナメ 底部コビオサエ 内面下から上ヒダタリハケメ	
292	土坑2	弥生土器	高杯		>9.5	15.8		外縁ハケメ ハジロハケメ 内面底部ハゼ	
293	土坑3	弥生土器	広口壺	14.8	>14.1		*28.2	口縁コナデ、輪縁 内面コビオサエハゼ 294号同一個体	
294	土坑3	弥生土器	広口壺		>12.1	4.7		口縁コナデ、端面にギザギザ 内面ヒダ・縁縁み縁	
295	土坑3	弥生土器	短頸壺	14.8	>6.5			口縁外表面にギザギザ 内面下から上ヒダタリハケメ	
296	土坑3	弥生土器	甕	*15.5	>5.6			口縁コナデ、内面底部タキ後ハケメ	
297	土坑4	弥生土器	甕		>3.9	2.8		外縁タキ 内面ナメ 黑斑	
298	土坑4	弥生土器	底部		>14.3	*11.4		底面外側面にギザギザ 内面ヒダ・縁縁み縁	
299	溝1	弥生土器	広口壺		*14.4	>9.6		口縁コナデ、外縁底部ハケメ 内面ヒダ・縁縁み縁	
300	溝1	弥生土器	広口壺	12.8	>7.9			口縁コナデ、外縁底部タキ後ナメ 内面ヒダ・縁縁み縁	

表11 遺物観察表(2)

## 第Ⅲ章 美乃利遺跡の調査成果

報告番号	出土遺構	種別	器種	法量(cm)				所見
				口径	器高	底径	腹径	
301	漢1	弥生土器	壺	*13.6	>4.7			内外底面に摩滅、調整不明、外面ヨコサエ痕
302	漢1	弥生土器	壺		>16.7	4.8	*22.1	外面調整不明、被熱による赤変・スリ付着 黒斑 内面ハラメ 梅様小痕 底部に工具痕
303	漢1	弥生土器	壺	14.8	>22.3		*26.9	外面体認下平口がり、内面調整不明
304	漢1	弥生土器	壺	13.6	>6.4			内外面上に摩滅、調整不明 頂部外側にヨコサエ痕 内面に梅様小痕
305	漢1	弥生土器	壺	*12.6	>8.7			口縁ヨコナメ 壁部に擦痕 褐斑 外面ハケメ 内面ヨコサエ・ナメ
306	漢1	弥生土器	壺	*10.8	>10.3		*12.6	外面ハケ後ハラメ 内面ヨコオサエ・ナメ 梅様小痕
307	漢1	弥生土器	壺	*15.0	>6.0			口縁ヨコナメ 外面調整不良、内面ヨコサエ・ナメ 梅様小痕
308	漢1	弥生土器	甕	*17.2	>11.8		*21.3	口縁ヨコナメ 外面タキ落後ハラメ スリ付着 黒斑 内面ハラメ 下部に褐色物付着
309	漢1	弥生土器	甕	*15.6	>11.1		*19.6	口縁ヨコナメ 外面タキ落後ハラメ 梅様小痕 下に薄くスリ付着 内面ナメ
310	漢1	弥生土器	甕	*16.4	>8.5			口縁ヨコナメ 外面タキ落後ハラメ スリ付着 内面ハケメ
311	漢1	弥生土器	甕	*17.0	>22.7		*19.7	口縁ヨコナメ 外面タキ落後ハラメ 赤変・スリ付着 内面ヨコオサエ・ナメ 体認・ハケメ
312	漢1	弥生土器	甕	*15.8	>16.1		*18.4	口縁ヨコナメ 外面タキ落後ハラメ 地成後穿 内面ハケメ
313	漢1	弥生土器	甕	*15.0	19.4	4.0	*15.6	口縁ヨコナメ 外面タキ落後ヨコオサエ痕、赤変痕著、スリ付着 内面ハラメ 梅様小痕 底部に先にちじの葉状ハラメ ハラメ、木葉痕
314	漢1	弥生土器	甕	*13.0	15.0	3.2	*12.2	口縁ヨコナメ 外面体認タキ落後ハラメ 黒斑 内面ナメ 梅様小痕 底面タクメ
315	漢1	弥生土器	甕		>17.4	4.0	*18.0	外面タキ落後ヨコオサエ痕、赤変著者、スリ付着 黑斑 内面底面にヨコサエ痕、下に黒斑、木葉痕?
316	漢1	弥生土器	高杯	*25.2	>6.6			外面ハケメ 受け部に多くの工具剥離痕、黒斑 内面調整不明
317	漢1	弥生土器	高杯	*21.6	>6.6			外面ハケ後ハラメ 内面ハラメ 梅様小痕
318	漢1	弥生土器	高杯	*22.6	>5.5			口縁ヨコナメ 摩擦面 外面ハラメ 内面ゼゼ
319	漢1	弥生土器	高杯		>9.0			外面タキ落後ハラメヨコオサエ痕、円滑透かし、ヘソ状粘土充填割離 内面底面ハダマまたはガキ 脚柱部仕上げ目 ナメ
320	漢1	弥生土器	鉢	21.2	10.2	4.4	18.0	口縁ヨコナメ 外面タキ落後ハラメナメ 内面底面にヨコサエ痕 内面ハラメ 赤斑中央にくぼみの葉状ハラメ ドーナツ状ドロボウ、木葉痕
321	漢1	弥生土器	鉢	*21.2	>7.5		*19.8	口縁ヨコナメ 外面タキ落後ハラメ 被熱による赤変、スリ付着 内面ハラメ
322	漢1	弥生土器	鉢	*19.0	9.4	4.2	*15.5	口縁ヨコナメ 外面ハケメでなく 外面底部にヨコオサエ痕 黑斑 内面ハケ後ハラメ 赤斑ナメ ドーナツ状ドロボウ
323	漢1	弥生土器	鉢	*10.9	6.6	3.4		内外面上に摩滅、調整不良、外表面底面にヨコオサエ痕 底面ハーネル仕上部
324	漢1	弥生土器	脚台	>5.5	9.0			外面タキ落後ハラメ 工具剥離痕、黒斑 内面ナメ 脚部ハケメ
325	漢1	弥生土器	有孔鉢	>3.8	4.0			外面タキ落後ヨコオサエ痕、黒斑 内面ハラメ 赤斑中央にくぼみの葉状ハラメ
326	漢1	弥生土器	腰底部		>6.5	4.4		外面タキ落後ハラメナメ、スリ付着 黑斑
327	漢1	弥生土器	腰底部		>8.0	3.2		外面タキ落後ハラメナメ、スリ付着 黑斑 内面ハラメ 中央どう状に褐色物付着
328	漢1	弥生土器	腰底部		>4.5	4.8		外面タキ落後ハラメナメ 黑斑 内面ケリヨハラメ 黑斑ゼゼ
329	漢1	弥生土器	腰底部		>11.0	4.8		外面タキ落後ハラメナメ スリ付着 黑斑 内面ハケ後ハラメ ドーナツ状ドロボウ、木葉痕
330	漢2	弥生土器	甕	*15.4	>13.1		*21.0	口縁ヨコナメ 外面タキ落後ハラメ 黒斑 内面ケリヨ付着に梅様小痕
331	漢2	土師器	甕	*20.2	>11.9		*22.2	胴体部外面タキ落後ハラメ、口縁外側ヨコサエ 内面ヨコハケ
332	漢2	須恵器	甕		>2.7			天井部削除・カケリ、口縁記入内面ハラメナメで仕上げる
333	漢2	須恵器	杯	*14.0	2.8	*19.3		底部をハラメ仕上げ、全体に削除ナメ
334	漢2	須恵器	甕		>7.2	7.4		底部はハラメによつて切離、軽部上部は丁寧な削除ナメ
335	漢2	土師器	皿	*17.2	3.1			口縁部12時位にヨコサエし、底部内面はヨコサエ、外面は不明
336	漢3	須恵器	甕	8.2	12.9		16.9	口縁部背面を削除ナメ、軽部下手をカキ目、底部は不定方向のヘラケメ
337	漢4	弥生土器	甕	*12.6	>6.3			口縁ヨコナメ 外面タキ落後ハラメ 内面ヨコオサエ・ナメ 梅様小痕、以下ハケメ
338	漢4	弥生土器	甕	*16.1	>10.8			口縁ヨコナメ 外面タキ落後ハラメ 内面ヨコオサエ・ナメ 梅様小痕、以下ハケメ
339	漢4	弥生土器	底部		>5.4	6.2		内外面磨滅、調査不明
340	漢4	弥生土器	底部		>3.6	7.0		外面タキ落後ヨコサエ・ナメ
341	漢4	弥生土器	鉢	*21.3	>6.5			口縁肥厚してヨコナメ、内面ハラメ
342	漢4	弥生土器	甕	*12.6	>9.6		*12.0	口縁と胴体部の境間にヨコサエ、体部外側はタテハラメを行なう 口縁部は内外面上もヨコナメ
343	漢4	須恵器	杯	1.5	4.1	12.3		口縁部はナメ、底部はハラメで切離し、ナメで調査する

表12 遺物観察表(3)

報告番号	出土遺構	種別	器種	法量(cm)				所見
				口径	器高	底径	腹径	
				*	*	*	*	
344	溝4	須恵器	杯	*13.3	2.8	*10.2		全体にナゲ、へラ切りによって復元底部をつくる
345	溝4	須恵器	杯	*13.5	2.9	10.0		底部はへラ切りによって切り離され残る 外面に火ダメキ
346	溝4	須恵器	蓋	16.7	1.7			天井部内側へタケヅイ、口縁部の内面を凹輪ナゲで仕上げる 底面に×の彫刻
347	溝4	須恵器	碗		>2.5	5.8		底部はへラ切りによって切り離され残る 高台底面はへタケヅイを行う
348	溝4	須恵器	杯	*13.1	3.4	7.9		底部はへラ切りによって切り離され残る 高台底面はへタケヅイを行う
349	溝4	土師器	杯	*12.6	3.4	*6.4		口縁部をへタケヅイで外面に凹輪をつける。底部はコビオサニ、口縁部はコヨナゲ
350	溝4	土師器	杯	*13.6	3.1	*6.2		口縁部を2段にコヨナゲ、底部外周はコビオサニ、内部を不規則方向のナゲ
351	溝4	土師器	皿	*13.2	2.1	*9.5		口縁部はコヨナゲ、底部下部はコヨナゲ、体底部下面はコヨナゲ、体底部内面はナゲ
352	溝4	土師器	甕	*23.0	6.1			口縁部ナゲ、体部外側タキキ、内面は板ナゲ
353	溝4	土製品	土煙	長>3.1	幅 0.7	厚 0.3		全体にナゲ調整
354	溝4	須恵器	蓋		>11.8	*12.2	*20.6	側面から底部下部はナゲで以下は削る 底部は凹輪ナゲし底部内面はナゲ
355	溝4	須恵器	片口鉢	*27.8	>10.5			全体にナゲ調整を行うに凹輪ナゲ
356	溝4	土製品	カマド		>12.8			底部はコビオサニの施す。全体にナゲ、へタケ調整
357	溝4	土製品	カマド		>14.3			底部はコビオサニの施す。全体にナゲ、へタケ調整
358	溝4	瓦	平瓦	長>13.8	幅>12.8	厚 1.9		内面は複数方向に格子状のあわせ模様方向のケツリをしてナゲ調整。前面は布目压痕と糸切痕を残す。瓦端部はへタケヅイ
359	土坑5	瓦	平瓦	長 42.7	幅>23.2	厚 2.2 ~2.7		内面は複数方向に格子状のあわせ模様方向のケツリをしてナゲ調整。前面は布目压痕と糸切痕を残す。瓦端部はへタケヅイ
360	土坑5	瓦	平瓦	長>21.9	幅>17.5	厚 3.0		内面は複数方向に格子状のあわせ模様方向のケツリをしてナゲ調整。前面は布目压痕と糸切痕を残す。瓦端部はへタケヅイ 保、裏面付岩物
361	溝5	須恵器	杯蓋		>1.2			全体を凹輪ナゲで仕上げる
362	溝5	須恵器	杯蓋	*15.8	>2.3			天井部は凹輪へタケヅイ後凹輪ナゲで仕上げる。内面は凹輪ナゲで仕上げる
363	溝5	土師器	椀	*10.9	3.5	5.5		体部の内側は、底部はコビオサニで復元 調整不明
364	溝5	土師器	甕	*22.6	>5.6			内面は凹輪ナゲで仕上げる。底部外側はタキキ、内面はヨコハケで調整
365	溝5	瓦	平瓦	長>12.1	幅>12.2	厚 1.7		内面は溝印押し、前面は布目压痕、端面はへタケヅイで調整
366	溝6	黒色土器	碗		>2.4	7.6		外側ヨコナゲ、内面へラギザカガ、摩擦する
367	溝6	須恵器	碗		>3.4	8.5		底部を凹輪へタケヅイ後調整ナゲ。体部外側、内面を凹輪ナゲで丁寧に仕上げる
368	溝6	須恵器	碗		>4.0	9.0		内面はへタケ離す。底面は高台で、底面付岩物
369	溝6	須恵器	碗		>4.1	6.4		内面はへタケ離す。体部外側はタキキ、内面はヨコハケで調整
370	溝6	須恵器	蓋		>7.9	*12.4		体部外側はヨコハケで仕上げる。底部はコビオサニしてナゲ、体部内面は青荷文の当て具、底部内面はヨコハケ
371	溝6	土師器	鍋	*22.6	>7.8			口縁部の調整はヨコナゲ、体部の外側は横割りのへタケヅイ
372	溝6	土師器	鉢	*30.0	>8.3			口縁部の外側はヨコナゲ。底部下部外側はヨコハケ、内面はナゲ
373	溝6	土師器	皿	*10.0	2.2	*6.2		手縁部はヨコナゲ、体部下部はヨコハケ
374	井戸1	須恵器	杯蓋	*14.4	>2.7			天井部はへタケヅイ後ナゲ、口縁部から内面は凹輪ナゲで仕上げる
375	井戸1	須恵器	碗	*16.2	>5.1			全体に凹輪ナゲで仕上げ、津つくりである
376	井戸1	須恵器	碗		>2.8	*5.4		全体の外側はヨコハケ、底部内面はヨコハケで凹輪ナゲ
377	井戸1	須恵器	鉢	*28.8	>10.9			口縁部外側、体部外側はヨコハケ、体部内面はナゲで仕上げる
378	井戸1	土師器	皿	8.8	1.5	5.4		底面の引摺は口縁部の切欠き、口縁部は内面をヨコハケで調整
379	土坑6	須恵器	甕	*18.6	>7.2			外面平行凹印、内面はナゲ仕上げで調整する
380	土坑6	須恵器	椀		>16.4			外表面ヒロ凹輪ナゲで調整
381	土坑6	須恵器	甕	*24.8	>30.6		*39.2	口縁部上部にわざりにつけみかげ
382	土坑6	土師器	羽釜	*32.4	>23.9		*35.8	口縁部内側はヨコナゲ、体部内外面はハケ調整。脚下部はコビオサニ
383	溝7	須恵器	蓋		>1.8			全体にナゲ調整
384	溝7	須恵器	杯		>2.2	*9.5		全体を凹輪ナゲで調整
385	溝7	須恵器	碗	13.1	>3.1			凹輪ナゲで全体に仕上げる
386	溝7	須恵器	碗	12.6	4.9	5.0		凹輪ナゲで全体に仕上げる。板高台底部は板柱のもので調整
387	溝7	須恵器	皿	*9.6	1.6	*6.5		底部のへタケ離す。板高台底部は板柱のもので調整
388	溝7	須恵器	碗		>4.35	6.8		凹輪ナゲで全体に仕上げる。板高台底部は板柱のもので調整
389	溝7	須恵器	碗		>3.8	5.0		凹輪ナゲで全体に仕上げる。体部は内外面凹輪ナゲで調整
390	溝7	須恵器	捏鉢		>8.7	10.2		凹輪ナゲのあとコビオサニ。底部はへタケ
391	溝7	須恵器	捏鉢	*23.0	>6.3			全体に凹輪ナゲで調整
392	溝7	須恵器	捏鉢		>7.4	*8.4		体部は凹輪ナゲのちコビオサニ。内面はコビオサニで調整

表13 遺物観察表(4)

第Ⅲ章 美乃利遺跡の調査成果

報告番号	出土遺構	種別	器種	法量(cm)				所見	
				口径	器高	底径			
						腹径	底径		
393	溝7	青磁	椀		>2.4			口縁端下を強くナ渲で外反させる。体部外面に付着物	
394	溝7	土師器	羽釜	*32.6	>6.6			内表面浅コヨナゲ調査	
395	溝7	土師器	椀	10.6	3.55	3.6		全体に均勧ナゲ調査	
396	溝7	土師器	皿	*7.6	1.2	*6.0		粘土縁端下と外表面はヨコナゲ、内面ナゲ、底部ヨコナゲで調査	
397	溝7	陶器	甕	*21.7	>4.4			口縁は均勧ナゲ、体部は外反9.9%、内面はハケで調査	
398	溝7	土師器	羽釜	*29.4	>6.7			口縁外側ヨコナゲ、内面ハケ調査	
399	溝7	土師器	羽釜	19.9	>7.0			背後付近部はヨコナゲで調査	
400	溝7	瓦質土器	羽釜	*18.6	>8.8			口縁部はヨコナゲで調査、体部は粘土接合痕があり、調査不明	
401	溝7	土師器	羽釜	*27.6	>4.6			口縁外側ヨコナゲ、内面ハケ調査、鋸下端はヨコナゲで仕上げる	
402	溝7	土師器	羽釜	*18.0	>3.8			鋸接合部内面はヨコナゲで、全体に摩滅のため調査不明	
403	溝7	瓦質土器	羽釜	*22.4	>6.8			口縁部はヨコナゲで調査、体部ハケ調査不明	
404	溝7	瓦質土器	羽釜	*27.6	>3.8			全体に摩滅して調査不明	
405	溝7	瓦質土器	脚付鉢	17.7	>8.3			口縁部はヨコナゲ、体部外側はタキ、内面はヨコナゲで調査	
406	溝7	土師器	羽釜	*32.8	>10.5			口縁部はヨコナゲ、体部外側は明き、内面はヨコナゲで仕上げる	
407	溝7	土師器	脚付鉢	11.85	幅3.1	厚3.1		ヨビオサユチのヨコナゲ調査で成形	
408	溝7	土師器	脚付鉢	13.8	幅2.8	厚2.5		ヨビオサユチのヨコナゲ調査で成形	
409	溝8	須恵器	鉢	*22.6	>6.8			口縁部はヨコナゲで、体部内面は調査不明	
410	溝8	須恵器	捏鉢	*27.8	>5.1			口縁部背面ヨコナゲ、体部外側ヨコナゲで調査する	
411	溝8	須恵器	椀		>3.3	*7.4		切り離しは均勧未切、体部は内外面均勧ナゲで調査	
412	溝8	土師器	甕	*27.2	>4.8			口縁部は外表面にヨコナゲ、体部外側はタハケを行う	
413	溝8	土師器	皿	*12.3	2.3			口縁部は外表面一體にヨコナゲ、体底はヨコナゲで成形	
414	溝8	土師器	皿	*8.0	1.5			ヨコナゲで仕上げる底部外側はヨコナゲで整える	
415	溝8	土師器	脚付鉢	長15.5	幅5.3	厚3.0		ヨビオサユチで成形	
416	その他	弥生土器	甕	*14.0	>11.9		*20.0	口縁ヨコナゲ 外面調査不明 ハケ状工具による刷毛文 内面部分ヨコナゲで調査	
417	その他	弥生土器	蓋	20.8	>4.5			舟底ヨコナゲ 雜文状の縫刻 内面底面にはヨビオサユ	
418	その他	弥生土器	蓋		>21.1	4.2	20.4	外盖タキ後2.6cm 底部にヨビオサユ 文 体部下に大穴付蓋 黒斑 内面付部にヨビオサユ ハケメ 輪縫み痕 底部に放射状に工具痕 下半部に灰化物付着 中央に穴開き 孔	
419	その他	弥生土器	蓋	16.7	26.1	5.2	24.8	口縁ヨコナゲ 塗装に輪縫痕 外縁ノク後2.6cm 体部下タキ後2.6cm 黑斑 内面底面部分ヨビオサユ ハケメ 輪縫み痕 体部下2.6cm附近穿孔	
420	その他	弥生土器	蓋	13.9	>8.8			口縁ヨコナゲ、ハケ細孔付行・大穴円 文 頭部はノク後2.6cm 内面ヨコナゲに大穴円文 瓶部ヨコナゲ 脚部ヨビオサユ痕 輪縫み痕	
421	その他	弥生土器	蓋	*12.4	18.5	4.8	20.5	口縁ヨコナゲ 内底部タキ、ヨコナゲ 帯文 斜面に斜方付工具痕 底面に木葉痕 内面付部ヨビオサユ ハケメ 底部に斜方付工具痕 底面に木葉痕	
422	その他	弥生土器	甕	*14.5	29.0	4.6	*20.0	口縁ヨコナゲ、端部に輪縫痕がある。外蓋タキ後ハケメ 中央に穴対着 黑斑 内面底部ヨビオサユ ナチュラル底面に灰化物付着	
423	その他	弥生土器	甕	15.7	19.8	4.6	17.2	口縁ヨコナゲ 内底部タキ後ハケメ 瓶部ヨビオサユ 下半にスヌ付蓋 内面瓶部ヨビオサユ ハケメ 輪縫み痕 底部に放射状に工具痕 底面に木葉痕	
424	その他	弥生土器	甕	14.5	21.2	3.8	18.1	口縁ヨコナゲ 内底部タキ後ハケメ 瓶部ヨビオサユ 帯文、斜面付工具痕 内面瓶部ヨビオサユ ハケメ ヨコナゲ 輪縫み痕	
425	その他	土師器	皿	*7.6	1.3			口縁部はヨコナゲで仕上げる底部外側はヨビオサユで整える	
426	その他	土師器	皿	*8.2	1.0			口縁部はヨコナゲで仕上げる底部外側はヨビオサユで整える	
427	その他	土製品	土鍤	長>4.6	幅1.4	厚1.3		穿孔部分は歯取りを行う	

表14 遺物観察表(5)

## 第IV章　まとめ

### 第1節　土地利用の変遷

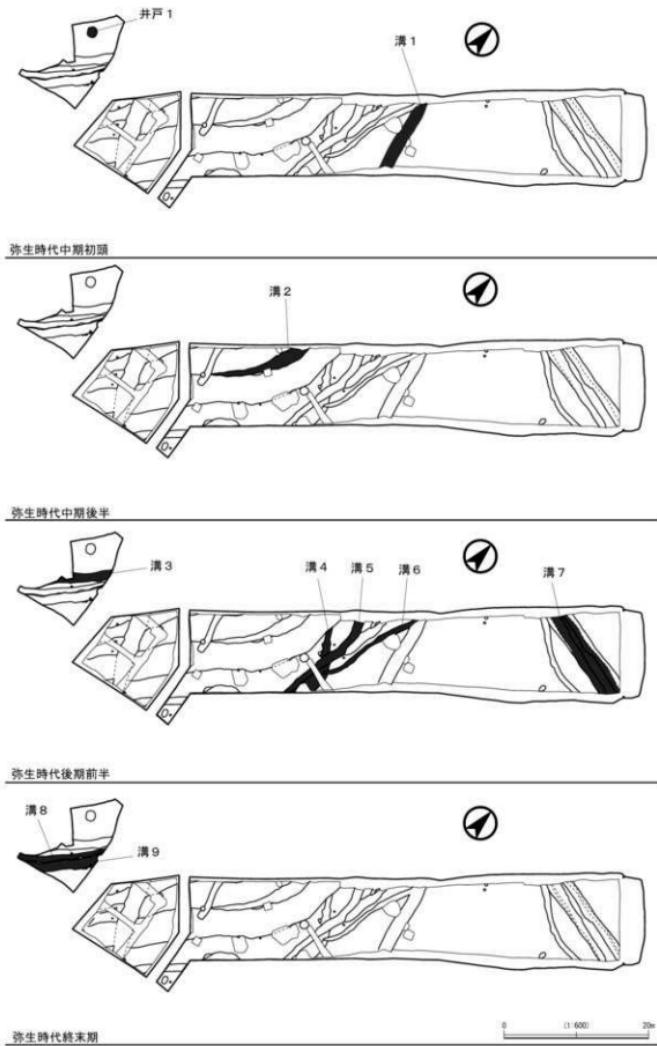
#### 1. 溝之口遺跡

今回の溝之口遺跡の発掘調査では、合計 870 m<sup>2</sup>を調査した結果、合計 48 基の遺構を検出した。各遺構から出土した遺物から主要な遺構の帰属時期を考えると、弥生時代から平安時代にかけて 6 段階の時期に大別することができる（第 75・76 図）。本稿では、上記の時期別に遺構の内容を概括し、今回調査地における土地利用の変遷について考えてみたい。

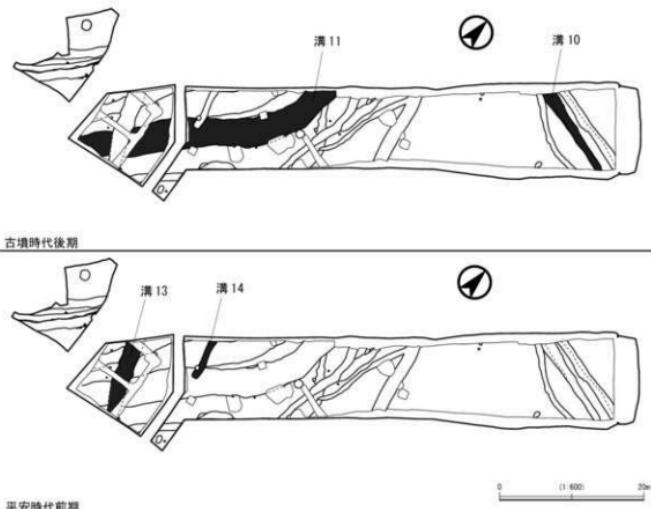
**弥生時代中期初頭** 今回調査で確認された遺構のうち最も古い時期は弥生時代中期初頭（II 様式期前半）である。井戸 1、溝 1 が該当する。溝 1 では、流水文の施された壺などが一括廃棄されていた。溝の底部には意図的に置かれたと思われる拳大の礫が多数確認された。このように人為的な活動の痕跡が認められる一方、今回調査地の南側で過去に行われた大規模調査の成果を含めても、この時期の竪穴建物跡などはこれまで検出されておらず、第 6 図 B 地点において、流水文の施された鉢が出土した土坑が 1 基、 J 地点で被熱面をもつ特殊な土坑が 2 基検出された程度で、集落の様子は判然としない。集落の中心は、これらの検出地点の中間にあたる今回調査地の南西側に展開している可能性が考えられる。

**弥生時代中期後半** 今回の調査では、弥生時代中期前半～中頃（II 様式期後半～III 様式期）については遺物が数点出土しているものの遺構は確認されず、後続する中期後半（IV 様式期）の遺構が 1 基確認されている。溝 2 とした遺構で、古墳時代に埋没した自然流路（溝 11）に大部分を切られているものの、残された部分の構内から完形の土器が多数出土した。胴部下半に穿孔が穿たれた壺なども含まれており、周溝墓に供献された土器群の可能性が高いが、他遺構に切られているうえ、調査区の境付近で検出されたため主体部等を確認できず、遺構の全体形もわからない。周溝墓の一部とすれば、南側を陸橋状に掘り残した方形周溝墓と推測され、周溝の規模は一辺約 18 m 四方と大型になる（第 77 図）。出土した土器群はいずれも埋土の中層付近から出土しており、西側の壁面に密着しているものも多いため、溝が埋没する過程で埴丘側から転落した可能性も考えられる。平面の配置をみると、土器は等間隔に並んでいるわけではなく、4 つのグループに分かれてそれぞれ密集しているように見える（第 78 図 a～d）。しかし、第 II 章第 4 節で記述されているとおり、遺物の年代観からは同じような時間幅を持つ構成とされており、これらのグループは時間差を表すのではなく祭祀の内容の違いからくる結果かもしれない。グループ毎の器種構成の違いや穿孔の有無など今後検討していきたい。

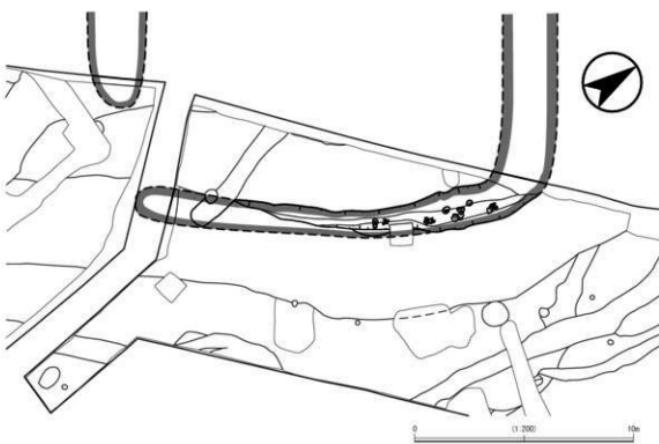
この時期の遺構は上記溝 2 のみであり、他の遺跡で見られるような周溝墓の連続した展開状況は確認できなかった。ただし、今回調査地南側で行われた調査では C・G・I・J・M 地点において方形や円形の周溝墓が多数検出されており、そのうちの大部分は今回検出された溝 2 の時期と整合するところから、今回検出の溝 2 が墓域の北端付近にあたる可能性が考えられる。また、南西側に位置する A・B 地点では、この時期の竪穴建物跡が検出されており、南西に位置する居住域とその北側に展開する墓域との位置関係がより明確になったといえるかもしれない。この時期が、溝之口遺跡のなかで最も集落の様相を明確にすることのできる時期であり、今後も詳細な検討に取り組んでいきたい。



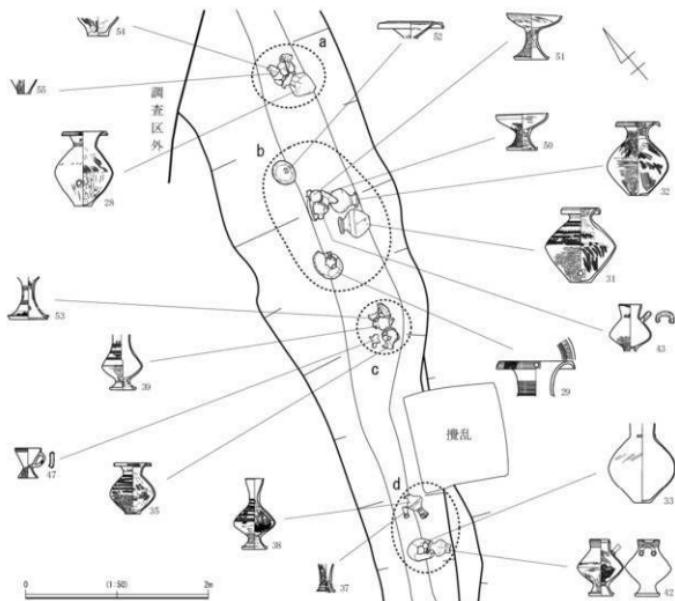
第75図 溝之口遺跡の時期別遺構変遷(1)



第76図　溝之口遺跡の時期別遺構変遷(2)



第77図　方形周溝墓復元案(溝2)



第78図 溝2出土の供献土器群

**弥生時代後期前半** 弥生時代後期の遺構として、5条の溝が検出されている。溝3～7が該当し、おおむね後期前半（V様式期前半）の遺構と考えられる。前段階から周期的に大きな断絶はないものと考えられるが、遺構の様相は大きく異なる。すなわち、前段階でみられたような墓域としての土地利用が認められないだけでなく、検出された溝のうち、溝4～6は蛇行し幅が場所によって大きく異なるなど、人為的な掘削というよりは自然流路に近い様相を示している。それぞれの溝は一定量の遺物を伴うことから、近隣で人間活動が行われたことは確かなもの、活発な土地利用とは言い難い。このことは、南側で行われた過去の調査についても同様で、広範囲に展開した周溝墓群や居住域に関連する遺構が、この時期になるとほとんど検出されなくなる。わずかに、B地点やD地点においてV様式期の堅穴建物跡が各1棟確認されているに過ぎない。今回調査の溝のあり方なども考慮すると、気候や環境の変化などによって集落の展開状況が大きく変化した時期といえるかもしれない。集落の中心は、中期初頭段階と同様に、今回調査地の南西付近に移動した可能性が考えられる。

**弥生時代終末期** 今回の調査では、弥生時代後期後半（V様式期後半）の遺構は確認されず、後続する終末期（庄内式並行期）の遺構が2基確認されている。溝8・9が該当し、調査区西端で隣りあつて並行する構造遺構である。後期の溝である溝3も含めてほぼ同様の軸線を持ち、いずれも直線的に掘削されていることから、集落内の何らかの区画を示している可能性が考えられる。今回調査では、

遺物包含層を含めて、この時期の遺物が出土したのは上記遺構の周辺のみであり、過去の周辺での調査においても明確な遺構はほとんど確認されていない。わずかにB地点やO地点で溝が確認されている程度であることから、後期前半の記述で触れたのと同様に今回調査地南西側など、いまだ詳細な調査の及んでいない場所に集落の中心が所在する可能性がある。

**古墳時代後期** 古墳時代の遺構は、後期の遺構として溝10・11が検出されている。特に溝11は、今回調査で検出した遺構の中で最も規模が大きい溝である。第II章で報告したとおり、自然流路によって形成された溝と考えられ、出土遺物の検討から6世紀後半頃に埋没したと考えられる。自然流路ではあるが、埋土に一定量の遺物を含むことから付近に居住域が形成されていたことが考えられ、弥生時代中期の方形周溝墓群が広がっていた各調査地点において、広範囲に点在するこの時期の住居跡が調査されていることを考慮すると、居住域が今回調査区南側付近まで及んでいた可能性が考えられる。

また、溝11の下層から出土した縄文土器（第32図138）は、縄文時代晩期の縄原式もしくは滋賀里IV式土器と考えられ、溝之口遺跡で初めての縄文土器発見例である。周辺の遺跡では、坂元遺跡において縄文晩期の埋甕土坑が複数検出されており関連が注目される。

**平安時代前期** 再び時期的に大きな隔たりを経て、平安時代の遺構として溝13・14が検出されている。溝13は比較的大きな溝で、第II章第4節における遺物の分析から9世紀前半頃に掘削され、10世紀中頃に埋没したと考えられる。両遺構とも遺物が多く出土し、溝13からは「福器」と墨書きされた須恵器なども出土している。「福器」と記された須恵器は過去のL地点における調査においても出土例があり、今回出土のものと同時期と考えられることから関連性が注目される。

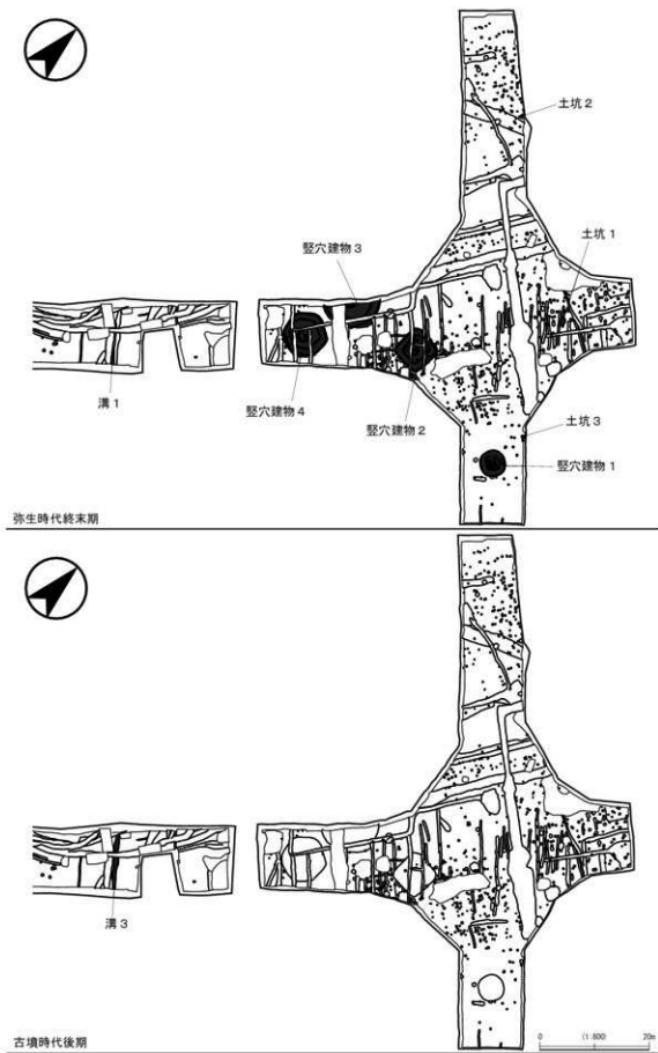
今回調査では、掘立柱建物を想定できるような柱穴などは検出されていないが、豊富な遺物の出土から、今後近隣の調査において建物跡などが発見される可能性も考えられ、また、墨書き須恵器に加え、溝13・14とともに少量ながら瓦の出土が認められることから、いまだ詳細のつかめていない「溝之口廢寺」との関連も考えていく必要があるだろう。

## 2. 美乃利遺跡

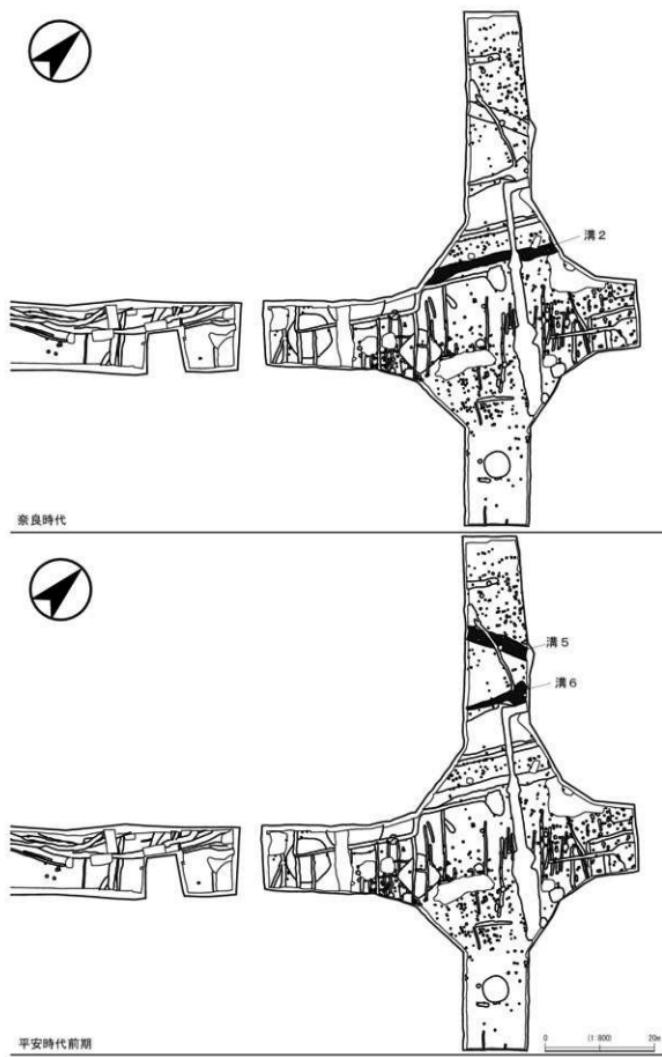
溝之口遺跡の調査に引き続いだ行われた美乃利遺跡の調査では、合計2,820m<sup>2</sup>を調査した結果、合計780基の遺構を検出した。各遺構から出土した遺物から主要な遺構の帰属時期を考えると、弥生時代から中世にかけて6段階の時期に大別することができる（第79～81図）。本稿では、上記の時期別に遺構の内容を概括し、今回調査地における土地利用の変遷について考えてみたい。

**弥生時代終末期** 今回調査で確認された主な遺構のうち最も古い時期は弥生時代終末期（庄内式並行期）である。堅穴建物1～4、土坑1～3、溝1が該当する。平面的な配置をみると、調査区の南側に溝1が所在し、中央部から東側にかけて4棟の堅穴建物が立地し、その北側に土坑が点在している。

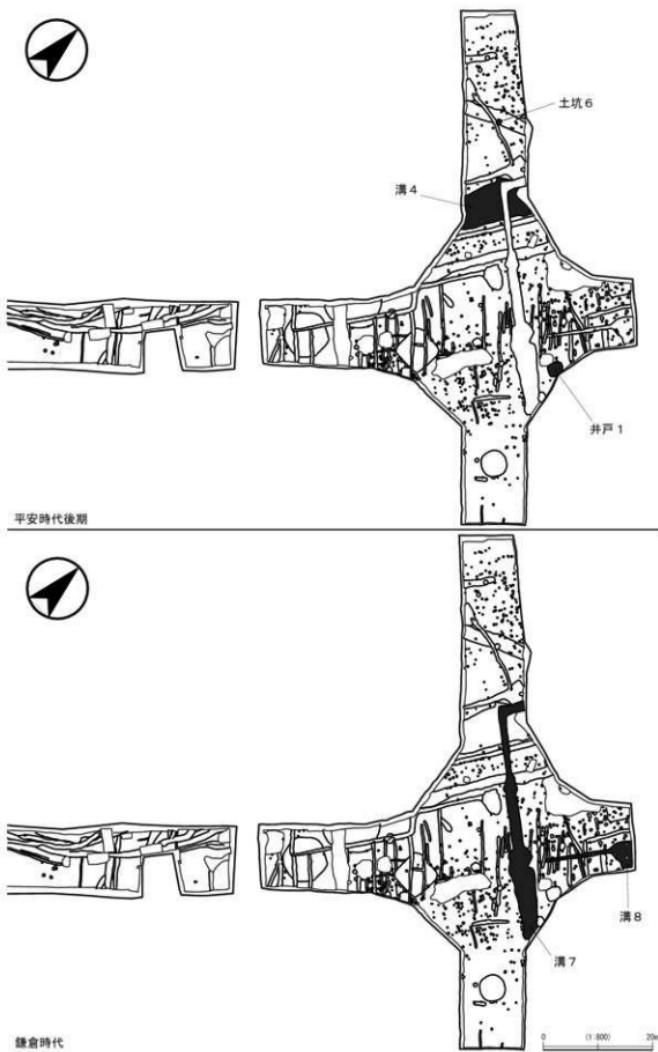
堅穴建物は、わずか4棟ながら円形、方形、多角形と多様な形状をしており、堅穴部分の面積も18m<sup>2</sup>から80m<sup>2</sup>を超えるものまで大きな差異がみられる（表15）。一方、すべての建物に屋内高床部が伴うという共通点もある。また、円形の堅穴建物1と隅丸方形の堅穴建物2は、中央土坑として「1〇型中央土坑」を採用しており、管見の限りでは加古川下流域において終末期段階まで1〇型中央土坑が残る初めての事例といえる。



第79図 美乃利遺跡の時期別遺構変遷(1)



第80図 美乃利遺跡の時期別遺構変遷(2)



第81図 美乃利遺跡の時期別遺構変遷(3)

堅穴建物3と4は、中央部の炉の構造等から工房跡と推測される建物である。特に、堅穴建物4は遺存状態も良好で、本章第2節で検討されているとおり、鉄器加工のための工房の可能性がある。中央の炉は円形に巡らせた直径2.5mほどの土堤に囲まれており、その内部に炭を多量に含んだ層が堆積していた。炭層の上面の一部には直径0.45mほどの被熱面が残されており、この部分のみ炭層ではなく黄橙色に焼けた粘土層であり、この場所で何らかの燃焼行為が行われたものと考えられる。土堤より内側に敷かれた炭層の下部は地山となる砂礫層であるが、粘土層の被熱部分は掘り込みがあり、粘土層の下に暗灰色砂質土層、最下層に被熱面周辺と同様の炭層が堆積していた。燃焼部におけるこの構造は、鍛冶炉におけるカーボン・ベッドを備えた炉と類似している。燃焼部が土堤内の東寄りに造られているに対し、建物内西側の高床部上の壁際には、加熱後の加工に用いたと考えられる石器や砥石（第63図S10）が並んで出土している。台石の一端と考えられる石器（第64図S16）には、断面V字状の鋭利な研磨痕が2条残されている。炉の周辺からは完形で直立した状態の土器が数点出土しており、小型の壺内には白色の付着物が認められ、工房内の作業に使われた可能性がある。その他の破片資料には、讚岐からの搬入甕、阿波の影響を受けたと考えられる壺、北近畿の影響を受けたと考えられる甕や器台、製塙土器などが出土しており、この建物の特殊性を示唆している。しかし、炉の構造や加工に用いたと考えられる道具類から鉄器加工の工房を類推させるものの、それを裏付けるための鉄器や鉄素材などは見つかっていない。わずかに、土堤内の堆積土を水洗選別した際に、鍛造剝片に類似する微小な鉄片を少量採集したのみである。堅穴建物3も同様の炉を備えており、炉内土壤の水洗選別により微小な鉄片を採集している。いざれも科学的な分析等は実施していないため、これらの建物の正確な機能解明については今後の課題としたい。

堅穴建物が集中するエリアの北側に点在する土坑の中には、祭祀に関連すると考えられるものがある。土坑1は、長軸1.56mの平面卵形をした土坑で、埋土中から完形の小型鉢や甕などがまとまって出土した。また、完形ではないものの他に類例のない特殊な装飾器台（第64図285）なども含まれており、それらの遺物が中層から上層に集中していることから、埋没過程において何らかの祭祀が行われた可能性が考えられる。土坑2においても、完形の甕を複数埋納する祭祀行為が認められ、今回調査区北側は、堅穴建物が集中するエリアとは別の空間として土地利用されていたものと考えられる。

調査区南側のエリアは、多数の溝が確認されており、地山面が低くなり低湿地帯の様相を呈している。大部分の溝からは遺物の出土が認められず詳細は不明だが、溝1からは弥生時代終末期に帰属する多量の土器が出土した。別の溝に大きく切られているため全体形は不明だが、残された遺構範囲を埋め尽くすほどの多量の土器が出土した。完形に復元されたものではなく、中小の破片が散乱している状況から、埋没時に廻棄場所として利用されたものと考えられる。この溝周辺が居住域の南限付近といえるかもしれない。また、付近の溝からは石包丁（第74図S18）なども出土しており、居住域南側の低湿地を利用して稲作を行っていた可能性が考えられ、多数検出された遺物を伴わない溝は、稲作のための水路として利用された可能性がある。

また、今回調査地の北側200mほどの場所で実施された第36図A地点の調査では、弥生時代後期後半の遺構として2棟の堅穴建物が報告されている。出土した遺物の分析では、「庄内式（並行）期もしくはその直前」の時期とされており、今回「終末期」として扱っている遺物とほぼ同時期といえる。検出された建物が備える諸要素は表16のとおりであり、屋内高床部の有無や1〇型中央土坑の有無などに今回検出の建物と相違点が認められるが、他地域からの影響を受けたと考えられる土器が一定量出土するなどの類似点もある。今回調査の土坑1や土坑2といった祭祀に関連する土坑が展開する空間の北側に、A地点まで続く建物群が存在する可能性もあり、今後の調査の進展に期待したい。

遺構名	時期	平面形	規模 (m)	炉の特徴	屋内高床部	周壁溝	貼床
竪穴建物 1	弥生時代終末期 (庄内式並行期)	円形	18	1〇型中央土坑	全周	有	無
竪穴建物 2	弥生時代終末期 (庄内式並行期)	隅丸方形	41	1〇型中央土坑	全周	有	一部有
竪穴建物 3	弥生時代終末期 (庄内式並行期)	円形 (多角形)	88 (推定)	カーボン・ベッド	全周	有	一部有
竪穴建物 4	弥生時代終末期 (庄内式並行期)	六角形	48	カーボン・ベッド	全周	有	無

表15 竪穴建物一覧表

遺構名	時期	平面形	規模 (m)	炉の特徴	屋内高床部	周壁溝	貼床
S H15	弥生時代後期後半 (庄内期含む)	円形	39	2段の土坑	無	有	不詳
S H16	弥生時代後期後半 (庄内期含む)	隅丸方形	30 (推定)	土坑と焼土面	全周 (推定)	有	不詳

表16 A地点検出の竪穴建物一覧表

**古墳時代後期** 古墳時代後期の遺構として溝3がある。弥生時代終末期の溝1を切っており、埋土から完形の須恵器短頸壺(第67図336)が出土している。溝3以外に明確に古墳時代のものと判断できる遺構は今回検出されず、遺物の出土例も少ないため、集落の中心域からは離れているものと考えられる。弥生時代終末期に竪穴建物跡が複数棟確認された範囲でも遺構が確認されないことから、今回調査地での土地利用はこの時期に一旦絶したといえる。

**奈良時代** 奈良時代の遺構として溝2がある。調査区の西寄りに直線的に掘削された溝で、具体的な機能は不明なもの、埋土中には一定量の遺物が含まれていた。この後に続く平安時代末まで、主要な遺構はすべてこの溝より西側で検出されている。一方、弥生時代終末期に居住域として利用されていた東側は、中世まで積極的な土地利用はなかったようである。

**平安時代前期** 平安時代前期の遺構は溝5と溝6である。溝5は、断面U字形を呈し、直線的に掘削された溝で、何らかの区画を示している可能性がある。一方、溝6は、浅く不整形な溝で、その機能は不明であるが、溝5に近く、埋土に一定量の遺物を含んでいることから、これらの遺構の周辺で何らかの活動が行われていたことは確かであるが、土地利用としては限局的である。

**平安時代後期** 平安時代後期の遺構は井戸1・土坑6・溝4である。溝4は、幅7m、深さ1.6mの大型の溝で、何らかの区画を示すものと考えられる。溝4の東側では、調査区境付近で井戸1が検出されており、その周辺では時期不詳ながら畝状の浅い溝が多数検出されている。この畝状遺構が井戸と関連しているとすれば、溝4の東側は畝として利用されていた可能性がある。なお、井戸1は埋土に含まれる遺物の時期に幅があり、10世紀後半の遺物も含めていることから、平安時代前・中期にはすでに造られていた可能性がある。溝4の西側では、須恵器の甕などが一括廃棄された土坑6が検出されており、付近に建物などの居住域の存在を想起させる。建物の存在については、遺物の出

土が認められないため今回十分な検討ができなかったが、溝4の西側で検出されたピットには等間隔に並ぶものが複数存在し、規模は小さいものの柱穴として十分な深さを備えているものも多く存在することは重要である。発掘調査者は建物の存在について否定的であったが、これらのピットが掘立柱建物跡の一部である可能性もあり、時期等も含めて再検討の必要がある。今後の課題としたい。居住域としての利用が認められれば、溝4を境にして、西側に居住域、東側に畑作を中心とした生産域という土地利用の様相をとらえることが可能である。

**鎌倉時代** 中世の遺構として、鎌倉時代の遺物が出土した溝7・8がある。いずれも浅く不整形な溝で、明確な機能はわからないものの、溝7は西側で直角に曲がっており、何らかの区画を示しているものと考えられる。また、底面までの深さが、西側から東側にかけて低くなっている、水の流れを意識していた可能性がある。過去の美乃利遺跡の調査では、A地点で用水路の機能を持つ区画溝の存在が確認されており、溝7の機能を考える上で示唆的である。また、埋土からは調理具である羽釜や捏鉢が多く出土したことから、付近で継続的な煮炊きが行われたものと考えられる。いずれにしろ、集落の中心域は別の場所にあるものと考えられる。

## 第2節 美乃利遺跡の竪穴建物4について

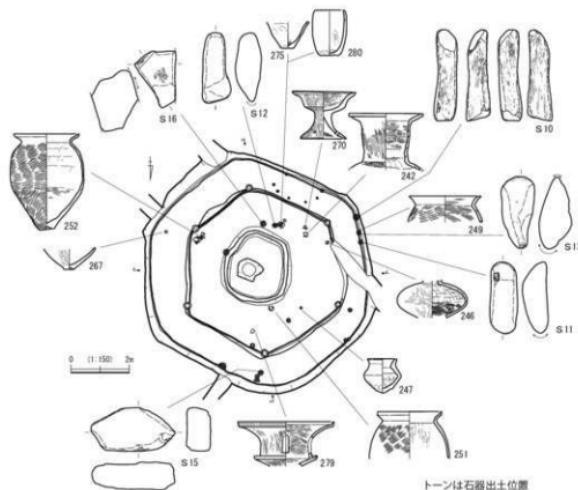
### 1.はじめに

美乃利遺跡からは弥生時代の竪穴建物跡が4棟検出された。そのうち竪穴建物4は、隅丸六角形の多角形プランに幅の広い屋内高床部をもち、土堤に囲まれた炉跡が確認できる、極めて特徴的な建物跡である。また多量の土器と共に砥石や敲石、台石といった石器類も多く出土している。そこで小稿では特徴的な要素を複数有する竪穴建物4の位置づけについて多少の検討を試みる。

### 2. 遺構・遺物の特徴

まず遺構の特徴から概観していく。竪穴建物4は報文のとおり、平面規模が7.55～8.01 mとなる隅丸六角形の建物跡である。隅丸六角形のような多角形プランの竪穴建物は、美乃利遺跡の調査において初検出である。竪穴建物に属する付帯施設としては、幅1 m前後の幅の広い屋内高床部をもち、床面と炉跡とを画する土堤が作られている点が特徴的である。土堤に囲まれた炉跡は直径2.4～2.7 mの円形であり、その中央から東寄りに掘り込みがみられる。掘り込みは深さ0.23 mの不整梢円形である。掘り込み内の堆積状況は、層厚2 cm程度で炭を多量に含む粘り気の強い黒色粘質土の下層と、砂礫を含む暗灰色砂質土の中層、そして被熱度の高い黄橙色粘質土の上層という3層構造である。これら3層は検出の際、層位間で混じりが少なく面的に良好に検出された。このことから自然堆積というより、人為的な層構造の形成をしていると見てよい。一方、下層の黒色粘質土は、掘り込みのみならず、炉跡全体で平面的に検出された。そのため土堤を盛り、掘り込みを形成した後に黒色粘質土を敷いていると考えられる。そうなると、土堤のめぐる炉跡全体に対して掘り込みが明らかに中央より東に寄っている状況は、当初から計画性をもって作られていると考えてよいであろう。

次に遺物の特徴を概観する。竪穴建物4では弥生時代後期末から終末期（庄内期）初頭の土器が多量に出土した。特筆すべきは、播磨地域以外からの搬入品や、製作技術や形状のみ影響を受けたいわゆる臨地製土器が一定量含まれている点である。他地域からの搬入品や臨地製土器の傾向としては、



第82図　堅穴建物4　遺物出土位置(遺物はS=1/10)

北東四国を中心とした中・東部瀬戸内地域からが比較的多く見てとれる。その中でも第62図246や259は胎土や器形から搬入品と考えられる。の中でも259は口縁端部の特徴的な形状と、茶褐色の胎土に角閃石や長石を多く含むことから「下川津B類土器」(菅原・梅木編2000)であり、高松平野からの搬入品と考えられる。また出土した土器は、中・東部瀬戸内地域からの影響だけではない。第63図279は複合2段構成の装飾器台であり、その特徴的な器形から近畿北部系土器の中でも「西谷2式」(高野2006)であると考えられる。しかし播磨地城在地の土を用いている点や、西谷2式の土器には見られない砲弾形の透孔、受部の径が小さいことなど、本来の器形や特徴とは異なるところが多い。そのため、臨地製土器と考えられる。

これらのようなか・東部瀬戸内地域や近畿北部からの影響をもつ土器が出土する一方で、当遺跡より西に位置する姫路市・長崎遺跡にみるような、畿内地域からの影響を受けた土器が堅穴建物4を含め美乃利遺跡全体で少ないことは特徴的であろう。

石器においても特徴的な様相がみられる。堅穴建物4からは石鎌や石臼、石斧といった一般的な生活道具としての利器は出土せず、砥石や敲石、台石といった生産工具が多く出土した。その中でも注目すべきは石器の出土位置である。第82図は堅穴建物4の床面上から出土した土器と石器の出土位置図である。石器の出土位置は14点中9点が屋内高床部からの出土であり、建物内で石器の置き場所が決まっていたと考えることができる。さらに、石器の出土位置は比較的まとまっている傾向にあり、屋内高床部に3群(北側4点、北西側2点、南西側3点)、床面に1群(炉跡南側2点)の計4群が形成されている。そしてこれらの石器の配置は、ほぼ全てが建物の西側半分に集中しており、炉跡の掘り込みが逆に東側に偏っていることを踏まえると、屋内での作業時の作業者の配置を示している可能性がある。



第83図 錛冶炉跡断面の解釈

### 3. 壺穴建物4のもつ役割

以上、壺穴建物4の構造・遺物の双方の特徴を概観した。これらの特徴を踏まえた結果から、壺穴建物4の利用方法として鍛冶工房（鍛冶遺構）の可能性が考えられる。土壌に囲まれた炉跡に掘り込みをもち、そこに炭を多量に含む黒色粘土、砂礫を含む砂質土、そして粘質土という順に意図的に層構造を形成する状況は、鍛冶炉の地下構造を推定することができる（第83図）。とくに掘り込み下層は、いわゆるカーボン・ベッドである可能性が高く、防湿のための構造と捉えることができる。また、出土遺物では石器の工具類は鍛冶工具と考えられ、台石を鉄床石、敲石を石鎚、砥石は鉄器研磨用と想定できる。その中でも鍛冶工房の可能性へのアプローチとして、台石と砥石の兼用品であるS16にみられる2条の溝状痕は重要である（写真25）。溝状痕は、幅が0.8～1.5 mmのV字状横断面であり、溝内には細かな擦痕が見られ、砥石として使用された痕跡と考えられる。こうした痕跡は、刃先のような鋭利なものが接触することで生じると考えられている（田村2002、森2016）。このことから、砥石を用いて溝状痕が残るような作業をおこなうのは、一般的には磨製石器や鉄器、青銅器の類と考えられる。当調査において炉内の土壌を水洗選別したところ、長さ0.8～7.0 mmの微小鉄片を少量確認することができ（写真26）、これらの中には薄い板状の鉄片も散見できる。金属学的調査を行っておらず、金属組織や化学組成は不明であるが、これらの鉄片はいずれも磁着することから、鉄器そのものないし鉄器生産工程において生じたものである可能性が考えられる。このことから、S16の溝状痕は鉄器によるものである可能性が高い。

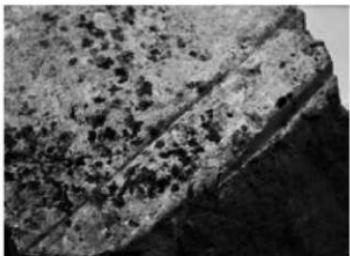


写真25 S16の溝状痕



写真26 微小鉄片

#### 4. おわりに

以上、美乃利遺跡における堅穴建物4の役割について、若干の検討を試みた。その結果、小稿では鍛冶工房としての可能性を提示する。しかしながら、肝心の鉄器や鉄器製作を裏付けるだけの明確な鉄片は出土しなかった。今回の調査全体で見ると、堅穴建物2から棒状の鉄片（M1）が1点出土しているものの、堅穴建物4の鍛冶遺構との関係性は不明である。

出土土器からの視点としては、北東四国を中心とした、中・東部瀬戸内地域の影響をもつ土器が含まれることに着目した。村上恭通氏は、弥生時代中期後葉以降の瀬戸内地域の鉄器生産について、北部九州との拠点間集落の交渉（生産・流通）の維持領域の東端を「播磨—讃岐—阿波を結ぶ南北ライン」と想定しており（村上2000）、堅穴建物4から出土した土器が、鍛冶工房である可能性を考える上で一つの要素となり得ると考えることもできる。いずれにせよ、鉄器出土の乏しい美乃利遺跡の鍛冶工房は、現状の調査結果からは鍛冶工房の「可能性」に留めたほうが良いであろう。今後のさらなる調査・研究に期待したい。

最後に、小稿の執筆にあたり、森岡秀人氏より多くの御教示を賜りました。末筆ながら感謝の意を申し上げます。

#### ＜引用・参考文献＞

- 伊藤宏幸 2017 「東部瀬戸内地域における鉄器生産の様相—淡路島五斗長垣内遺跡の鍛冶遺構を中心に—」『瀬戸内海考古学研究会第7回公開大会「予稿集』瀬戸内海考古学研究会  
 加古川市教育委員会 1992 『満之口遺跡発掘調査報告書I』  
 加古川市教育委員会 2011 『石守庵寺』  
 香芝市二上山博物館編 2006 『シンボジウム 邪馬台国時代の阿波・讃岐・播磨と大和 資料集』  
 ふたかみ邪馬台国シンボジウム6 香芝市教育委員会  
 香芝市二上山博物館編 2007 『シンボジウム 邪馬台国時代の丹波・丹後・但馬と大和 資料集』  
 ふたかみ邪馬台国シンボジウム7 香芝市教育委員会  
 香芝市二上山博物館編 2011 『京都府出土の装飾器台について』『京都府埋蔵文化財論集』第2集  
 岸岡貴英 1991 『京都府出土の装飾器台について』『京都府埋蔵文化財論集』第2集  
 (附) 京都府埋蔵文化財調査研究センター  
 桐井理揮 2016 「弥生時代後期における近畿北部系土器の展開」『京都府埋蔵文化財論集』第7集  
 (附) 京都府埋蔵文化財調査研究センター  
 古代の土器研究会 1992 『古代の土器I 都城の土器集成』  
 菅原康夫・梅木謙一編 2009 『弥生土器の様式と編年 四国編』木耳社  
 高野陽子 2006 『1万後地へ 振回線文系土器の様式と変遷ー』『古式土器の年代学』  
 (附) 大阪府文化財センター  
 高橋一夫 1994 『手培形土器の研究』六一書房  
 兵庫県教育委員会 2006 『志方窯跡群I—中谷支群I』  
 兵庫県教育委員会 2008 『石守庵寺』  
 兵庫県教育委員会 2010 『神野大林窯跡群』  
 兵庫県教育委員会 2011 『坂元窯跡III』  
 兵庫県教育委員会 2011 『神出窑跡群III』  
 平安学園考古学クラブ 1966 『陶邑古窯址群I』  
 正岡睦夫・松本岩雄編 1992 『弥生土器の様式と編年 山陽・山陰編』木耳社  
 松下 勝 1981 『加古川流域の遺跡』『日本の古代遺跡3 兵庫南部』保育社  
 村上恭通 1999 『倭人と鐵の考古学』青木書店  
 村上恭通 2000 『鉄器生産・流通と社会変革—古墳時代の開始をめぐる諸前提ー』『古墳時代像を見なおす』青木書店  
 村上恭通 2007 『古代国家成立過程と鉄器生産』青木書店  
 村田裕一 2002 『工具一砾石ー』『考古資料大觀』第9巻 小学館  
 森 貴教 2016 『石右の消費形態からみた鉄器化とその意義—弥生時代北部九州を対象としてー』『考古学は科学か 上』田中良之先生追悼論文集編集委員会  
 渡辺 昇 2009 『おわりに』『坂元窯跡II』兵庫県教育委員会